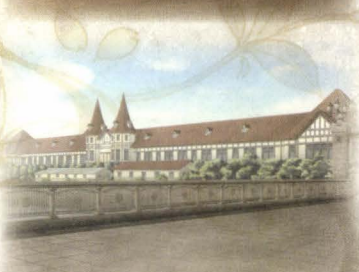
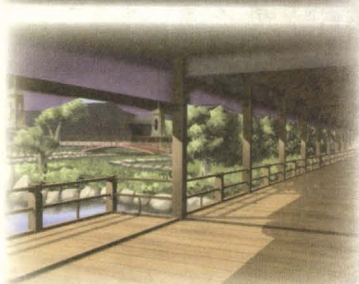
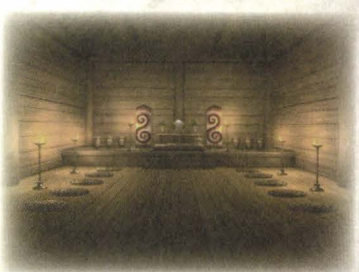
転生彩画帳
久遠の絆
THE ORIGIN

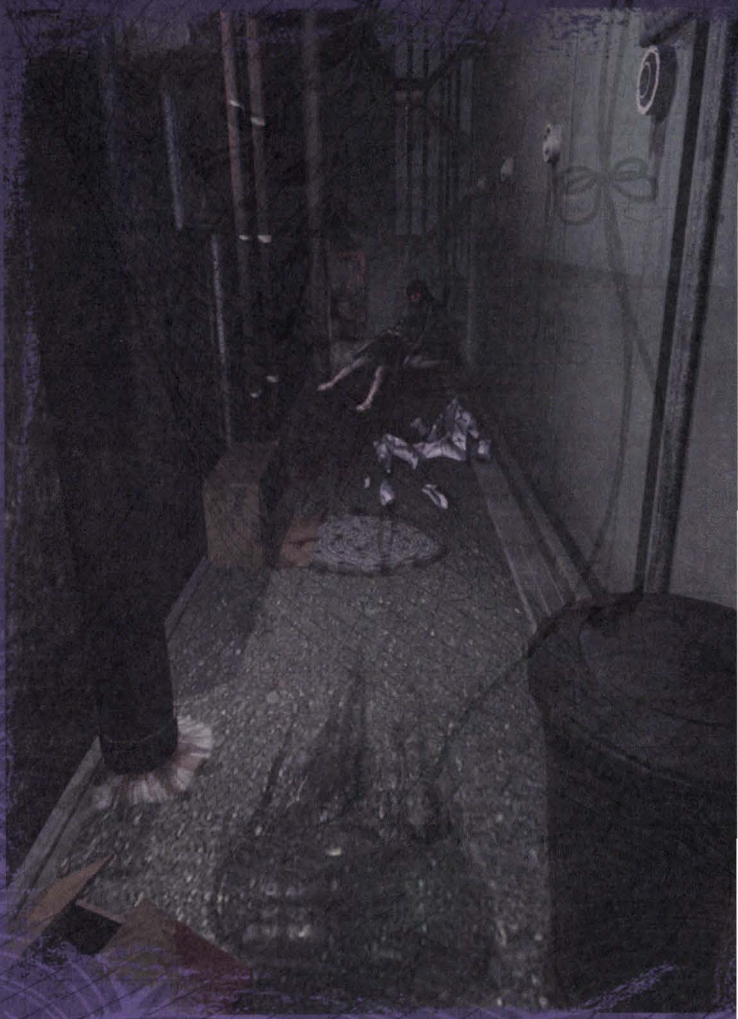
どうして俺は、君を見ると
こんなにも不安になるんだ？
どうして俺は、君をこんなにも
懐かしく感じるんだ？

久遠の絆
くおんきずな
THE ORIGIN
This is the grand story which lasted for thousands of years. Can we break the taboo?
転生彩画帳

目次

一章　彩画集

現代編

物語の舞台は、関東近郊のとある地方都市に建つ秋津学園。ここに通う主人公・御門武は、同居中の幼なじみ・栞や担任教師・沙夜、親友・汰一らに囲まれて楽しい学園生活を送っていた。しかし、彼のクラスに謎多き転校生・万葉がやってきた頃から、武の周囲で不気味な出来事が起こり始める。街を騒がせる猟奇的な殺人事件、狂気に満ちた血生臭い悪夢、武と万葉にしか見えない化け物……。やがて武は、それらの原因が自身の魂に刻まれた運命にあることを知り、オカルトに詳しい先輩・聡子の力を借りて生まれ変わる前の記憶を取り戻そうと決意するのだった……。

高原(たかはら) 万葉(まよう)

「一応聞いておくけど、この家の者達はどうなったの？」

「そう……いいわ、

一応覚悟はしていたし貴方のせいじゃないわ。

悲観しないで。むしろ清々したぐらいなんだから」

「ふふふ、驚いているの？
本当に、何千年も
生きているくせに
そう言う所だけは妙に
人間臭いのね。
でも本当よ。
私は清々しているの」

「あっ！　なっ、なにを!?」
「ゴウゥ……グルル……
女……繋がる……」
「やめてっ、武！　目をさまして!!」
「シロい……シロイ……あし……
うま……ソウ」
「やっ、いやあっ！」

「ああっ、嫌っ……恥ずかしいっ」
「すぅ……はぁ～……すぅ……」
「い……嫌っ……駄目っ。
……匂いを……嗅がないで！」

「吾こそは三国伝来白面金毛九尾の狐精。
全ての精をもって国津神、天津神、天地精霊の
全てをしろしめす存在（もの）なり！」

「醜き土蜘蛛の眷属よ。
今こそ神の裁きを汝等に与えん！」

栞の顔が驚愕と羞恥に染まる。
だが、すぐにその表情は柔らかな聖母の微笑みを
取り戻すと、彼女は両手を広げ、
その美しい胸を惜しげもなくさらして
その腕の中に杵築を迎え入れた。
斎栞（いつき しおり）

「コレ、私のキスで大きくなったんだよね？」
「うっ、それはまあ……そうだけど……」
「じゃあこれ……私のだよね？」

「ずっと……
ずっと……
千年、
待ち望んでたんだよ？」
「私……
こうして……
たけちゃんと
一緒になれる
日のこと……
ずっと、ずっと
待ってたの……」

常磐沙夜（ときわさや）
「あれぇ？
止めちゃっていいの？
キミのおちんちんは
そうは
言ってないみたいよ」

「あなたのことを愛した、
一人の愚かな半妖の女がいたことを……
どうか、忘れないでいて……」

「ああ……武……
武が私の乳首を舐めてる……。
おっぱいに顔を埋めてる……。
武……武ぅうっ、好き……
好きっ、大好きよ武」

「こんろは……ちゅぷ
わらひにたべはへて……」
「うあっ……さ……沙夜……
なんてエロイ格好……」
「らって……武のおひんひん……
見てはらどうひても
たべはくなっひゃっひゃんらもん……」

「私……私のまんまんが……
武のを食べてる……。
奥までずっぷり……
食べちゃってるぅぅ……」
「————……っは！
はぁ、はぁ、はぁ、
はあっ……
武……私の
ご主人さま……」

吉川絵理（よしかわえり）

「我は求め訴えたり。
おお、汝精霊アシエル
天の軍勢の
最も偉大にして
理解しがたき
主なる神の
最も高貴なる
御名に於いて。
我は汝を召喚す」

「私たちの躰と心で、戦いに疲れ傷ついた
彼の心と体を癒すのよ。そうすればきっと、
彼は目覚めてくれるわ」

「分かったわママ。
私、パパの為ならなんだってする！」

天野(あまの)聡子(さとこ)

「分かる？　感じる？
私たちの声……私たちの愛……
あなたを求める心の叫びが」

「武……分かる？
……『ここ』が……
あなたの帰る所なのよ」

「きゃふぅっ、こんなに、気持ちよかったなんてぇ。
パパあっ、もっと……あはあっ……もっと……」
「あっ……あんっ……あんっ……。
ううん、ずるい雛ばっかり。
ねぇ、武。今度は私にもして……」

「うわぁぁ、嫌らしい腰使いぃ。
そうか、女の人が上に乗ってやるときは
そうやって腰を使えばいいのね。さすがママ」

「んんん〜、ばかぁっ。知らないっ」

一章　彩画集　神代編

天上に住む天津神や地上を支配する国津神など、多くの神々が活躍していた神話の時代。出雲（現在の島根県）の葦原中津国に住む若き国津神・武日照は、邪神・土蜘蛛一族との戦いで力不足を痛感して王の後継者争いから身を引き、従妹の玉葉ら親しい女たちと遊び呆ける日々を送っていた。そんな彼の元に、ある日天津神が住む高天原からの使者として、伯父の建御雷命が訪れる。彼から所在不明の神剣・天叢雲を探すよう命じられたのをきっかけに、武日照は葦原中津国を我が物にしようと目論む玉葉の父・天若日子のクーデター計画に巻き込まれてしまうのだが……。

玉葉
ギョク ヨウ
「きゃあー、あはははっ。
んもうっ、くすぐったいったらぁオサキ」
「おーい、いい加減こっちに戻ってこーい。
そろそろ昼飯だぞー」
「えー、やだぁ。
私まだオサキと遊びたーい」

「お兄さま……よかった……
気がつかれた……」
「そうか……。
俺の名を呼んでいてくれたのはお前か」

「じゃあ……
武……日照。
……今度は………
あなたのを……
ください……」
「身も心も……
貴方のものだと言う
しるしを……
ください……」

「う、うしろから……全部見えちゃう……」
「ああ、まる見えだよ。
玉葉の可愛いお尻の穴も、
いやらしい汁だらけの素敵な女陰もね」

「これだ……この女だ……
吾が肉体を宿すに
ふさわしい……」
「嫌っ、止めてください、
建御名方どの」
「孕め……吾の子を……
須佐の姫御子よ……。
吾が手に……
地上の覇権を……与えよ！」

「い……痛いの……お腹が……。
いや……だめ……
逝かないで……薙……」

「あ……ごめんなさい。
楽しくって、つい。
これ、
お兄さまが作ったの？」

「ヘタなのは勘弁しろよ。
……お前には
俺と若日子どののことで
心配をかけたからな」

「くそっ……
遠矢か……」

「お兄さまっ、しっかりなさって、お兄さま！」

この敵は土蜘蛛のような
単純な敵ではない。
より狡猾で、
より強力な武器をもった敵だった。
おそらくは……
建御雷神の言っていた……
正体不明の敵……。

「玉……葉……にげ……ろ……」

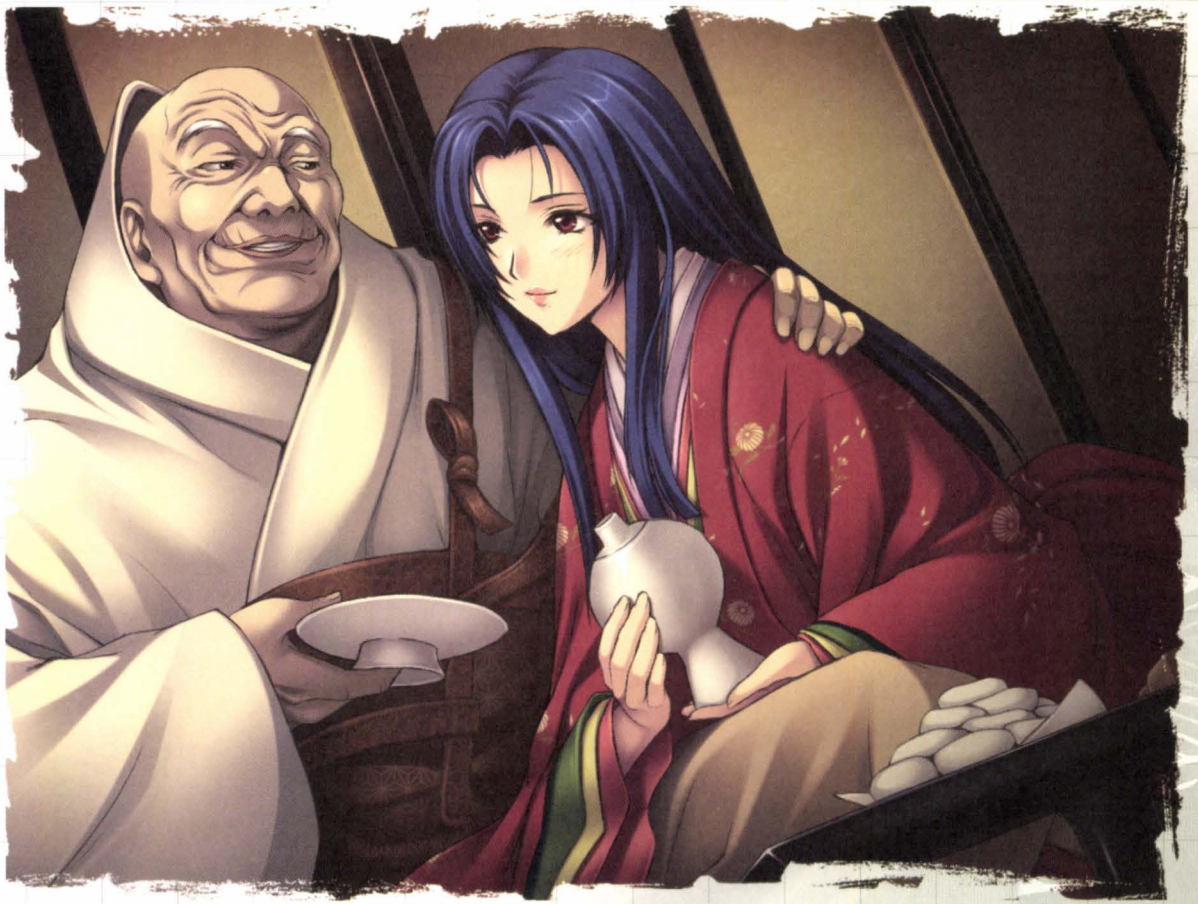
「この……剣は……」
「俺……は……
この剣を知っている?」

一章　彩画集　平安編

時は平安時代末期の久寿二年（1155年）、朝廷が二派に分かれて争った保元の乱前夜の物語。先の天皇・崇徳上皇の長男で、次の天皇の筆頭候補と目されながら朝廷内で冷遇されている主人公の重仁親王は、自身の霊能力で物の怪を退治することで己の存在理由を見つけ出そうとしていた。そんなある日、京の街角で式神を使う美しい白拍子と出会った重仁は、彼女に従う禍々しい妖狐の影を目撃する。さらにその数日後、白拍子が玉藻前と名乗って朝廷随一の実力者・鳥羽法皇の側女になったことから、彼女を気に入った崇徳と鳥羽の争いが起きてしまうのだが……。

玉藻前（たまもまえ）

「奇妙なヤツがこちらを
覗いていたな。
土蜘蛛か？」
「いえ、それにしては
霊気が妙です。
土蜘蛛特有の
骨を噛むような感じではなく、
むしろなにやら懐かしいような……」

（あの視線の主がここに居るの？
なら……そいつが
土蜘蛛の宿主に間違いないわ）
（それにしても、
あんなに大きな気配なんて……）

（私がこの国の土蜘蛛を一掃した暁には、
我らからこの国を奪い取った
天津神々の後胤たるお前たち皇族も
根絶やしにしてやる）

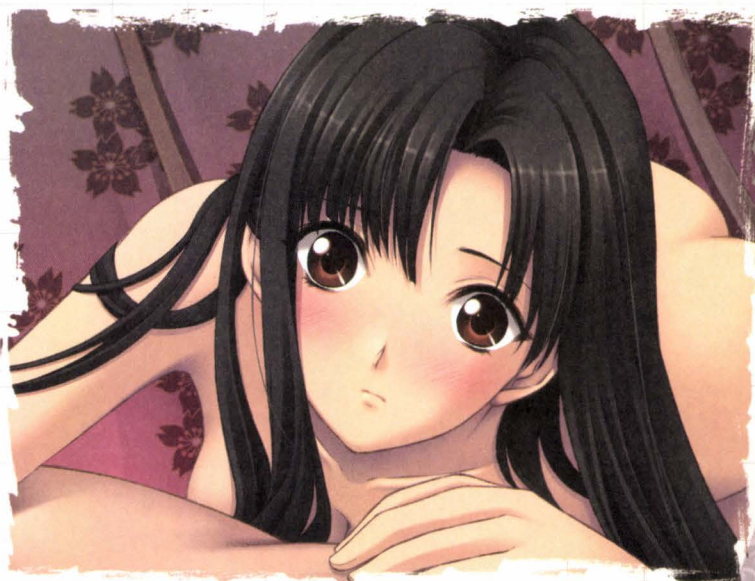
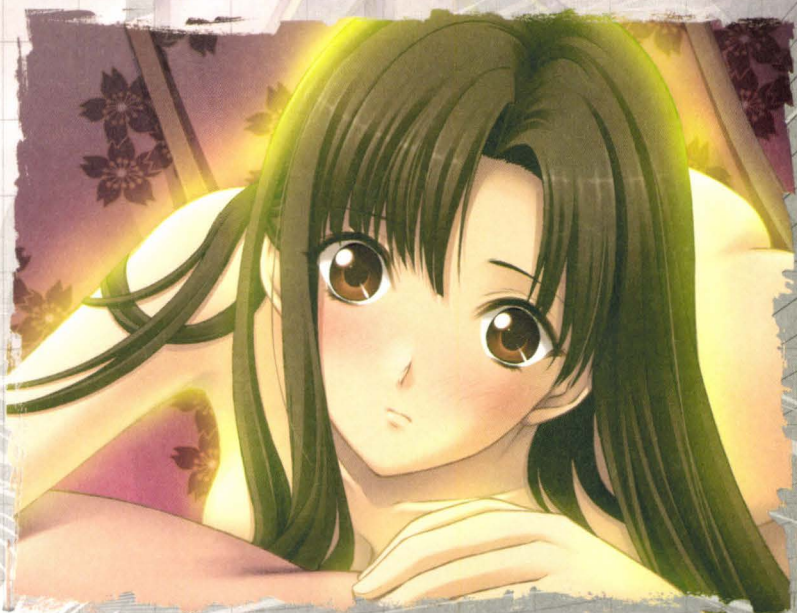
「ぷっ」
「くっ」
「あはははは」
「うふふふふふ」
「あらあら、まあ大変。
大丈夫でございますか、重仁さま

「私は貴女が
好きなのです玉葉」
「だから……
軽蔑されるのを
承知で告白します。
……貴女を抱きたい」

「行かないで……」
「玉葉……？」
「お願いよ、
私を置いて
どこにも
行かないで……」

「お兄さま……許してください……。
私を呼ぶお兄さまの声が
聞こえていたのに、
こんなに遅くなってしまって……。
助けてあげられなくてご免なさい」
「玉藻前……もしかして、
あなたの探していたと言うのは……」
「う……そうよ、
この方が私の何よりも大切な人。
私の許嫁……武日照お兄さま」

「私は例え冥府に落ちても
私の魂はきっと甦る。
そして時の彼方まで貴方を追いつめて……
きっと滅ぼすわ」
「……それでもいい……
時の向こうで再び貴女と会えるならば……」

「ああ……ちょうだい……。
もっと……もっと美味しいの……
あなたの赤くて熱いのを……
暲子にちょうだい……」
暲子内親王
あきこないしんのう

寿子
ひさこ
「お兄さま……ここが苦しいのですね……」
「分かりました、寿子が……
お兄さまの毒を吸い出してさしあげますわ」

「うふふ、
重仁どのの肉棒、
まっかっかよ。
可愛い」

「ああん、今度は
寿子にも
なめさせてください、
お願いです～」

「うふっ、舐めるよりも、
もう入れたくて
仕方ない
みたいだけど？」

「無駄だよみんな……
私は神剣のありかは
決して話さない」

「引くがいい土蜘蛛。
私は……
こんな辱めには
屈しない」

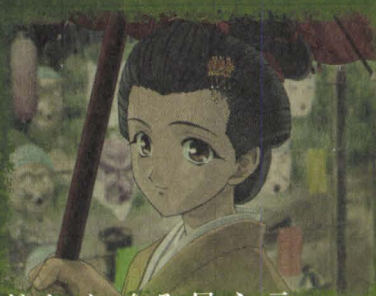
「くっ……遅かったか……」
「……惨いことを……」
「ふふふ、須佐の神姫とも
あろうお方が異な事を申される」
「人が魚をさばくときに腑を出すのを
無惨だと感じるじゃろうか？」

「うぬぬぬ鳥羽めぇぇ。
我が父ながら
いつもいつも
やり口が汚い」
「今度は重仁を騙して
我が累系を帝に
つけさせぬ気か」

「うひゃひゃひゃ、うめぇっ。
うめぇなぁおい！
やっぱり女の乳は
生きてる女のに限るぜぇ」

「はあっあああぁーっ！
あぁっ、大きいっ……
私の……真処が……広がって……
はち切れそうっ」

「あはははは。
やったっ！
やったわっ！
神の子を
屈服させてやった！」

「よくやったわ、
玉藻前。
さあ、
あそこへいって
好きなだけ
男どもと
まぐわって
来るがいい、
この雌犬めっ！」

一章　彩画集

元禄編

物語が始まるのは、江戸幕府が成立してからちょうど百年目の元禄十六年（１７０３年）。表向きはただの浪人として江戸で暮らす主人公・柾崇は、裏では公儀隠密部隊・郭公（かっこう）に属し、幕府転覆を狙う者と日々暗闘を繰り広げていた。そんなある日、誘拐された姫君を捜すよう命じられた柾崇は、探索の末に〝理趣品講〟（りしゅぼんこう）という怪しい宗教の関与を突き止める。その本拠で、巨大な虎が神主に変化するのを目撃したことから柾崇は理趣品講に追われる身となり、遊郭の吉原へ逃げ込んだところを茉璃と名乗る花魁に助けられたのだが……。

茉璃（まり）
「馬鹿ではありませんわ。私はお兄さまと出会うこと、お兄さまのものになることだけを願って生きてきたのですもの」

「花魁、すいませんがそろそろ今晩のお相手を決めちゃくれませんかねぇ」
「……だって、みんなつまらないんですもの」

「うふふ、どうでありんす？
これが姉さんたちから教えてもらった
吉原の閨の術でありんす」

「……不思議だな」
「ついこの前までの俺は独りぼっちだった」
「親友という名の人殺しの仲間と母親という
本心をうち明けられない家族は居ても、
俺の心はずっとずっと一人ぼっちだった……」
「くす。……私もよ」
「私も、肉親という冷酷な金の亡者に育てられて、
摩多羅に拾われてからは理趣品講という
狂った連中の中で生きてきた……」
「誰にも触れないように、触れられないように、
自分を偽り、人を偽り、孤独でいようとして生きてきた……」

「私の……世界は柾崇さまの側だけです……」

「茉璃……」

「茉璃は例え、柾崇さまと同じ
血の呪いに
捕らわれる事に
なっても平気です。
……だって、独りぼっちではないんですもの」

「ですからどうか……
私を柾崇さまの女にしてくださいませ」

「どうだ茉璃っ。俺の摩羅の味は?」
「くあんっ、太い……太くて……気持ちいい……」
この間開通したばかりの茉璃の女陰は
すでに俺の男根になじんで
みっちりと肉棒をくわえ込んで締め付けてくる。

「妻として……俺と一緒に死んでくれるか？」
「……はい、あなた。
……うれしい……初めて……妻……と……」

「ああ……美味しい……
柾崇さまのは……
じゅる……
美味しいれふぅ……」
「ぎゃはははは、
そうかい、美味しいかい。
たんと召し上がりな。
お嬢ちゃんの大好きな
『柾崇さまの珍宝』をよ」
初鹿野由布（はじかのゆう）

「早く、早くこの縄を
ほどいてくださいませ！」
「生憎だが由布どの……
そいつは出来ねぇ相談だ」
「なぜ……？」
「……俺ぁよ。もう郭公は止めたんだ。
これからは人外の獣として生きることに決めたんだよ」

「あ……んん……ちゅぱ……好き……
好きです……柾崇さま……」
（ああ……ゆう……由布……。
俺の……可愛い……由布……）
由布。そうだ……彼女の名前は由布だ。
俺の由布。幼なじみで大切な妹……。
そして俺の許嫁。
俺のわがままで
沢山辛い目にあわせた……
けれど大好きだった女の名前だ。

「由布……
はや……く……にげ……」
「……で、できません。
柾崇さまを置いて逃げるなど……」

「頼む……このままお前の中で……
お前の中で死なせてくれ……」
(由布っ、今だっ、やれっ!
躰が動かない今なら
まだ間に合うっ!!)
「くっ……柾崇さま……おさらばっ!」

吉原の大火は雨雲を呼んで、
いつしか雨が降り出していた。

由布は
心臓の鼓動を止めた俺の
躰の上にかぶさって
いつまでも泣き続けていた。

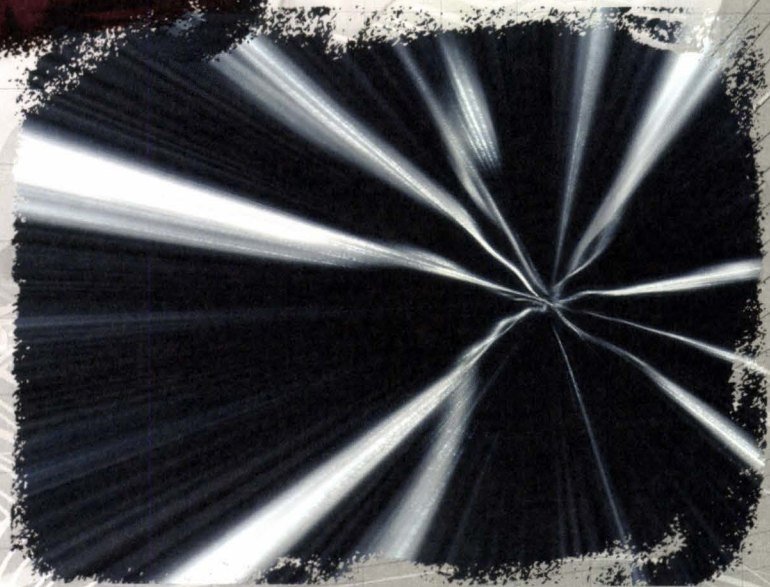
その由布の躰の温かさを胸に感じながら
俺は静かに消えていったのだった。

一章　彩画集
昭和編

太平洋戦争が敗色濃厚になり、日本全土が空襲の被害を受けるようになった昭和二十年（１９４５年）初夏。陸軍の特務中尉として原子爆弾を研究してきた主人公・鷹臣は、開発計画の失敗後に次の作戦に参加するため、神剣を御神体とすることで知られる愛知県の熱田神宮へと向かう。そこで彼を待っていたのは、気が触れた犬神憑きの巫女・ミサキとの出会いだった。護衛として彼女を守り、さらにミサキに原子物理学の核分裂を理解させるよう命じられた鷹臣は、途方に暮れながらも任務を遂行する。しかし２人の前に、やがてミサキの命を狙う謎の山伏が現れて……。

ミサキ

「拗ねないの。
千紗ちゃんがたかおみの事を
大好きなのと同じぐらい、
みんなもたかおみの事が
好きなんだから。
だから、由香里ちゃんの
気持ちも分かってあげなきゃ」

「あの蜘蛛がやられた所が
痛いんや……それって、
うちが、あの化け物と
同じや……ってことやろ？」

天野由香里
あまのゆかり
「……由香里。原爆を防いだら君は……」
「大丈夫。私を生んでくれた
お二人の強い絆さえあれば
またいつか、会う事が出来ますから」

千紗
ちさ
「鷹臣さま……。
ふふふ、鷹さま、
うちのおとーちゃんと
同じ匂いしてはる」
「え？」
「お日様の匂いや。
……おとーちゃん、
おかーちゃん。
うち……
鷹臣さまと先に行くわ……
堪忍な」

十三歳の初夏、ハンガリーで起きた事件。
天野聡子衝撃の過去とは!?

二章
カシスの庭
カラー復刻版

『久遠の絆 Love&Death』に
収録されたノベルがここに復活!

作:加藤直樹
画:TEAM KUON

Prologue

いつの頃からだろうか。

私にはこの世界が奇妙に現実感のないものに思えて仕方がない。

父も、母も、とても大好きなのに。
それでも、どこか他人めいてしまう気がするのはどうしてなんだろう?

いつの頃からだろうか。
私を呼ぶ声が聞こえ始めたのは。

小学校を卒業する少し前ぐらいからかもしれない。

父の転勤にそって日本に帰って来てから、誰かがどこかで私を呼び続けている…。

けれど、何と呼んでいるのか分からない。
【[illegible]】
それは自分の名前。それだけは分かる。
なのに、その言葉が分からない。
とても懐かしくて、心が暖かくなるような声。慕わしげな響き…。
『ああ、私の保護者はこの人しかいない』
そう感じさせるような、温かで大きな存在感。
なのに、どうしてこの声を聞くたびに、こんなにも不安になるのだろう?
　自分が、たった一人で、この世界のすべてのものから切り離されてしまうような気持ちになるのはなぜ?

　どうしてなの?
こんなにも…、好きなのに。

I章

「ほんとに、何ぶん初めての事だから、どうしたらいいか分からなくて。
　何か困った事があったら遠慮なく言ってちょうだいね」
　黒い修道女のベールを頭にかぶったその女性は、よどみない綺麗なドイツ語で私に微笑みかけてくれた。
「はい。ありがとうございます、シスター……」
「マドレーヌよ」
「はい。シスター・マドレーヌ」
　いい感じの人だわ。
　細い顎のラインにかかる美しい金髪の揺れ動きを見つめながら、ほっとため息をついた。
　二十代も後半だと聞いたシスターは、『厳めしい人たち』という印象しかなかった私の中の修道女のイメージを打ち壊すほどに綺麗だった。
　ここに来るまで、ずっと抱き続けていたなれない生活への不安が、一気に軽くなった気がした。
「ほんとに、SATOKOがドイツ語が上手でよかったわ。日本からの留学生だなんて、初めはいったいどうしようかと…」
「どうしてですか?」
「だって、言葉の問題とか、文化の違いとか色々あるでしょう?
第一、ここには『オハシ』がないんですもの。食事ができなかったら大変よ…って」
「え? やだシスター、変な事知ってるんですね。でも私、小さな頃からずっとドイツに住んでいましたから、オハシは今でも苦手なんです。うふふ」
「あ、あら、そうなの? でも私、アジアのほうだと『ハシ』っていう串で食事をするって聞いてたのよ? でも、それなら食事にスープがある場合はどうしたらいいのかしら? って、考えて…。
　そうよねぇ、やっぱり串だけで食事をするのはヘンよねぇ」
「ええ、ヘンですね。くすくすくす」
「うふふふふ」

　六月の光は眩しかった。
　湖から吹く風も、カシスの花の甘い匂いが漂う古い庭の緑も、すべてが輝いていて、とても綺麗だった。
　初めてここに着いた時の不安はいつしか消えて、私はむしろここで暮らせる事にワクワクし始めていた。
　ギゼラスペルム女学院。
　ハンガリーの首都・ブダペストから電車で一時間五十分ほど離れたヴェスプレームという町の外れにあるこの学校は、同じ敷地内にある女子修道院の経営する、小さなカトリック系の女学院だった。
　一時、日本に帰国していた私は、とある特別な事情から、それまで在籍していた私学の中学を中退し、この古くて厳めしい石の壁に囲まれた中世のお城のような女学院へと留学する事になったのだ。
「院長先生へのご挨拶は済んで?」
「はい。父からの手紙をお渡ししておきました。…本当は父が直接にご挨拶しなくちゃいけないんですけど」
　ギゼラスペルム女学院の院長先生は、シスター・ラーバ先生。元はカトリックでも珍しい女性の除霊師(エクソシスト)だったらしい。
　高齢のため今は除霊師を引退し、ここに修道院を開いて暮らしているのだとか。
「それはいいのよ別に。本当にしっかりしてるのね、SATOKOさん。お父様…、外交官でいらっしゃるものね。お仕事が忙しいのは仕方がないわ。寂しいでしょうけど、お父様の事も分かってあげてね」
「あ、それは大丈夫です先生。そういうのはもうなれっこで、…全然平気なんです私」
「まあ…」
　私の言葉を聞くと、シスター・マドレーヌは眉をひそめて

小さなため息をついた。
でもそれは本当の事なのだ。
外交官の父は任地であったドイツで母と巡り会い、そこで私が生まれたのだ。
（ただし、血統的には母方のひいおばぁちゃんが純粋な日本人だったとかで、私は1／4ドイツの血が混じったドイツ系四世（ハーフクオーター）？　というわけの分からないモノらしいけど…）
でも、当時から仕事の忙しかった父は、それにつきそう母と一緒に世界中を飛び回る事が多かった。
代わって私を育ててくれたのが、ドイツに住む日系二世のおばあちゃんなのだ。
だから私には父や母がそばにいない事のほうが普通だったし、逆におばあちゃんが死んで日本に行ってからのほうが、いつも両親の顔が近くにあって、違和感を覚えたりもしたものだ。
…そう考えるとヘンよね。
だって、そりゃあお父様やお母様は好きだけど、どこかしっくり来ない感じがするのに、どうして『あの声』だけは…あの声がするとこんなにも落ち着くんだろう？
落ち着くけど…、どうしてこんなにせつない…、いけない事をしている気持ちになるんだろう？
そして…。

「SATOKO、大丈夫ですか？」
思いのほか、長い間考えにふけっていたのかもしれない。
急にうつむいてしゃべらなくなった私の様子を別の意味に誤解したのか、シスター・マドレーヌが心配そうに私の顔をのぞき込んできた。
「あ、ええ、大丈夫です。ちょっと、ぼぅっとしてただけですから」
「そう？」
シスターは、まだ形のよい眉をひそめて私の顔を見つめている。
「大丈夫ですって。それより先生、早く私のクラスを紹介してくださいな」
そう言うやいなや、私は半ば無理矢理にシスターの手を引っ張って、緑のツタのからまる古い校舎の中に飛び込んでいった。
私の十三歳の日の青春は、輝くカシスの庭の中にあった。

「…というわけで、今日からあなた達の仲間になるSATOKOよ。みんな仲よくしてあげてね」
「天野聡子です。どうかよろしく」
「…………」
なんだろ？　反応がないなぁ。
ハンガリーでは一応ドイツ語でも通じるって聞いたのに。
それとも日本人が珍しいのかしら？
口をぽかんと開けたままこちらを見つめている子達を眺めて、ぼんやりとそんな事を考えていると、
「あ、あの…。SATO…A、AMA…？」
グレープラチナの髪の少女がおずおずと声をかけて来てくれた。
「天野聡子よ。よろしくね」
「あ、リュビツァよ。よろしくね、サト。不思議な響きの言葉ね。日本の名前なの？」
「そうよ。意味はミルヒシュトラーヘンの事なのよ」
「天の川（ミルヒシュトラーヘン）!?
すてき。日本の名前ってロマンチックなのね」
リュビツァと名乗った女の子は、どこかウットリとした視線を宙にさまよわせてつぶやいた。
軽い挨拶がわりのつもりだったのに、そんなリアクションをされると話を振ったこっちのほうが気恥ずかしくなってくる。
ちょっと作り過ぎたかな？　でも意味は間違ってないし…。
「そ、そうかな？」
私は返す言葉が見つからずに、『えへへ』と笑って鼻の頭をポリポリと指で掻いた。
「ああ、放っといていいわよ。その子はいつもそんなんだから」
どこか笑いを含んだその声を発したのは、リュビツァの隣に座るサラサラの輝くハニーブロンドをショートボブにカットした美少女だった。
「アンタもいい加減に卒業しなさいよね、そういうの。だからいつまでたってもネンネだって言われんのよ、リュビツァは。そんなんじゃ、いつまでたっても処女のまんまよ」
まるで宗教画の天使が抜けて出て来たような顔から、信じられないようなセリフがポンポン飛び出してきた。
一瞬、ここがミッションスクール（それも女子修道院の中の！）だという事を忘れてしまったほどだ。
「ひどい、セニエ。なんて事を言うの。男の方だなんて…私、そんな不道徳なことしないわ。お兄さま以外の男の人なんて見るだけでもイヤ。話もしたくないもの！」
「でた。また麗しの『ミローシュお兄さま』ですかぁ？　アンタ、そっちのほうがよっぽど『不道徳』っポイわよ。分かってんの？」
「そんな、セニエ………、ひどいわッ」
一見、弱気な優等生のように見えたリュビツァが一転、語気も荒くセニエという名の美少女とケンケンガクガクの言い合いを始めた。
ドイツ語とハンガリー語と、おそらくセルボ・クロアチア語と思われる言葉が教室に飛び交ってわけが分かんない感じになった。
でもさ、どうでもいいけど…なんか、忘れられてる気がするのよね私。
どうしようかなぁ…と考え込んでいたところで、マドレーヌ先生の声が彼女たちの激闘の間に割り込んできた。
「ハイ、ハイ、ハイ、ハイ。そのへんでヤメーッ。SATOKOが驚いているでしょうが」
「はぁい。どうもすみませんでしたぁ」
いかにも形式っぽい謝辞を二人がそれぞれに口にして、何事もなかったように前を向いて座り直した。

「驚かせてごめんなさいね、SATOKO。でも、ここには色々な事情の子がいるから、これがストレスを溜めない一番いい方法なのよ」
苦笑混じりにマドレーヌ先生が私の顔を見て笑った。
「先生、サトコはどこの部屋に入るか決まってるんですか？　あたし達の部屋のベッドならひとつ空いてまーす」
セニエが興味津々といった顔で私を見つめてくる。どうやら彼女の興味はリュビツァをからかう事から私に移ったようだ。
マドレーヌ先生は、
「そうねぇ…」
と言ってちらりと私の顔を見た。
「私は別にかまいませんけど？」
「そう？　じゃあセニエ、SATOKOの部屋はあなた達の部屋に決めるから、色々と教えてあげてちょうだいね」
「ほんとぉ！　先生？　きゃあ、やったあ！」
とびっきりの美少女のくせにどこか男の子っぽいセニエは、ガッツポーズまでして喜んでいる。
楽しい娘だ。
なんとなく仲よくなれそうな気がする。
「はじめまして、セニエ。よろしくね」
教壇の上から微笑みかける。
「よろしくねサトコ。東洋の人ってこの学校でも初めてよ。仲よくしようね」
「じゃあ、そろそろいいかな？　授業を始めるわよ。あ、それからSATOKO」
「はい？」
「しばらくはドイツ語でも授業の説明をするけど、ハンガリー語も覚えなくてはダメよ。
それと、ここはカトリックの学校だからラテン語の授業もあります。それは大丈夫？」
「はい。何とかなると思います」
「くす。そう？　頼もしいわね。じゃあドコでもいいから後ろの空いている席に座ってちょうだいね」
「はい、先生」
そうして軽く会釈をしてから教壇を降り、机の間を抜けて行こうとする間にも、次々に周りの子達から声がかけられる。
「ハイ、サトコ」
「ハイ」
「セチェーニよ、よろしくね、サトコ」
「よろしく、セチェーニ」
学友達から投げられる挨拶に答えて自分の席に着くと、自然にため息が漏れた。
やっぱりどこかで緊張していたのかな？
でも、もう大丈夫。
何とかみんなにも認めてもらえたようだから。

Ⅱ章

「ねえ、サトコはどうしてここに来たの？」
夕食が済んだあとの女の子達の部屋。
今日からは自分の部屋でもあるその場所で、セニエ達は貴重な隠し食料を持ち出してきて、ささやかながら私の歓迎パーティーを開いてくれていた。
町にくばる奉仕品のクッキーのでき損ないや、よその部屋の子達からもらった家族の差し入れの残り。
台所からちょろまかしてきたミルクなどを集めてパーティーが始まった。
中には町の人が学校の賄い用に寄付してくれたワインなんかが登場してきて、ちょっぴり驚いたけど。
消灯時間はとっくに過ぎている。
でも、ドアにろうそくの光が漏れないように、二つの二段ベッドの間にシーツをカーテンのように渡したりして、みんなでひっそりと開くパーティーって、なんでこんなに面白いんだろう。
「え？　どうしてって？」
ルームメイトは三人。昼間のセニエとリュビツァ、そして肩まで伸ばした赤毛のセミロング、鼻にかかったソバカスがかわいいセチェーニという女の子だった。
そのセチェーニがクッキーをほおばりながら、ミルクをちろりとなめて私がここに来る事になったワケを聞いてきた。
「んー、ここに来る娘って、たいがいワケありなのよねぇ」
私の様子をうかがいつつ、セチェーニが答える。
「セチェーニ達も？」
「うーん、私は親がカトリックで、ワリと近い町に住んでたからここに来ただけだけど…」
そう言ってセチェーニは、残る二人のほうをちらりと眺めた。
「私は旧東ドイツの出身よ」
セニエが言った。
「父の会社が東西ドイツ統合のせいでつぶれちゃってね…、それから、父が借金をしていたのがどうやらマフィアがらみのところだったらしくてさ。『私をよこせ』って言われたらしいわ。
でも、父さんは奴らの目を盗んで私をここまで逃がしてくれたの。…私は別れた時の父さんの顔を忘れないわ。ラーバ先生に私の手を握らせて、泣きながら笑って『愛してるよ』って言ってくれた、父さんの…疲れた、髭だらけの顔を絶対に忘れない…」
〝ぴり〟
唾を飲み込むのどが引きつった。
飲み過ぎたワインのせいかな…。
セニエはきっともうお父さんに会えない事を覚悟しているのだろう。
そして多分、悲しい現実もそうなるのだろう。
彼女はそれを知っている。
知っていて、なお、立派なお父さんにもらった命を精一杯に生きていく強さを彼女は持っている。
すごいよね、って思う。
セニエも、セニエのお父さんも、すごいよねって思う。
たくさんの動物達の親子がそうであるように、人間の中にもある親子の絆って、命だってかけられるくらいに強いんだなって…。
思うけど…、でも、みんなそうなの？
じゃあ…、私が『ヘン』なの？
くぴり…。のどが引きつる。
ワインなんて小学校の時から飲んでるのに。
「髪が短いのはその時に変装してたせい。
お父さんが迎えに来るまで伸ばさないの。
別れた時と印象が変わってたら見つけにくいでしょ？」
いつもは男の子みたいに元気いっぱいのセニエが、どこか悲しげな湿っぽい笑いを投げかけてきた。
「あ…、う、うん。リュ、リュビツァは？」
私はセニエの視線を受け止めきれずに、隣で何やらセコセコと書き物を始めたリュビツァに話を振った。
「私？　私は…、私と兄さんはセルビアの生まれだから…」
ミルクをストローで〝ちるちる〜〟とすすりながらリュビツァが答えた。
「セルビア？　あのドンパチやってる？」
「ええ。で、両親を失ってから、お兄ちゃんと一緒にハンガリーに逃げて来たの。
で、国境の近くでマイヨルド司教様に助けられて…、教会に身元引受人になってもらって、何とかこの修道院へ入ることができたのよ」
驚いた。そんな境遇の子までいるなんて。
「その、マイヨルド司教様って？」
「ここから南に五十キロぐらい行ったところにある、ヘーヴィーズっていう町の司教様よ」
「男子の修道院はそこにあるの。そこの聖歌隊と『ウチ』の聖歌隊はよく合同でチャリティーコンサートとかやるのよ。で、そのマイヨルド神父様が『向こう』の聖歌隊の責任者ってワケ」
セチェーニが横からリュビツァの説明の足らない部分を補足してくれた。
「へぇ。ここみたいな修道院が他にもあるんだ。
でも、どうしてここにはそういうワケありの子達が多いの？」
「それは、院長先生のラーバ先生が優しい人だからだよねきっと」
リュビツァがおっとりと微笑んで答えた。
「そうねぇ。今じゃ、半分孤児院みたいになってるもんね」
ふむふむ、と腕組をしたセチェーニが相づちを打った。
「サトコはどうしてココにきたの？」
はじめにセチェーニがして、そのまま宙に浮いたままだった質問をセニエがもう一度聞いてきた。
「イヤなら別に言わなくてもいいけど、ここにいるのはみんな『そういう娘』達ばかりだからさ。他の学校みたいに気を張ることなんて無いんだよ？　人に話せばすっきりすること

だってあるかもしれないし…」
「ありがとう。でも大丈夫よ。私は両親とも元気だし、父は日本の外交官をやっているの」
「外交官！」
セチェーニが驚いて身を乗り出した。
「外交官って？」
「日本の大使だよ、おバカ」
きょとんとしたリュビツァがセチェーニに聞き直すと、からかい癖のあるセニエが脇からつっこんだ。
「はは…、でも外交官っていっても色々あるし…」
「へぇ、じゃあサトコは日本のお嬢様なのね？」
セチェーニがまじめな顔で聞いてきた。
「やだ。ちがうわよ。私、お嬢様なんてガラじゃないもん」
「う〜ん、じゃあそれはまあおいといて、なんで日本からはるばるハンガリーまでやって来たの？」
「それは…、私ね、生まれつき変な力があるんだ。
ずっと昔の人の事が見えたり、しゃべれたり。俗に言う霊魂ってヤツ？　私にはそれが分かるのよ」
「霊能者？　本物の？」
今度は例外なく三人の目が見開かれる。
「ええ。でもね、そういうのと付き合ってると、いい事ばかりじゃないのよ。生気を奪われてね、すっごく疲れるの。最近はおかしな声が聞こえてきたりして…。
で、それが聞こえ始めると、突然、物が壊れたりとか、飼っていた犬が死んだりとか、必ず変な事が起きるのよねぇ…」
私は、ここ最近私の事を呼び続ける声と、身の回りに立て続けに起こった不思議な霊障の事を三人に話して聞かせてあげた。
「すっごーいッ！　ほんものの魔女（ウイッチ）だわ」
「じゃあ、やっぱりここに来たのはラーバ先生にお祓いをしてもらうため？」
「さあ？　よく知らないけど、お父様からは『気分転換のつもりでしばらくゆっくりしてなさい』としか言われてないし。ま、何とかなるでしょ。…って、あら？　ねえ、リュビツ

ァ、さっきから何を書いてるの？」
　こんな話を聞いたら真っ先に怖がるに違いないと思っていたリュビツァが、意外にもおとなしいのが気になった。
　ふと、視線を転じると、さっきから続けていた書き物を猛然としたスピードで書き上げようとしている。
「うん……、お兄ちゃんにサトの事を知らせてあげるの」
「お兄さん？」
「あんたは本当に『おにいちゃん子』ねぇ」
　またセニエがつっこむ。
「そんなことないよぉ。『何かあったら知らせるように』って言われてるんだもん」
「バカ、あんた、そりゃ『困ったことがあったら』って意味でしょうが。毎日毎日、今日はああした、こうしたってうれしそうに手紙なんか書いてサァ。ブラコンもここまで来るとビョーキよね」
　セニエは『処置なし』といった風で、両手を肩まで持ち上げて首をすくめてみせる。
「でもさぁ、あれだけハンサムなお兄さんだと、リュビツァの気持ちも分からないでもないなぁ。ちょっとやそっとの男の子なんかじゃ、どーしても見劣りしちゃうものねえ」
　そんな二人のやり取りを尻目にして、両手を胸の前に合わせた『お祈り』のポーズをとったセチェーニが、宙を見つめたまま、うっとりとつぶやいた。
　きっと彼女の頭の上にはマンガによくあるモヤモヤした雲が浮かんでいて、件のハンサムなお兄さんがやさしく微笑んでいるに違いないわね。
「ねえ。リュビツァのお兄さんって、そんなにハンサムなの？」
「お!?　のってきたわねサトコ」
　セニエが『してやったり』とした表情を浮かべて〝にやり〟と笑った。
「うっ。だっ、だって、そんなにみんなが言うんじゃ、気になるじゃない。やっぱり」
　あたふたと手を振る体の振動が伝わって、手に持ったコップからルビー色した滴が数滴膝の上に飛び散った。
冷たッ。
「そうよぉ。リュビツァのお兄さん…、ミローシュさんって言うんだけどねぇ、これがハンサムで優しくて、だけどちょっと影があって、『いい感じ』なんだなぁ」
　ちょっと顔を赤らめたセニエが、ワインの入ったコップを握りしめて力説し始めた。
　何となく日本のおでん屋の屋台によくいるコップ酒しているおじさんみたい。
　息もなんか、お酒臭いし…。
　うん？　お酒臭い？
「ミローシュさんはさあ…、ヘーヴィーズの聖歌隊の中でもとびっきりだからねぇ。この学校の中でも、彼をねらってる隠れミローシュファンは多いと思うよぉ。競争率高いんだからぁ…サトコはやめときなって」
「何言ってんの、そういうアンタが隠れミローシュファンじゃないのよ」
「えへへへぇ、ばれちゃったか」
「えー、うそー。セニエちゃんほんとなの？　やだやだ、リュビツァのお兄ちゃん取っちゃったら絶交だからね」
「わ、わーったわよ。何よそんなにマジになって…、ちょっとぉ、何も泣かなくったって…」
「だっ、だって…、セニエちゃん綺麗だし…勉強だってできるし、セニエちゃんが本気になったら私、かないっこない…。お兄ちゃん、私の事を忘れちゃうかもしれないよお」
「お、おバカぁ。大丈夫、大丈夫だって。だってほら、アンタの兄貴ってば、今までどんなコから手紙とかもらったって、見向きもしなかったじゃない？
　だから、べつに…、ほらあ、涙と鼻水とヨダレを拭いてよぉ」
「う、うん。…ぐしゅッ」
　かわいいリュビツァ。
　私の知らない、きっとここにいる他の子達も誰も知らない辛い事をたくさん経験して来たのに、天使のように純心だ。
　きっと彼女のお兄さんも、そんな彼女を大事にしているのね。
　そして、セニエ。
　普段はちょっと口の悪い彼女も、気を付けて見ていれば、その言動が友達思いの優しさから出たものだという事にすぐに気が付く。
　ようやく泣きやんだリュビツァを母親のようにベッドに寝かしつけ、気落ちするセニエの肩を優しくたたいて励ますセチェーニ。
　意外な事に、この中で一番幸せな家庭に生まれて育ったであろう彼女が、四人の中で一番他人に愛を分けることに長けた人だと分かった。
　パーティーの後片づけをしようとするセニエを優しくベッドに押し戻し、一人片づけを初めたセチェーニを手伝うと、彼女はゆっくりと私の顔を見て静かに微笑んだ。
　みんなとなら仲よくなれそうな気がする。
　それが、今までどこかで人と接する事を拒んできた私が、初めて感じた漠然とした予感だった。

Ⅲ章

〝がたん、ごとん…、ドサドサドサーッ〟
「ぶはあッ、ごほっ、ごほっ。ねぇ、本当にこんなところにあるのお？」
　ガラクタや、古本を動かすたびに舞い上がる埃に耐えかねて、セニエが泣き言をもらした。
「だって、確かに本棟の一番下の倉庫にあるって聞いたんだもの」
　こちらも制服の端で口元を覆ったセチェーニが、苦しげに答える。
「でも、みんなで聖歌隊に入れてよかったよねえ」
　ひとり、リュビツァだけがひょうひょうとして舞い踊る埃の中で探し物を続けている。
「ごめんね、みんな。私のために」
　あれから一ヶ月。ラーバ院長先生とマドレーヌ先生の特別のはからいで、私はギゼラスペルム女学院の聖歌隊の末席に加えられる事になった。
　ただでさえ娯楽のない女子修道院の女学校の中である。
　毎月一度のチャリティー公演に出かける聖歌隊が、全校生徒のあこがれの的であっても何の不思議もない。
　当然選抜には厳しい審査があったが、初めての日曜礼拝で歌った私の声を聞いたマドレーヌ先生が、強く聖歌隊への参加を勧めてくれたのだ。
　そして、その話を聞いたラーバ院長先生が『だったらみんなで一緒におやりなさい』と、特別に私達四人ともを聖歌隊に参入させてくれたというわけだ。
　そして今は何をしているのかというと、修道院の地下の古い倉庫で私が使うためのドイツ語の賛美歌集を探している最中で…。
〝ドサドサドサー！〟
「きゃあ。いったぁい」
「大丈夫、サトコ。お？　えらぁーい。見つけた、見つけた。こんなところにあったのかぁ。よかったじゃん」
「何が『よかった』よぉ。見てよこれ、頭から埃まみれ……」
「あははは。みんな、おんなじよぉ。あたしだってもう真っ白だもん。雰囲気といい、格好といい、まるっきり古城の幽霊みたいじゃない？」
「やめてよ、縁起でもない。こんな場所でそんな話をしてたら笑い話にもならないわ」
『灰かぶり姫』ならぬ『埃かぶり姫』になって、情けなく頭を振る私を見てセニエが笑った。
「だよね。だいたい修道院なんてただでさえ辛気くさいのに、この教会ときたら大昔のお城を改築したやつだもんね。この先には、通路が崩れて先に行けないところとかもあるし。夜中になると、そこから白い影がすぅ～っと…」
「えーんッ。やだやだやだッ。セニエちゃんの意地悪ぅ。夜おトイレに行けなくなっちゃう！」
「あははは、ごめんごめん。リュビツァ。もうしないからサァ」
「趣味悪いよセニエ。自分だって怖いくせに」
「な、なによ、セチェーニ。私はべつに…」
「サトコだって固まってるじゃない」
「え。ほんと？」
　と彼女が振り向いた先で、確かに私は固まっていた。
　それも彼女達に背を向けて、ろうそくの揺れる灯りの届かない、太い石の柱の立ち並ぶ地下室の暗がりに向かって。
「どうしたのサトコ。そんなに怖かった？」
　そんな私の様子を心配したのか、セチェーニがそっと肩に触れてきた。
「ん…。ねぇ、今だれか奥の通路を横切って行かなかった？」
「奥の通路？」
　暗がりを見つめたまま聞く私の言葉に、三人はお互いの顔を見渡した。
「そう、そこの壁際の…」
「やだ、あそこは鉄柵があって、それ以上先は道が壊れていて入れないのよ」
「でも、確かに誰かいたわ」
「お…、お化け？」
「じゃないと思う。それなら私分かるし…」
「そっか…」
　思わずみんなが漏らしたため息の音が聞こえそうな気がした。
「………」
「う～ん。なんか、ちょっとしたミステリーかも？」
「行ってみる？」
「やだ。こわいもん」
　三人が三様のリアクションを返して緊張を和らげる。そして、
「平気よ、だってまだお昼前よ。こっちは四人もいるんだし、お化けや泥棒だって時と場所ぐらい選ぶでしょ」
　と言い出したのは、やはり負けん気の強いセニエだった。
私達はろうそくが三本灯った燭台と、埃まみれになってようやく見つけた歌集とを持って、石と歴史の重みに押しつぶされた暗がりがよどむ一角へとおそるおそる歩いて行った。
「やっぱり誰もいないわよ？」
「でもなんか、誰か通った跡があるわ」
「ほんとだ。ここら辺だけ床に埃がたまってない」
　いかにも『お化け』の出そうなところに見えた場所も、近くまで行くとそれまでガラクタあさりをしていた場所と大差がないように思えた。
ただし、確かにセニエが言ったようにそこから先の通路は、いくつもの枝分かれした通路になっていたが、ことごとく錆びた鉄格子の門によって厳重に封印されていた。
　その先の燭台の灯かりが届くギリギリのところ辺りには確かに石壁の崩落の跡も見える。
「ねぇ、ちょっと。こっち来て」
「え、何？」
　セチェーニが呼んでいる。
「ほら、ここ」

彼女が指さしたその先にはその他の場所と同じような門扉がはまっていたが、その柵の横の壁には、崩落によるものと思われる隙間がわずかに空いていた。
「人が入れそうじゃない？」
揺れる燭台の光の中でセチェーニが振り向く。
「行ってみる？」
「モチロン」
『怖いもの見たさ』っていう感情は、ある一定の線を越えると歯止めが利かなくなるらしい。
あんなに怖がりだったリュビツァも今度は大した反対をしなかった。
「あいてっ」
「ちょっと、手を離さないでよ？」
「大丈夫よ。…ほら、出口が見えてきた」
先頭に燭台を持ったセチェーニ。
その後からセニエ、リュビツァ。
リュビツァがどうしても最後になるのを嫌がったので、私がしんがりだった。
〝じりじり…〟
ろうそくの炎が揺らめき、芯が焦げる音がする。
「風が吹き込んでくる」
〝ザァー…〟
「川の音も聞こえるよ？」
「川の近くまで行ってるのかな？」
ギゼラスペルム女学院は中欧一大きな湖、バラトン湖にそそぐ川の崖の上に立つ修道院だ。
下へ下へと降りれば、当然川辺に着くはずだった。
と、突然、闇になれた目に光が差し込んでくると同時に、ハンマーで殴られたような音量で、川の流れる〝ドオーッ〟という音が飛び込んできた。
「わぁ」
「こんなところに、こんな場所があったの？」
驚くリュビツァの肩越しに外の様子をのぞき込むと、崖の中腹から川越しに町の様子が眺められた。

私達が今まで進んできた道は、厚い岩の中をくりぬき、外まで通じていて、そこからさらに滑りやすい岩肌を縫うように下降して、川縁近くまで続いていたのだった。
「ずいぶん古い時代のものみたいよ」
階段状に切り出された足下の石を見てセチェーニが言った。
「ねぇ、帰ろうよお」
久しぶりに日の光を浴びて、闇の呪縛が解けたのかもしれない。
リュビツァが私の服の裾をつかんで〝つんつん〟と引っ張った。
「そうだね…、ねえセニエ帰ろう。
あんまり遅いと、マドレーヌ先生だって探しに来るかもしれないし…」
「しっ、サトコ。ちょっと静かに！　…何か聞こえない？」
「何かって？」
「誰かの声みたいなの…」
「声？」
「…して………ゆるしたまえ………」
「ほら！」
「こっち、…奥のほうからだわ」
「…偉大なる主よ、御身のお力をもってこの汚れた地の呪縛を払い賜え。願わくば、清き乙女らの祈りをもって忌まわしき魔女の血を祓い清めたまえ…」
川縁にほど近い、テラスのように掘り広げられた場所から人の声が聞こえてくる。
「だ…れ……？」
「分かんない」

そっとのぞくその場所には、中央に棺のような長方形の石の台。それを取り囲むようにして七つの高架つきの水盤と異形の像達。
その姿は羽の生えている蛇の体にオオカミの頭がついた怪物や、鱗のある獣の体に鳥の頭がついたものまである。
そして正面の祭壇のような場所には、扇情的な姿をした綺麗な女性の像が身をくねらせていた。
一目見て分かる、背徳的な汚れた『匂い』のする場所だった。
「あれは…、院長先生？」
その背徳の場所で一人、聖書を読み上げる人物は紛れもなくこの学院の院長先生。
ラーバ先生だった。
「…何してるのかしら？」
リュビツァがつぶやく。
先生は聖書を読みながら、時折右手に持った小瓶から何かを女性の像に振りかけているように見える。
《くっくっくっ…》
〝どきんッ〟
心臓がひとつ、鐘を打つようにふるえた。
「何？　今のは？」
思わず大きな声が出る。
「何？　どうしたのサトコ？」
みんながびっくりして私を見つめる。
「聞こえ…（なかったのね）」
やっぱり、今のは『向こう側』の声？
でも、『あの声』とは違う。
嫌らしくて、錆をふくんだ女の人の『声』だった。
《無駄な事を……》
またたわ。でも今度ははっきりと聞こえたわ。
『声』はラーバ先生のいるあの祭壇から聞こえて来ているんだ。
「…恐れなさい。神の光に汚れし罪を悔い改めなさい」
《罪？　罪こそ我が命。我が生き甲斐。誰が悔いるものか…》
「…恐れなさい。神の振り下ろす鉄槌が汝の悪徳を討ち滅ぼすでしょう」

《…哀れだな老女よ。
神に従い、神の教えを信じたが故にお前はそのように醜く、しわだらけの姿となって朽ちていくのだ。
私のように、真に偉大な力の前に屈すればお前も、お前に少女達のようにいつまでも若く、美しいままでいられようものを…》
「黙りなさい、不埒者！　真の偉大なお方は主しかおられません。私は主の忠実なるしもべとして、あなたを滅します」
《できるかな？　老女よ…。
この上に修道院を建てて私を封じたつもりだろうが、あまり私のご主人様方を甘く見ないほうがいいぞ》
「なんですって？」
《…ご主人様方はあの少女をご所望になっておられる》
〝どくんッ！〟
「…あッ」
二度目の強烈な動悸にめまいがした。
視界が暗くなり、立っていられない。
『サトコッ!?』
誰かが私を呼んでいるのが聞こえる。
「ばッ…、させるものですかッ。あの子は断じてあなた達の餌食になんかさせないわ！」
《ふふふふふ。さすがだな老女よ。
老いたりとはいえ、その目はまだ確かなものよ。
しかし、できるかな。お前にあの少女を守り抜くことが…》
「お黙りなさいッ。彼女には指一本触れさせませんよ」
《うふふふふ、そう言っていられるのも今のうちよ。
獲物はもう、すぐ近くにまで来ているのだからね》

〝ごるるるるぅ〟
何？　変な耳鳴り…、生臭い息？
誰？
『なに』がいるの？
やめて…。
『わたし』にさわらないで。
『わたし』を汚さないで…。
私は…、『わ・た・し』は……。

【⊕木】

あ…。

「サトコッ、サトコッ。大丈夫!?」
気が付くと、私を膝の上に抱きかかえたセニエが上から心配そうにのぞき込んでいた。
「私？」
「胸を抱えて急に倒れ込んだんだよ。
心臓に病気でもあるの？」
「い、いいえ、そうじゃないの。そうじゃないけど…。
コレがね、私がここに来た理由よ」
「じゃあ、前に言ってた『ヘンな声が聞こえる』ってやつがでたの？」
「ん…、今日のはいつものとはちょっと違ってたけど、ね」
「……アーメン」
「あ、やばいよ。ラーバ先生がこっちにやって来る」
見張り役をしていたセチェーニがあわてて戻って来た。
「帰りましょう」
ふらつく足に力を込めて立ち上がった。
「大丈夫？　歩ける？」
脇からセニエとリュビツァが肩を貸してくれた。
「早く、早くぅ。見つかっちゃうよぉ」
通路の入り口で、やきもきしながらセチェーニが手を振っている。
私たちは急いで元の場所へと駆け出した。

「はあ、はあ、はあ。
いったい何なの『あれ』は？」
「分かんないよ。でも院長先生がどうしてあんなところに一人で？」
「それこそ分かんないわよ。
でも…、でもあれって、どう見ても普通の祭壇じゃないよね」
転けつまろびつしながら、やっとの思いで地下室にまで戻った私たちは、さっき見た光景について一斉に口を開き始めた。
「うん。うん。それって私も思った。あの場所ってなんだか……」
「黒ミサの祭壇？」
「うん。うまく言えないケド、感じた事をそのまま訳すとそんな感じ？」
「でもなんでそんな物が修道院の下にあるのよ」
「さあ？」
「あ、でもこの修道院って昔のふる〜いお城の跡に建てたんでしょ？
だったらその時の物じゃないのかなぁ？」
「でも、あれはどう見たって教会の物じゃないわよ？
あんなへんな…、イヤらしいものを建てた人達って誰なの？」
「それは議論しても始まらないでしょ。それより院長先生があそこで何をしていたかのほうが問題よ」
「院長先生……」
こと、話がそこに行き着くに至って、ようやく少女達にも得体の知れない薄気味の悪さが伝わったのか、誰からともなく口をつぐんでお互いの顔を見回した。
〝びゅううぅぅ〟
断崖から吹き込む風が、寒気のする音を残して背中を通り過ぎた。
「SATOKO？　セニエ？　みんなどこにいるの？」
「あ、はいッ。ここにいます」
突然声がして、みんな飛び上がらんばかりに驚いた。
「どうしたの？　あんまり遅いから見に来たのよ。
歌集は見つかって？」

賄い場を通って地下室に降りる階段から、マドレーヌ先生が姿を現した。
「あ、はい。ここに…」
　そう言って歌集を取り出すと、
「あら、あら、すごい格好。みんなせっかくの美人が台無しね」
　と、埃で真っ白になった私達の格好を眺めて、ため息をついた。
「本当はすぐにでも歌い合わせをしたかったんだけど、仕方ないわ。
　今日は大事なお客様が来ているから失礼のないように着替えてらっしゃいな」
「はあい」
「ちゃんと顔も洗うのよ?」
「はい、先生。いこ、みんな」
　セニエがリュビツァの手を取って走り出した。
　私もセチェーニと並んで走り出す。
　みんな、あの通路を吹き抜けて来る風に寒気を覚えたように、背中を丸めてその部屋から駆け出したのだった。

Ⅳ章

「ねえ、リュビツァ。ご飯が済んだらゲームしない?」
「…しない」
「じ、じゃあさ。ポプリの作り方教えてよ」
「…ポプリならセチェーニのほうが詳しいわよ」
　ここのところ、リュビツァと仲が悪い。
　私は仲よくしたいんだけど、彼女のほうが徹底的に私を避けているのだ。
　原因は分かってる。先週行った聖歌隊の公演先での出来事が二人の間にミゾを作ってしまったのだ。
　ギゼラスペルム女学院の聖歌隊が、毎月一度のペースでチャリティーコンサートを開くために各地へ出かける事は前にも話したと思う。
　実はその公演地は、割合ごく近所の町である事が多い。
　というのも、女学院の近くにはバラトン湖という中欧一の大きな湖があって、近くにはいくつもの温泉がわいているという、中欧きってのバカンスのメッカなのだ。
　で、私達はそのバカンスに来ているヨーロッパブルジョワジーから寄付を集めるべく、今日はこの町、明日はあちら…と、忙しく出かけて行っては、麗しの歌声で人々を魅了してお金を稼いでいた。
　で、事の起こりは、その公演でリュビツァのお兄さんのいるヘーヴィーズの町へと行った時だった。
　今回は男子の聖歌隊と合同コンサートという事で、最初から女の子達の間にもそわそわとした雰囲気が漂っていたのだけれど、リュビツァのお兄さんが現れるに至って、みんなの口からピンク色したため息みたいなのが漏れたのがはっきり分かった。
　なんてったって、五十人分の女の子のため息だもんね。
　でも、確かにミローシュさんはすてきな人だった。
　第一印象は『誰かに似てるかも?』だったけど。
　初対面なのにどこか懐かしい気がした。
　『昔好きだったヒト』っていうフレーズがぴったりくるような印象の人だった。
　たしか十五歳だって聞いたけど、それより年上の他の男の子達よりなんかずっと『おとな』って感じがする人なの。
　ただ、それだけじゃなくて、何ていうのかな?
　私達『おんなのコ』の気持ちを優しく包んで甘えさせてくれる『暖かさ』や、『落ち着き』? みたいなモノを感じさせてくれる人だった。
　きっとみんな、他の若い男の子にはない、そんな種類の愛情に飢えていたんじゃないかと思う。
　告白すると、私だってミローシュさんにまとわりつくリュビツァを見ていたら、彼に笑いかけられて『いい子いい子』してもらいたくなったもの。
　だからなのかな…、だからこんなに気になるのかな?
　あの腕に、もう一度抱きしめられたいって思うのかな…。

公演が済んだとき、セニエとリュビッァが温泉に行きたいと言い出した。
ヘーヴィーズには湖の中から温泉がわき出している珍しい温泉湖があるらしい。
彼女達は私の慰労会という名目で引率のマドレーヌ先生に外出許可をもらいに行って、…なんと本当にもらって来てしまった。
ただし、もちろん私達だけのバカンスという事になるはずはなく、ギゼラスペルムとヘーヴィーズの合同の慰労会という事になって、私達は総勢百名ほどの大所帯でぞろぞろと郊外の温泉湖へと出かけて行ったの。
普通の温泉なら百人なんて大勢の人が一度に入る事なんてできないけど、その温泉は四万七千五百平方メートルという大きな湖なのだ。
いくら人が入ろうと、狭いはずがない。
私達は湖の畔のホテルで水着を借りると、待ちきれない気持ちを抑えかねて、次々とホテル前の桟橋から湖の中に飛び込んで行った。
水の深さは私の股下くらい。
真っ青な夏の空に、白い入道雲がゆっくりと流れていって…いい気持ち。
あちこちで水に飛び込む音と、男の子と女の子の歓声が上がっていた。
「…サトコ」
「何?」
セニエの声に振り向くと、少し前屈みになった彼女が両手を水の中に入れて、ニヤリと笑っていた。
「えいッ!」
〝ばしゃあ!〟
「うぷッ」
突然、下からすくい上げられた飛沫が飛んできて、痛いほどの勢いで顔にぶつかった。
「きゃははは。スットラーイク!」
「こほ、おほ。ひどぉい、セニエ。鼻に入ったじゃない」

「へっへ～ん。鼻水ったれ～。悔しかったら捕まえてみろぉ～」
　セニエは頭から雫を滴らせてむせている私に向かってお尻を向けて、『お尻ペンペン』なんて格好をしながら挑発してくれている。
「むふ…、むふふふ。私を怒らせたわねぇぇぇ～。…のぉおおおッ、まてぇぇぇッ！」
「きゃあー。あははははは」
「セチェーニ、そっちから回り込むのよッ」
「あ、ずるいサトコ。勝負は一対一でしょうが」
「うるさぁ～い。復讐するは我にありぃ。
　悪を討つのに卑怯もへったくれもないわ～」
「いやぁあああ」
「とうッ！」
「きゃぶ」
〝バシャーン〟
「げふ、けふ…。また鼻に水が入ったぁ～」
「いたぁーい。水でお腹うったぁ」
　逃げるセニエに後ろからタックルをかましたところまではよかったのだけれど、当然、私達二人は頭から水の中に落ちてしこたま水を飲むハメになるわ、腹打ちをするわで、両者ともに自爆の引き分けという結果になった。
「ふう…、おバカ」
　一人、セチェーニがそんな私達の様子を見て苦笑をもらした。
「ふふ…ふ、うふふふふ」
「あは、あはははははは」
「うふふふふふ」
「はははは、はぁ。あ、ねえ、リュビツァは？」
　気が付けばリュビツァがいない。
　着替えの時までは一緒にいたのに。
「そういえば…、また兄貴のところかな？」
「探しに行ってみる？」
「うん」
　私達三人はヘーヴィーズの男の子達が多く集まっている辺りへ、リュビツァと彼女のお兄さんを探しに行く事にした。
「ハーイ！」
「…ハイ」
　その途中、十六、七歳ぐらいの男の子二人が私達に声をかけて来た。
「キミ達、ギゼラスペルムの娘だろ？」
　身長が百八十cmぐらいあるずいぶん鼻のとがった顔をした男の子が私に近づいて来た。
「そうよ。…ヘーヴィーズの人？」
「そうだよ。あれ？　覚えてないの？
コンサートの時、キミの斜め後ろにいたじゃない」
　その男の子は、ちょっと苦笑いをふくんだ顔で肩をすぼめた。
　もう一人の男の子はセニエとセチェーニのほうへ話しかけている。
「そう？　ごめんなさい。覚えてないの」
「なんだ、つれないなぁ。東洋人？　珍しいね。
　ギゼラスペルムはかわいい娘が多いんで有名だけど、キミってなんだかその中でも一際目立つよ」
　そう言うと彼は、私のすぐ目の前で腕を広げて立ち止まった。
　背の低い私からは彼の大きな裸の胸しか見えない。…まるで男性の体でできた狭い檻の中に閉じ込められたような気分になった。
　一方、彼のほうは値踏みをするように私の顔から水着に包まれた腰の辺りまでを順番に見下ろして、すっと私の髪に手を伸ばして来た。
「やっぱりその不思議な髪の色のせいかな。
　ねえ、どうしてキミみたいな娘が…」
（いやだ。我慢出来ない）
　突然心にわいた感情が脳に届く前に、私の体は反応していた。
〝チョブン〟
　私の体は、股下まである水が隙間をあけて音がするぐらいに速く、『その手』を逃れて後ろに下がっていたのだ。
「あの、ごめんなさい。友達を探してるの。
　用がないなら後にしてもらえるかしら」
　私は『肉の檻』に捕まる事がないように、彼の体を大きく迂回して通り過ぎようと歩き出した…が、
「待てよ、そんなにお嬢様ぶることないじゃん」
　彼は通り過ぎる私の腕を捕まえて、自分の体に引き寄せながらこう言った。
「どうせ身寄りがないところを学院に拾われて、里親かパトロンを捜すために聖歌隊に入ってんだろ？
引率のシスターには黙っててやるからさ、みんなでパァっと楽しくやろうぜ」
「……して」
「何？」
「そのゲスな手を離して」
「なんだって？　おいッ！」
「私はお前ごときが手を触れていい女じゃないわ。…お離しッ！」
「てめぇ、たかがコールガールのくせにバカにしやがって！」
　コールガール？
　彼が怒りに血走った目で拳を振り上げる…（ふん、下等動物め）、そして、
〝ガッ〟
「あッ…」
〝バシャァンッ〟
『ぐー』に固められた拳が私の左の頬に振り下ろされた。
　体格差から来る圧倒的な衝撃に、私の体はあっけなく吹き飛ばされて水の中に突っ伏した。
「つぅ！」
「やめろッ！　マジャール。何て事をするんだ。
彼女にあやまれッ」
　痛さでもうろうとした意識に綺麗なハンガリー語が聞こえ

てきた。
「ミ、ミローシュ？」
　顔を拭って見上げた景色の中で、初めに見たものは白い背中。
『あの男』から私をかばって立っているミローシュさんの背中だった。
「羽目を外しすぎだな。宿舎に帰って自分が何をしたのかよく考えて反省するんだ」
「てめッ…ミローシュ…。わ、分かったよ。帰りゃあいいんだろ、帰りゃあ」
『男』は私に怒りの一瞥をくれてから仲間の男の子を連れて去って行った。
「大丈夫？　聡子」
　ミローシュさんが私の手を取って引き起こしてくれた。
「あ、ありがとう。え？　どうして、私の名前…」
「リュビツァの手紙に書いてあったからね。日本からの新しい友達ができたって。
　こんなに綺麗な人だとは書いてなかったけどね」
　屈託無く笑う笑顔がリュビツァによく似ている。
　最後にお世辞が入るのはやっぱり西洋文化圏の人にはお約束ね。
「やだ、あなたまでそんな事を言うの？」
　さっきの一件のとおり、海外で育ったにもかかわらず、私はあんまり『ナンパ』っていうのが好きじゃない。
　西洋じゃ半ば社交辞令みたいなものだけど、私にはそんな付き合いは必要ない。
　第一、頭の中がずっとそんな事しか考えてないなんて、バカみたいだと思う。
「でも、実際綺麗だったからね。その、ヤツを毅然と叱りつけるところがね。
　聖ジャンヌ・ダルクみたいだった」
　それでも彼は悪びれずに笑って、ついでに意外な事まで言いだした。
「ジャンヌ・ダルク？　ふふふ、でもジャンヌ・ダルクならあんなヤツに殴られてケガなんてしないと思うわよ」
「え？」
「殴られた頬も痛い事は痛いけど、倒れた時に、下の石で膝を切ったみたいなの」
　今は水の下に隠れて見えないが、さっきから左の膝がズキズキ痛む。
「本当に？　だとすると、雑菌が入るとまずいな。岸に上がって手当をするからちょっと我慢して」
「え？　あ、きゃあ」
　そう言うやいなや、ミローシュさんは私を横抱きにして（俗に言う『お姫様だっこ』よ）湖岸へと歩き始めたのだ。
「あ、あの…、すみません」
　どうしてそう言ってしまったんだろう。
『あの男』には髪ですら触られることが嫌だったのに、ミローシュさんにはこうして抱かれている…。
　肌と肌が触れ合っても、気持ち悪いとは思わない。むしろ…暖かい。
　こんな事…初めて。

「これでよし…っと。
　せっかく泳ぎに来たけど、今日はもう水に入らないほうがいいな。
　風が気持ちいいからその木陰で日光浴でもしてようか」
　ホテルから借りてきた救急箱に薬をしまいながら彼が言った。
「あ、あの…ミローシュさん」
「ん？　ミローシュでいいよ。なあに？」
「あ、あの。ありがとうございました。
　もう平気ですから、どうぞみんなと楽しんで来てください」
　私はきっと赤い顔をしていたと思う。
　ケガをして、ひとりぼっちでみんなを待つ私の事を気遣ってくれる優しさと、さっき抱きしめられた時の恥ずかしさが今さらながらによみがえって来たからだ。
「僕と一緒はいや？」
　しばらく考えてから、彼はそう言った。
「い、いやじゃ…ない…です」
「じゃあ、しばらく一緒にいてもいいかな？」
「え？」
「なぜかな、聡子といると落ち着くんだ。
　離れていても、聡子のほうに向いている体がほんのりと暖かくなってくるような感じ？　こんな感じ、妹と一緒にいる時にだってなかったのにな」
　ときどき少年と青年の表情を入れ替えながらはにかむ笑顔がかわいいと思った。
「あ、それ…、私も…」
　自分の感じている事とよく似た事を彼も感じているのだと知って、おもわず声が出た。
「聡子も？」
「…うん」
「そっか、…不思議だね」
「うん」
「寒くない？」
「…少し」
「こっち…、くる？」
「いいの？」
「うん」
　裸の肩と肩が触れ合う。
　ミローシュの顔がそばにあった。
「………あったかいね」
「聡子…」
「ミロ…」
『彼』の匂いがする。
　瞳が自然と閉じていく…。どうして？

「お兄ちゃんッ!?」
「リュビツァ？」

幻想は、突如として破られた。
彼の手は私の肩から離れ、彼のぬくもりはどこかに消えた。
そして目を開けると、涙ながらに怒りにふるえるリュビツァがいた。
「お兄ちゃん、今サトコと何してたのッ!?」
「リュビツァ…」
私の口からは、ひどくやましい想いのこもった声が出た。
「サトコ…ひどい。リュビツァの…私のお兄ちゃんよ。私のお兄ちゃんなんだからぁ。
お兄ちゃん取らないでぇッ!」
泣きながらリュビツァが走り去る。
「リュビツァッ!」
それを追ってミローシュもいなくなった。
突然に来て去って行った私の中の嵐。
後には、膝の痛みに目頭が熱くなって来た私と、痛ましげな視線で私を見つめるセニエとセチェーニの姿だけが残されていた。

…それが、先週の話。
今週はまだまともにリュビツァと話をした事もない。
「ふう…」
ため息をついて食事の済んだ自分の食器を片し始める。
「どうしたのSATOKO。ケンカでもしたの?」
後ろからマドレーヌ先生が自分のぶんの食器を持って声をかけてきた。
「先生…、ええ、まあ、ちょっと」
「だめよ、仲よくしなくちゃ。例の件もあるんだし。
ケンカしたまま別れたくはないでしょう?」
「…はい、あ、でもその話は父に?」
「ええ、しておきましたよ。そうしたらとってもお喜びになっていたわ。正教会の司教様直々のご推薦なら間違いないからって」
「そ、そうですか」
「…そうね、じゃあ後でもう少し詳しい話をしましょう。
後で私の部屋へいらっしゃいな」
「分かりました。では、失礼します」
司教様…、マイヨルド司教さま…か。
先週に起こった事件は、実は『あれ』だけではなかった。
合同コンサートの時、何をどうして私を見初めたのか分からないけど、ヘーヴィーズのマイヨルド司教様が私を気に入ってくれて、今のギゼラスペルム女学院からウィーンにある神学校への転校を強く勧めてくれているのだ。
マイヨルド司教。
五十代半ばの太ったおじさんにしか見えない人。
実は私は、この人がどうにも好きになれなかった。
司教にまでなった聖職者のハズなのに、その顔からは品格が感じられないのだ。
『人を外見で判断するな』というなかれよ。
少なくても五十年も生きて来た人なら自分の顔にその人の魂が出てくるハズよ。
私の事を頭の先からつま先まで値踏みするようなその視線は、湖であった『あの男』を連想させるし。
だけど、世の中は私の主観とは関係なく動いているもので、とくに司教として振るう彼の権力はバカにならないものらしい。
過去にも何人か司教様の推薦を受けて編入試験を受けた子がいるとは聞いたけど、ことごとく編入試験に合格しているらしい。
もっとも、それがなぜ自分に回ってくるのかが不思議だけれど。
ともかく明後日には編入試験を受けて、その結果次第ではここから離れる事になりそうだった。
だが、それよりも何よりも、今の私の気がかりはリュビツァとミローシュの事だ。
リュビツァはあれ以来私と、いや私達と口をきこうとせず、いつも食事の後はどこかへふらりと出かけて行ったまま、就寝時間になるまで帰って来ない日が続いていた。
彼女に謝らなければと思う気持ちと、そして『彼』に会いたい気持ちとがミローシュさんに電話をかけさせた。
リュビツァの事を相談するという名目だ。
でも『それ』が、セニエやセチェーニには友達を裏切って『男』の元へ電話をかけるひどい女として映ったのかもしれない。
そうなのかも…。
事実あの時、私にはリュビツァのためというよりも、むしろ自分の心を落ち着かせるために、どうしても彼の声が必要だったのだ。
でも、これまであまり女の子同士の付き合いというモノをしてこなかった私には、私のその行動が彼女達の目にどう映るのかが、分かっていなかった。
おまけにこの二、三日。ミローシュさんとの連絡も不通になっていた。
ウィーンに行くなら、当然彼とも離ればなれになるのに。
こうして私は、一週間という短い時間で、このカシスの庭に来てから得たモノをすべて失いかけていた。

食事を済ませ、シャワーを浴びて寝間着に着替えると、後はもうすることがなかった。
試験が近かったが、針のむしろのような部屋で勉強する気にもなれなかった。
食事後にマドレーヌ先生に言われた事を思い出し、部屋を後にする。
〝コンコン〟
軽いノックを二回。…応えはない。
もう一度、と手を挙げたところで中から人の話し声がするのに気がついた。
「…しは認めませんよ。あの子をここから出すのには反対ですッ」
「ですが、院長先生。SATOKOは優秀な子です。ええ、それもこの学院どころか、ブダペストの学校にだって、彼女

と同学年で彼女より優秀な生徒がいるかどうかは疑問なくらいです。
　せっかくマイヨルド様がご推薦くださっているのに、私達の一方的な押しつけであの子の将来を閉ざしてしまっては…」
「私達の一方的な押しつけ？
　あなたの押しつけでしょう？
　私は彼女の親御さんからくれぐれもと念を押されて預かっているのです。それなのに、彼女のご両親がウイーン行きを了承するはずがないでしょう」
「しかし…」
「しかしも、へったくれもありません。
　だいたいあなたは彼女のご両親から承諾を得たというけど、どこにその手紙があるの？」
「そ、それは…、今、SATOKOのご両親は仕事で日本にいるそうで、試験の日までには院長先生宛の手紙が届くと…」
「そう。ではその手紙を読ませていただくわ。彼女の転校はそれからでも遅くはありません」
　ラーバ先生の言葉が終わるやいなや、目の前にあった扉ががちゃりと引き開けられた。
「あら、サトコ。
　…今の話を聞いていたのね」
　少し驚いた顔をしたラーバ先生だったが、すぐにいつもの深いしわを刻んだやさしい顔に戻って私に話しかけてきた。
「あ、はい。すみません」
「いいのよ。なら話は早いわ。
　そういうわけだから、あなたは早くお部屋に戻りなさいな。あなたには今、勉強なんかよりずっと大切な事が、しなければならない事があるはずでしょう？　いつまでも逃げてばかりしていてはいけませんよ」
　先生のその言葉に、思いっきり背中を押された気がした。
　人付き合いが下手だった自分。
　普通とは違う自分の体質を盾にして、これまで人と向き合い、傷つく事を避け続けてきた自分の背中を、『恐れるな』と思いっきり押し出された気分だった。
「はい、先生。
　私、リュビツァに謝ってきます」
　先生は何も言わずに、いつものようにしわだらけの顔で笑っていた。
「あ、待って、SATOKOッ」
　部屋の中からマドレーヌ先生が私を呼び止めた。
「マドレーヌ先生、私、ウイーンには行きません。やり残した事があるから、私、まだ行けないんです。ごめんなさい」
　きびすを返し、ダッと走り出す。
「これ、廊下を走るんじゃないよ」
　ラーバ先生にしかられた。
「ごめんなさぁあい」
　謝りながらも足は止まらない。
　早く、早く、みんなに謝らなきゃ。謝って『もうどこにも行かないよ』って言わなきゃ。
　リュビツァにも、謝って、そして自分がなぜミローシュさんを好きになったのか、そのわけを正直に話そう。
　許してくれないかもしれないけど、それでも二人で傷ついたところからやり直せるはずだ。
〝ばんッ〟
「リュビツァ⁉」
　勢いよくドアを開けて部屋へ飛び込んだ。
　が、中にはやはり彼女の姿はなく、宿題を済ませて後片づけをしているセチェーニと、ベッドに寝そべって本を読んでいるセニエしかいなかった。
「なによ、リュビツァなら例によって就寝時間まで帰って来ないでしょうよ」
　読みかけの本を〝ぱたん〟と閉じたセニエが身を起こしながら言った。
「…うん。分かってる、けど」
「なら…」
「けどね、私、どうしてもリュビツァに謝りたいの。
　みんなにも…、謝りたいの……」
「サトコ？」
「どうしたの…サトコ」
「ごめんね、ごめんねみんな。
　私ね、本当はみんなの事、別に何とも思っていなかったの。みんなは始めから私に優しくしてくれてたけど、私には何か、どうでもいい事に思えてた。
　怒らないで！　ううん、怒ってもいいから、最後まで聞いて？」
「…………」
「…ありがとう。
　始めに会った時に言ったよね。私には人と違うモノまで見えるって。
　いくつの頃かな、私のひいおばあちゃんがそうだったって聞いたけど、初めて『ソレ』を見たお父様やお母様の顔は一生忘れないわ。まるで悪魔と遊ぶ子供を見るような顔だったわ。
　だからかな？　仕事の忙しいお父様達と夏休みとクリスマスの二回、顔を合わせるだけで離れて暮らすようになったのは…」
「…………」
「でも、私もそれはそれで別に苦にならなかったわ。両親はいなくても、大好きなおばあちゃんとは一緒にいられたし、元々人付き合いのうまいほうじゃなかったし…。
　それに…、私は、いつもこの世界にひとりぼっちだって感じていたし」
「ひとりぼっち？」
　近くのベッドへ腰かけたセチェーニが聞いてきた。
「うん。何て言うのかな。私にはこの世の中で自分だけがたった一人、他のものと相容れない異質なモノだって感じる時があるのよ。
　町を歩いていてもそう、家族と食事をしていてもそう…、みんなとおしゃべりしている時だってそうなの。私はみんなと違う。理由なんてないのに、そう感じてしまう。そしてい

つか、私は私を呼ぶ声に導かれて、向こう側へ行かなくてはいけないの……」
「そんなのヘンよッ。絶対ヘンッ。
サトコはちっとも変わったところなんてないよッ！　やだよ、私、サトコがどっか行っちゃうなんて絶対やだからね！」
セニエが突然抱きついてきた。
「セニエ…、ありがとう」
セニエの涙が私のほっぺたを濡らす。
と、不意に私の目からも熱い滴が伝わり落ちた。
「だからね、私はそんな疎外感を感じている自分にみんなが仲よくしてくれるのがとっても不思議だったし、…とっても気持ちよかったわ。
でも、親をなくした迷子のような心細さはなくならなかった」
「どうして？」
「さあ？　多分、『あの声』がまだ私を呼んでいるからかな？」
「？………」
「そして、そんな時、私はミローシュさんに出会った」
私を抱いたセニエの肩がぴくりとふるえた。
「彼は…すてきな人よね。ほんとに珍しい事だけど、私も一目で好きになったわ」
「……うん」
セニエのか細い声。
「でもね…、リュビツァとケンカして彼に電話をかけた時、私、自分の本当の心に気が付いてしまったの」
「え？」
頬を濡らした顔を上げて、セニエが私を見つめた。
「私は、彼の中に『私の保護者』を求めていたんだって事に」
「保護者？」
「そうよ、『保護者』。
私のマスター。
私の帰るべきところ。
ミローシュさんはきっとその人に似てるんだわ」
「『その人』には会った事あるの？」
「いいえ、でも会えばきっと分かるわ。
でも今はそれよりもみんなのほうが大事よ。私、たとえ嫌われてもいい。本当の私をみんなに知ってもらいたい。みんなに私を覚えていてもらいたいの」
「サトコ…、なんだかよく分からないけど、サトコの気持ちはよく分かったわ。
ごめんね、意地悪して…」
「ううん、私こそみんなの気持ちを裏切っていたようなものだもの。
許してくれる？」
「許すも、許さないも、サトコは私達の友達だよ。ずっと、ずっとだよ？」
「うん、うん…」
「セニエ、セチェーニ……。ありがとう」
「えへ、…えへへへ」
〝くぅ〜〟
セニエのお腹がかわいく鳴った。
「や、いやだなぁ。サトコがいきなり泣かすからお腹へっちゃったじゃない」
「ええ？　あんたさっき夕食食べたばかりじゃない」
泣き笑い顔のセチェーニがつっこむ。
「デザートよ、デザート。
あ、そうだ、ねぇサトコ。この前ヘーヴィーズに行った時にちょろっと抜け出して買ってきたチョコレートがあるのよ、食べない？」
「うふ。いいわね。いただくわ」
「まったく、あんたって人は〜。たまぁ〜にセンチになった時ぐらい女の子っぽくできないの？」
「あれ？　じゃあセチェーニはいらないのね？」
「そうは言ってないでしょう、そうは。
貸しなさいよ、モグモグモグ…うん、イケルじゃない」
「ぷッ」
「く、あはははは」
「いやぁだ。あはははは」
「うふふふふふ」

「…………」
「リュビツァ、遅いね」
深夜一時。
とっくに消灯時間は過ぎて、私達三人はおのおののベッドの中に入ってリュビツァの帰りを待っていた。
「本当に、毎日毎日どこに行ってるのかしら？」
セチェーニがうつぶせに寝そべったまま、丸めた毛布でカムフラージュしたリュビツァのベッドを見て頬杖をつく。
「……私、探しに行ってくるわ」
もう待ちきれない。
私はシーツを跳ね上げると、スリッパをつっかけてガウンを手に取った。
「え？ もうとっくに就寝時間過ぎてるよ？ 部屋を抜け出して舎監のシスターに見つかったりしたらまずくない？」
シーツから顔だけ出したセニエが心配げに見上げる。
「だったらなおさらリュビツァを探さなきゃ」
「ちぇ、しょうがないなあ。付き合ってやるか」
「そうね。舎監に見つかる前に私達で連れ戻しましょ」
言うやいなや、二人とも私がしたようにシーツをめくり、ガウンを羽織ってベッドから抜け出した。
「ええ？ いいわよセニエ、セチェーニも。私が一人で行くから」
「サトコ。『友達』でしょ」
「私達もリュビツァも『友達』よ」
「うん…、分かった。ごめんね」
「あやまらない、あやまらない。さて、ガウンも着た事だし、ぼちぼち行きますか」
きしむドアを開けて、寝静まる修道院にリュビツァを求めて私達は歩き出した。
「いないね。リュビツァ」
かれこれ三十分も探し回っただろうか。
いくら複雑怪奇な構造の修道院とはいえ、学生のリュビツァが行ける場所には限りがある。
しかし、思いつく限りの場所をくまなく探し回ってもリュビツァの姿はどこにもなかった。
「おかしいわね。これだけ探していないなんて、普通じゃないわよ」
潜めたはずの声が人気のない廊下に大きく響いて消えていく。
「先生、呼んで来ようか？」
私とセチェーニの顔をかわりばんこに見ながらセニエが言った。
「うん…」
セチェーニが静かにうなずく。
「あっ、まって。あと一ヶ所だけ調べてないところがあるわ」
「え？ …あ、まさか、あそこ？」
私のセリフにセチェーニが思わずひるむ。
「うん」
「まさかあ。あの怖がりが一人であんな場所に行けるわけがないわよ」
セニエも少し怖がっているみたい。
「でも、もうあそこしか残ってないもの」
「行って…みる？」
「………」
二人はお互いの顔を見て、どうするか決めかねているようだ。
「行こうよ。古い通路だからもしかして足場が崩れて帰れなくなっているのかもしれないし。それにみんなと一緒なら怖くないわよ」
もう一度二人を誘ってみた。
これでダメなら一人で行こう。
「そうね、みんなで一度行ってるんだもんね」
「そうね、行こっか」
「みんな、ありがとう」
これが、こうして自分のした行動で結ばれていくのが絆なのかなぁ。
「で、でも、いなかったらすぐに帰って来ようね。この前みたいに気を失うのはナシよ、サトコ」
うっ、せっかくいい気分だったのに、イタイところを…。
「あははは、ま、いいじゃないの」
細かい事は気にしない気にしない。
私はセニエの背中をたたきながら笑ってごまかす事にした。
「これだ。まったく日本人の精神構造は理解できないわ」
「ほらほら、しゃべってるとおいて行くわよ」
「あん、ひどおい、待ってよぉ」
セチェーニと二人でセニエをからかいながら三人で仲よく歩いて行った。
もう大丈夫だ。…私は一人じゃない。
〝ぴゅううぅぅぅ〟
夜の風は昼間とは比べものにならないぐらい強い。
ともすれば吹き消されてしまいそうなろうそくの炎を手で庇い、私達は封じられた回廊を抜けて断崖の歩道に出た。
〝どおおぉぉぉ……〟
夜風に乗って暗闇の深淵から川の流れる音が響いて来る。
木綿の寝間着の裾は、吹き上げる風に、はしたないほどにめくれていたが、ろうそくの炎を庇う手をどけるわけにもいかない。
私達は仕方なく、太股まで露わにしながら、苔むして滑りやすい石の階段を一歩一歩下って行った。
「どう？ いそう？」
背中越しにセチェーニが聞いてくる。
「まだ分かんない。もう少し…、あの角を曲がらないと…」
私は以前来た時、あの祭壇をのぞき見た場所を目指して少しずつ足を速めて行った。
そして……。
「誰かいる？」
思わず身を潜めた岩陰の向こうには、明らかに人のいる気配と、明かりが灯っていた。

「リュビツァ?」
「まだ分かんない。でも…」
一人だけじゃない気配がする。
私はおそるおそる岩から顔を出して、祭壇の様子を探る事にした。
ツタ状の植物に荒らされた祭壇は、今は幾本ものたいまつに照らされ、橙色の揺らめく光の中で怪しい異形の像の影を浮かび上がらせていた。
〝ぐぴッ〟
その迫力に気圧されて、思わず飲み込んだ唾がへんな音を立てる。
「リュビツァは?」
岩陰に隠れた二人の声で我に返ると、求めるリュビツァの姿を探してみた。
祭壇のたいまつは七ヶ所。
七体の異形の像の前に置かれた空の水盤の中に、まるで供物のように薪がくべられている。
そしてその輪の中心、長方形の石の台の前に額ずく一人の少女?
「リュビツァ?」
思わず体が半歩前に出る。
しかし、そのリュビツァの額ずく方向にあるモノを見た時に、私の自制心は突き崩れて、思わず駆け出していた。
「ミローシュ!」
リュビツァが拝む祭壇には例の裸のいやらしい女の像があり、その像の腕に抱かれるようにして、裸のミローシュが縛り付けられていた。
「ミローシュ! どうしてこんな⁉」
リュビツァ、いったいここで何をしているのよッ?」
気が付けば私は、生け贄のようなミローシュの元に走り寄り、色のない冷たい瞳で笑うリュビツァに向かってそう叫んでいた。
「来たわねサト…。きっとお兄ちゃんを狙って来ると思ってたわよ。
このイヤらしい淫婦め。
お前なんかにお兄ちゃんを渡すもんですか」
彼女のかわいい口からは、人が違ったような毒気のある言葉が次々と飛び出した。
「どうしちゃったのリュビツァ。
そんなに…、そんなに私の事が嫌いだったの?」
「ああ、嫌いだね。大ッ嫌いだよ。
あんたも、セニエも、セチェーニも。
みんな、みんな、発情したメス猫みたいに人のモノを狙いやがって!
そんなに男が欲しけりゃ、マスでもかいてろってんだッ。
あはははははは」
「リュビツァ……」
聞くに耐えない言葉が次々と馬糞のように浴びせかけられた。
明らかに今の彼女は常軌を失っている。
とにかく何でもいいから彼女をなだめて、このヒステリー状態を落ち着かせないと。
「わ、悪かったわリュビツァ。
あなたの気持ちを傷つけたのは謝るわ。お兄さんにも二度と近づかないし、連絡もしないわ。だから許して。セニエもセチェーニもみんなリュビツァの事を心配しているのよ」
「ふん。『心配しているのよ』…か。
『楽しんでるのよ』の間違いじゃないの?
テメー達はいつも私が嫌がることをして私が苦しむのを見て笑って楽しんでいたじゃないか」
苦しげな…、泣きそうなリュビツァの顔。
「そんな事はないわ、リュビツァ。
それは誤解よ。みんな本当にあなたの事を……」
「ふん、口先だけならなんとでも言えるわよね」
「じゃあ…、じゃあ、どうすればいいの?
どうすれば許してくれるの?」
「…協力してよ」
泣きそうな顔なのに…、口元だけが笑っている。
「え?」
「私とお兄ちゃんがうまくいくように協力して」
「どういう事?」
「兄妹同士が結ばれてはいけないなんて戒律を作った世の中をぶちこわしてやるのよ。
誰でも、いつでも、どこでも、みんなが好きな事ができる世の中にするの。
だから…、そのための生け贄になってちょうだい、サト」
「リュビツァ…、あなた……」
今はもう、はっきりとリュビツァは笑っていた。
小さくてかわいかった唇が、奇妙に赤く、大きく横に広がっている。
「どうしたのサト。
さっきは協力してくれるって言ったじゃない。あれは嘘なの?」
「だって、そんな……」
「あら、イヤなの?
でも、あの子達はやってくれるみたいよ」
そう言ってリュビツァが首を振るその先には、
「セニエッ?、セチェーニ⁉」
ぐったりとして後ろの影に抱えられる二人の姿があった。
そしてその二人の後ろにいる影は、
「マイヨルド司教と、シスター・マドレーヌ?」
「お言いつけの通り、サトコをおびき出しましたわ、司教様」
セニエ達を抱えたままゆっくりと石段を下りてくる二人に、リュビツァは深々とおじぎをしながら言った。
「ぬふふふ、よくやったリュビツァ。
長い間行方知れずだったジャンヌ様の墓所のみならず、こうして最上の生け贄を手に入れる事ができるとはな」
マイヨルド司教が私の嫌いな醜いお腹を揺らしながら笑った。
「ありがとうございます。司教様」
「では、これでお前の役目も済んだ。
あとは友達と一緒に仲よく生け贄になっておくれ」

そう言ってリュビツァの頭の上にマイヨルド司教の手がかざされると、彼女の体は糸の切れた操り人形のように崩れ落ちた。
「リュビッ……」
〝ドスッ〟
「うっ……」
暗転。
リュビツァに駆け寄ろうとした私のみぞおちに、シスター・マドレーヌの容赦のない拳がめり込み、世界は暗闇に閉ざされた。

BAZUBI BAZAB
LAC LEKH CALLIOUS
OSEBED NA CHAK ON
AEMO
EHOWEHOW EEHOOWWW
CHOT TEMA JANA
SAPARYOUS

お腹が…、ズキズキと痛む。
手足が…、動かない。
ここは…どこ?
暗闇の中、手探りで自分のお腹をさすろうとした、が、手が動かない。
私は……。
「やっとお目覚めのようね」
〝はッ〟
唐突に戻った意識の中で、始めに理解できたのが、淫蕩な薄笑いを浮かべて私を見下ろしているシスター・マドレーヌの顔だった。
私は…。
私は裸の上に薄いギリシャ風の衣だけを着せられて、祭壇中央の四角い石の台の上に手足を縛りつけられて寝かされていた。
「これから自分がどうなるか分かる?」
美しいシスターの顔が舌なめずりをしながら、にったりと笑った。
「先生? 何を……」
自分の身に起こっている事がうまく理解できない。
「お前はね、我が偉大なる先祖にして魔女、ジャンヌ・デザンジュ様復活のための生け贄なのよ」
「ジャンヌ・デザンジュ?」
「知らないのかい?」
「し、知らないわ……」
「では、ルーダンの悪魔は?」
「知りません!」
「やれやれ、これだから東洋のちっぽけな島国の女は…、こんなに大事な歴史も知らないなんてね」
切れ長の美しい目を細めて彼女は言った。
「今から三百年以上も前。十七世紀の半ばにフランスのルーダンという町にある、とある女子修道院で実際にあった事だよ。
そこにはジャンヌ・デザンジュという美しい修道院長がいたの。彼女は永遠の美しさと快楽の心理を求めつづけて、ある日、それまで社会から異端とされつづけていた存在の、真の偉大さに気がついたのよ。彼女はその者達と契約を交わす事に成功し、そしてついにその大いなる力を手に入れる事にも成功したわ」
「…………」
「アマン・イザカロン・エアザス・ポリュシオン…。
彼女の呼びかけに対して、数十、数百の魔王や悪魔達が応じて降臨したわ。悪魔達は次々と修道女達に憑依していき、普段、彼女達がかぶっていた『貞淑』という名の仮面の下に隠んでいた欲望を解放してあげていったの。
そして最も類い希な力を持つジャンヌには、同時に七つもの魔王が降臨したの」
「…………」
「ひとつの修道院が丸ごと悪魔のための教会に生まれ変わったのよ。
さらに彼女は当時その町で高潔な神父として名高かった男を悪魔への生け贄とするために、魔法使いとして彼を法院へ告発したわ。神をあがめる人間どもは彼女に踊らされるがまま、自らの手でその高潔な神父の魂を火あぶりにして、地獄への供物にしてくれたわ」
「…………」
「でもそれは単なる始まりの宴よ。
その町から始まった悪魔の時代は、黒雲のようにヨーロッパ全土に広まって、何万、何十万もの生け贄の血を地獄へ送り込んでいったのよ」
「…………」
「どう? 魔女ジャンヌ・デザンジュと魔王達の力の素晴らしさが分かった?」
「…ひどい」
「おほほほほ、そうよ。ひどいのよ。
だけどいいじゃない。それが人間の本質なんだもの。力のある者、強い者が支配するのが人間の本質よ。狡くたって、卑怯だって、嫌らしくったっていいじゃない、それが力の本質だもの。教会のバカどもがいくら目を背けたって、『そこにあるモノ』は絶対にそこにあるのよ。
それが人間の本質だわ。
だから私は力を手に入れる。
この地に封じられしジャンヌ・デザンジュの魂を呼び戻し、彼女が契約した七柱の悪魔と今度は私が契約を交わすのよ。
そのためにはSATOKO。お前のような力のある娘の生け贄がどうしても必要だったのよ」
シスター・マドレーヌは狂気じみた野望を語りながら、万力のような強い力で私の肩をつかんだ。
「わ、私をどうする気?」
「まず三人の娘の血を祭壇に捧げて降霊の儀式を行うわ。
それからがSATOKO、あなたの出番よ」

三人の娘？　その言葉に冷たく背筋を走るモノがあった。
目に見えない力に動かされるように冷たい石の台に横たえた首を巡らせると、全裸に剥かれたセニエ達三人がミローシュさんと同じように立ったまま異形の石像に縛り付けられているのが見えた。
「あなたの寝ているその台。その台はジャンヌ・デザンジュが葬られた棺なの。
そこで悪魔に処女を捧げてもらうわ」
「なっ！　くっぅ」
あらがう手足に、からまるツタが食い込んだ。
「ふふふふ、無駄よ。
そのツタはほどけないわ」
私を見下ろしたその目が、巣箱から落ちた小鳥をもてあそぶ蛇のようにヌメリと輝いた。
「さあ、マイヨルド。
ぐずぐずしている暇はないわ。
早く娘達から血を取りなさい」
血を？
「い、いやあ。みんなに酷い事をしないで」
身じろぐ手足に食い込むツタが、石棺の角にこすれて〝ぎしぎし〟と耳障りな音を立てた。
「大丈夫よ、お嬢ちゃん。
アンタにはもっと惨い運命が待ってるからね。おほほほほほほ」
甲高い『女』の声が頭にガンガンと響く。
「くっ、うぅぅ」
この手はなんて非力なんだろう。
私はなんて馬鹿なんだろう。
こんなところで死ぬなんて。
『あの人』に会えないまま死ぬなんて。
絶対にいや。
かたく閉じた瞼から、押さえ切れなかった悔し涙が一筋こぼれた。

「マドレーヌさま、準備できましてございます」
その声に目を開けると、腕を頭の上に縛られたまま手首から血を流すみんなの姿が見えた。
「セニエ！　セチェーニ！　リュビツァ！」
ぐったりと意識を失った彼女達は、私の呼びかけにも答える気配はない。
「いいわ…、始めましょう。
呪文の詠唱とともにその血をミローシュの体に降りかけて」
「はい」
横たわった頭の上からマイヨルドの声がする。
「SALDIS… EDIMOS…
FALMOS… EDIMOS…」
マドレーヌの詠唱の声と同時に〝ぴしゃ、ぴしゃ〟という湿った音が祭壇に響いた。
「SALDIS… EDIMOS…
FALMOS… EDIMOS…」
辺りに立ちこめる、口の中を切った時のような鉄錆の臭い。
意識がもうろうとして…。
何も見えない。
「SALDIS… EDIMOS…
FALMOS… EDIMOS…」
《こよ…》
…だれ？
頭の中に、誰かの声がする。
そして誰かの手が私の体をはいずり回っている。
「SALDIS… EDIMOS…
FALMOS… EDIMOS…」
《我と来よ》
『あの声』じゃない。
以前、ここに来た時に聞いた『アノ声』だ。
「あ、あうぅぅ」
その強圧的で一方的な声は、甘く、刺すように頭の中に入ってくる。
「SALDIS… EDIMOS…
FALMOS… EDIMOS…
SALSOS CLISOS……
FALSOS CLISOS……」
『手』は私のあらゆるところに忍び入り、体を覆う薄い布を除々にはぎ取っていく。
あらがえど、体の自由はなかった。
【…巾】
「SALDIS… EDIMOS…
FALMOS… EDIMOS…
SALSOS CLISOS……
FALSOS CLISOS……」
《我と来よ強き力の少女よ。
数百年の時をへて、我、汝に命ず…》
『手』が私の膝を割り、のしかかる気配がする。
「ふぁ、…くぅ。
いや、やめて」
助けて…、助けて…『誰か』。
誰か誰か誰か誰か誰か誰か誰か…
たすけて…。
『手』がのどに食い込み、爪が薄い皮膚を傷つけると細い血が流れ、白い棺の上に数滴の赤色が落ちた。
「SALDIS… EDIMOS…
FALMOS… EDIMOS…
FALSOS CLISOS
AAALLEEE
ALEE ALMOST
AMISTUPALE z……」
《我と我が力となりて、我が復活の贄となれ》
気配が前に押し出した。
「いやあああぁぁぁぁッ」
「サトコ！」
〝ザシュウゥ〟
「ぐ、ぐは。おおおう？」
不意に差し込むような頭痛が消えた。

と同時に、体の上に何か重いモノが倒れかかって来た。
「キサマは…ラーバ！」
「大丈夫？　サトコ。助けに来たわよ」
戒めを解かれ、呆然と抱き起こされるまま痛む手首に触った手がヌルリと滑った。
見ると、私の小さな左の胸から脇腹にかけてが、ねっとりと流れる赤い血で化粧されていた。
「きゃあああああッ！」
「大丈夫、大丈夫よサトコ。
それはあなたの血じゃないのよッ」
恐慌に囚われて頭を掻きむしる私の手をラーバ先生が握りしめる。
ブレて宙を泳いでいた私の瞳が、棺の下に横たわった醜い全裸の男の死体を映し出した。
その死体の名は…マイヨルド。
「先生！」
私は奥歯を鳴らしながら、必死でラーバ先生にしがみついた。
「おのれ老いぼれ。
神聖な儀式の邪魔をするとは……」
自らも修道服を脱ぎ捨て、裸で儀式をしていたマドレーヌが燃える目でラーバ先生をにらんでいた。
「なにが神聖なものですか。
汚らわしくて反吐が出るわ」
先生が私の服の前合わせを閉じてくれながら言った。
「マドレーヌ…まさかあなたが悪魔崇拝の背神者の一味だったなんて…。
十代の頃からずっとこの学院で一緒に暮らしてきたのに」
「ふんッ。おかげさまでね。
ばかばかしい戒律に縛られて、こっちはまさに生き地獄だったわよ」
「マドレーヌ…。
サトコ、みんなを助けてあげて」
ラーバ先生はマドレーヌをにらんだまま、隠しからナイフを取り出して私の手に握らせた。
「先生…」
「大丈夫。リュビツァも彼らに操られていただけよ。
だから、今はあなたがみんなを守ってあげなさい」
「…はい」
「お待ちぃ、そうはさせないよ」
私を捕まえようとするマドレーヌの前にラーバ先生が立ちふさがった。
「観念しなさい、マドレーヌ。
あなたを拘束し、高等法院の異端審問裁判に連行します」
「おのれぇ、老いぼれが。
そうはさせぬ、させぬぞおぉ。
ぉぉお？　ごわわおおおぉぉぉッ」
突然、マドレーヌはのどを掻きむしると、狂ったようにクルクルと回りだし、天をつかむように右手を上につき出すと、ばったりと地面に倒れ込んでそのまま動かなくなった。
「どうしたの、先生」
「わ、分からないわ。
とにかくこの隙にみんなを助けてあげて」
「はい」
与えられたナイフで一人ずつ戒めを切っていく。
よかった。縛られたままずっと腕を上げていたせいで、どうやら血は止まっているらしい。そんなに太い血管が切れたわけでもなさそうだ。
「先生、女の子のツタは切りました。後はミローシュさんだけです」
「そう、いいわ。そっちは私がやります。サトコはみんなを起こしてあげて」
倒れたマドレーヌを調べていたラーバ先生が立ち上がって言った。
「はい。…あの、シスター・マドレーヌは？」
「…死んでるわ」
「え!?」
こんなあっけない幕切れってありなの？
よりにもよって、悪の親玉が自爆しちゃうなんて。
三人を起こしながら、私は弛緩した頭でぼんやりとそんな事を考えていた。
と、その時。
「ふふふふふ。礼を言うぞ、老女よ」
いきなり意識の無いはずのミローシュさんから声がした。
「我、復活に必要なものはすばらしき乙女の血と魔女の魂…、古の契約より解放され、我ここに復活せん」
「誰ッ!?」
ラーバ先生が彼との距離を開けつつ、素早く身構えた。
がっくりと垂れ下がっていたミローシュの首がゆっくりと持ち上がり、妖しい光を放つ瞳がゆっくりと開かれた。
「先生？」
「…お兄ちゃん？」
「サトコ？　ねぇ、これはいったい…」
おまけに、一度に目を覚ました女の子達が一斉に事態の説明を求めてしゃべり始めた。
「待って、説明は後よ。早くここから逃げるの」
散らばった彼女達の寝間着をかき集め、その手に押しつける。
「やだ、お兄ちゃん、どうしたの？　どうしてそんなに血だらけなのよ」
しかし、私の制止を振り切ったリュビツァが、ミローシュさんに向かって駆け出して行く。
「待ちなさい、リュビツァ」
横から飛んだ厳しい一喝で、リュビツァの足が止まる。
「ラーバ先生？」
「あなたのお兄さんは悪霊に取りつかれています。今から除霊をしますから、そこをどきなさい」
エクソシストとしての厳しいラーバ先生の言葉だった。
「悪霊？　…そんな。
先生、お兄ちゃんを助けて！」
ラーバ先生の修道衣にリュビツァがすがりつく。
「ええ。だから後ろに下がっていてね」

私は先生にゆっくりと押し戻されるリュビッァの体を抱くと、祭壇から少し離れた通路の踊り場までみんなを下がらせた。

「はあああああぁぁぁ」

石像に縛りつけられたままの『彼』が、身もだえながら生臭い毒霧の息を吐いた。

「天にまします父よ。

御名のあがめられ、御国が地に来、御心が行われますように…」

先生は隠しから聖布を取り出して首にかけると、右手に聖水の小瓶、左手に聖書を持ち、『彼』の前に立って声を張り上げた。

悪魔祓いの始まりだ。

「日々の糧を与え、我らの罪を許し、負い目を許したまえ」

「があぁぁぁぁぁうぅぅぅ」

〝どおおぉぉぉぉうぅぅ〟

『彼』が吠え、祭壇に掲げられたたいまつの炎が風に舞い踊り、獣の吠え声のような音をたてる。

「初めのごとく、世に終わりはない。

神よ、信仰のしもべを救いたまえ。

堅い城となりたまえ。

敵に立ち向かい、悪の暴君を地獄の炎に落とし、怒りの獅子をくだし、彼を守りたまえ」

「ワはははは。…無駄だ、老女よ。

悪魔は人に屈しない」

悪魔の巨大な力が辺りの空気をふるわし、びりびりと私の鼓膜を叩いた。

「ぶどう畑を荒らす者に恐怖の稲妻をくだしたまえ。

この悪霊をミローシュ・トゥツォビッチから放ち、彼を虜囚の苦しみから救いたまえ」

吹き荒れる風の中、懸命にこらえながらラーバ先生が聖書を読み上げる。

「ふふふふふ、無駄だ、ムダだ、ムダダァァ。愚かな女よ、お前も辛気くさいその服を脱いでこちらへ来い。

さすれば枯れ果てたその体を若い女の体に変え、人の身には許されぬ快楽を与えてやろうぞ」

「…この神になぞられた、あなたのしもべを守護したまえ。

父と子と聖霊の永遠の恵みを与えたまえ」

断崖に吹き込む強風と、狂い舞い踊る木の葉。

巻き上げられた小石や小枝が、先生の体に無数の小さなキズを作っていく。

「知っている、知っているぞ…。

お前の秘密を知っているぞ。

お前が若い頃、親しくしていた若い神父に恋をしていた事を知っているぞ」

『彼』の右手を縛っていたツタが、ずるりとほどけて垂れた。

彼についた悪魔は〝そのまま〟ついと右手を前にさし出し、ラーバ先生に近寄る仕草を見せた。

「御力により、毒蛇とサソリを踏みにじり、いやしいしもべに罪からの赦免を与え。

凶猛な悪霊と戦う力を授けたまえ！」

先生はいっそう力のこもった声とともに、聖水を悪魔に向かって降りかけた。

「はう、おおおおうぅ」

〝じゅっ〟という音とともに『彼』の体に飛沫がかかったような火傷の痕が走る。

「見よ、主の十字架が汝を滅ぼす。

主とともに…」

「お前は…その神父に抱かれたかった。

神父の『男』が欲しかったのだ」

悪魔は一度手を戻し、濡れて妖しく光る瞳で先生を見つめた。

「み、御名により、我が戦いを助けたまえ」

「だからお前は自ら進んでその神父の前に肉体をさらし、神父の中の男を誘惑したのだ」

汚れた悪魔の言葉が先生の力を奪っているように見えた。

聖書を読み上げる声が途切れがちになり、先生の額の脂汗がにじみ始めている。

「先生ッ、頑張って！」

思わずみんなと一緒に声が出た。

「…心のおごった暴力の徒が私の命を狙う」

「自分を偽るな」

「だが…神は私を、救い…命をのべたまい。

解放…したま…ぅ」

「『男』は堕ちた」

「ち、父と、子と、せ、聖霊に…栄光あれ」

「男はお前の『肉』の前に自分の信仰を捨てたのだ」

『彼』の体から、またひとつ太いツタが離れて落ちた。

「『あの日』からお前は、聖職者を堕落させた地獄の淫売になったのだ」

悪魔の手がゆっくりと先生の喉元に迫る。

「汝、けがれたる悪霊よされッ！

汝を地獄へ落としたキリストの命令。

立ち去れ。父と子と聖霊の名において、生者と死者と裁かれる神の御名において命ずる。このしもべから去れッ！

キリストの力が汝を追う」

二度(ふたたび)、三度(みたび)、悪魔に聖水がかけられる。

そして肉の焦げる匂い。

「ムダだ、老女よ。

お前の心には恐怖がある。

そして幼き日に義父から与えられた肉欲の芽がいまだに春を求めて眠っている。

いかに贖罪の日々を送ろうと、そうして自分を偽り続けている限り、お前の女を焦がす甘美な疼痛は、お前に地獄の苦しみを与えるのだ」

先生の喉をわしづかんだ悪魔がミローシュさんの顔でどろりと笑った。

「ぐぅ…、お、お黙りなさいッ！」

「ふ。『こちら』に来るのだラーバ。

お前はもう知っている。

自分の心が望んでいるモノをお前はもう知っている。思い出すのだ。

この男の肌で、若き日に失った甘美な蜜の味を思い出すがいい」
悪魔は先生に体をよせると、破廉恥な仕草でミローシュさんの体を先生にこすりつけている。
「お…お兄ちゃんッ」
「リュビツァ！　出ちゃダメッ！」
思わず身を乗り出すリュビツァをみんなで引き止める。
「や、…やめて」
「ふふふふふ、さあ、…こよ」
悪魔の手が修道衣の裾を割って入る。
「やめ…、ぜ、全能の神の前に汝は有罪…」
「ムダだ…」
「神の…子の前に有罪。人類の前に有罪ッ」
「かわいいものだ」
「主…が、汝を追放する……」
“ごつん…”
先生の手から聖水の瓶が落ちた。
「神は炎にて生者と死者と現世を裁きたもう。
見よ、主の十字架が汝を滅ぼす」
「さあ…」
「しゅ、主とともにッ」
“グサッ”
「ぐがアァッ!!」
『隠し』の中から、服越しに『彼』の脇腹にナイフが突き刺さった。
「おのれえぇッ」
逆上した悪魔の拳がラーバ先生の体を何メートルも吹き飛ばした。
“ゴグッ”
先生の体は背中から岩壁へたたきつけられ、鈍い音がしたまま動かなくなった。
「先生ッ」
「お兄ちゃん！」
「ラーバ先生!!」

セニエ、リュビツァ、セチェーニの三人が思わず身を乗り出し、倒れた先生の元へ行こうとする。
私は…、私は、『それどころ』ではなかった。
《来よ、力ある少女よ…。
我が花嫁よ。
背徳の褥にて我と契りをかわそうぞ》
や…、いや……
《来よ、汝、女よ。
悪魔の精を受けて生まれ変わるのだ》
私だけにしか聞こえないその声が、四肢にからみつき、縛り上げて、心にもない動きを強要する。
「サ、サト？　どこに行くの？」
マリオネットのような奇妙な動きで悪魔へと歩いて行く私をリュビツァが引き止めた。
「リ…ビッ…、たす…け……」
「サト！」
いきなりリュビツァが私にしがみついた。
しかし、それでも私の体はリュビツァを引きずって前進を続ける。
「セニエ、セチェーニ、手を貸してッ！」
「ど、どうしたのリュビツァ？」
「サトが…、サトが『あいつ』に呼ばれているのよ。
『あいつ』はサトの持つ力が欲しいんだわ。サトもお兄ちゃんみたいにする気なのよ!!」
「ほんと？」
「そうよ、だからサトを『あいつ』のところにやっちゃダメ。みんなでサトを引き止めてぇ」
「分かったわ。
…駄目よサトコ、ここから逃げるのよ」
腰、腕、太股、体がつかめそうな場所にしがみついたみんなが懸命に押し戻そうとする。
「はあーっ、はははは。面白い。
娘達よ、止められるモノなら止めてみせろ」
髪を掻き上げた悪魔がミローシュさんの綺麗な顔で笑った。

「くぅうう〜」
「サトコぉ、ダメ〜ッ」
「行っちゃだめぇぇ」
三人がかりでしがみつく彼女らの体を、じり…、じり…、と前に引きずりながら私の体はなおも進む。
《そう…、もう少しだ。
もう少しでお前は私のものになる。
感じているのだろう？　さっきから送っている私の力を。
感じているのだろう？
未だ花開かざるつぼみの快感を…。
無意味な抵抗はやめるのだ。
早く理性を手放せ、そうすればそのぶんだけ早く楽になれるぞ？》
（…て）
《…ん？》
「…だめだよ、みんな。手を離して…。
このままだと私、みんなをあいつのところへ連れて行っちゃうよ。
みんなだけでも、はや…く、ここから、にげ…て……」
《驚いたぞ。そんなになってまだ口がきけるのか。これはますます欲しくなった》
守りたい。私の大切な人達を。
守りたかった、私の…大好きなあの人を。
「ばかッ、ばかばかばか。
サトのおバカやろうッ！
私たち友達でしょう、見捨てるなんてできっこないよ！」
普段なら絶対に言わないような強い声で、リュビツァが私を叱った。
【…巾】
…ああ、耳鳴りがする。
「サトがピンチなのに、それを助けられるのは、私達しかいないのにッ。
見捨てるなんてできないよぉ!!」
【⊕巾】

…誰なの。『私』を呼ぶのは。
「セニエ、リュビツァ！　がんばんのよ！
ここでサトコを離したら二度と会えないんだよ！」
セチェーニ。
【俺はもう子供じゃない。
だからその時、その場所で、その子を守ってやれるのが俺
しかいないなら。…やるしかないだろう】
知ってる…、私は知ってる。
『私』は知ってるわ、『この人』を。
あの森でみつけた…、『私』の伴侶を。
あの泉で名前をくれた、『私』の保護者を。
「見捨てたりしない。見捨てたりなんかするもんか。サトも
お兄ちゃんも、きっと…、きっと私が助けるんだ」
【俺は女の子がいいな。
やさしくて、暖かくて、そして芯の強い女の子が。
名前は…、そう、『蓮』がいいな】
そうよ…その人の名は…。
【蓮】
…パパ。

〝どん！〟
落雷のような轟音がとどろいた。
私の体が白く輝き、転生の封印がほどかれた。
ついでに、ちゃちな呪縛も粉々になって吹き飛んだ。
「きゃああ⁉」
目のくらんだみんなが一斉にその場に尻餅をつく。
「大丈夫みんな？」
「いたたた…、サトコ？」
「みんな、ありがとう。もう大丈夫。
だけど、ちょっと待っててね。
ラーバ先生とミローシュさんを助けなきゃ。
そしたら、部屋に帰ってみんなで温かいミルクでも飲も。
体、冷えちゃったもんね」

呆然とするみんなを静かに脇にどけて、石段を一段降りた。
「サト⁉」
リュビツァが私の後を追う。
「ありがとう、リュビツァ。
私、あなたに助けてもらったよ。
次は…、私の番だね」
「…うん。あ、サト」
「何？」
「わたし、ちっちゃなブランデーのびん、…持ってるから」
私は心から笑顔を彼女に返した。

「さて…、待たせたわね。幕引きと行きましょうか」
「むぅ、我が呪縛を自力で解いたか…。
が、自ら進んで我が元へ来るとはようやく悪魔快楽の素晴
らしさが分かったようだな。
ふふふ、さあ、来い。
お前の好きなこの男の体で抱いてやろう」
「バカ言ってんじゃないわ。
その人の体を返してもらいに来たのよ」
ラーバ先生が持っていたナイフと聖水を拾いながら言った。
「ふ、そんなモノで我に立ち向かうつもりか？
ムダだ。たとえ司祭だろうと、教皇だろうと、今の聖職者
どもに魔王の悪魔祓いができるわけがない。
悪魔を恐れる心がある限り、人は悪魔には勝てない。悪魔
は人の恐れる心が生み出すのだ」
「そうね、私もそう思うわ。でも私は異教徒だもの。そんな
もの初めから関係ないわ」
聖水を一口、口に含み、ナイフに吹きかけて清めの水とした。
「ぬうぅぅぅ！」
〝どおおぉぉぉぅ〟
なおも近づく私に、気圧されたようにひるんだ悪魔が、突
然顔を朱に染めて私をにらみつけた。
と、瞬間わき起こった烈風とともに、水盤、瓦礫、果ては
石棺の蓋まで、私以外のありとあらゆるモノがへしゃげ、恐
ろしいスピードで後方へ飛び去って濁流の流れる断崖の下へ
と消えていった。
「ばかな…、お前は……
異教徒ならなおさら…なぜだ！」
「くす。案外悪魔ってセコイのね。
悪魔が怖いのは『それ』を悪魔にしたキリスト教徒だけよ。
いま、あなたの目の前に立っているような…ね」
「なッ⁉」
「謹請天神地祇八百万神等降臨此座無上霊宝神道加持六甲六
丁天門自成六弋六天門自開六甲盤垣天門近在……。
今送ってあげるわ、あなたがいた地獄よりも、もっと深く、
苦しい地獄へね」
『つるぎ』を地面に刺す。
奈落の門が開き、疾く虜囚をその闇き口に飲み込もうとす
る。
これが私の唯一の力、正と負の狭間にある私だけの力。
「ミローシュさん！」
私はミローシュさんの体が奈落に落ちきる寸前に手を伸ば
して彼の体をつかんだ。
その彼の体からは黒い影がはがれて永遠の闇へと落ちてい
く。
「お兄ちゃん！」
私の手にリュビツァの手が加わった。
そして、セニエ、セチェーニの二人の手も。
「ひっぱって！　思いっきり！」
「あうぅぅぅ」
ミローシュさんの足が穴の縁を越えると同時に奈落はその
恐怖の口を閉じた。
風はやみ、辺りは嘘のような静けさに包まれて、
〝かさり〟
枯れたツタから落ちる葉っぱの立てる音だけがその場に大
きく響いた。

Epilogue

光る風の渡る朝。
約束通り部屋に戻ってからブランデー入りのミルクパーティーをした私達は、今朝はチョットだけみんなで朝寝坊した。
私達は食堂で朝食のパンをむりやり口に押し込むと、寝ぐせがついた髪もそのままに早朝礼拝の行われるチャペルへと飛び出していく。
「せんせいッ、おはようございますッ!!」
途中、松葉杖をついたラーバ先生と出会った。
「おはよう、みなさん。
…体は、大丈夫?」
さすがに今日は声の調子も低い。
「はい、私達は大丈夫です」
「そう…、でも、あなた達を大変な目にあわせてしまってごめんなさいね。
シスター・マドレーヌの事は適当に理由を作って説明するから、あなた達も早く忘れなさい」
「…はい、分かりました」
「…ありがとう。…でも」
「なんですか?」
「いったいあの後どうして助かったのかしら?
途中から気絶してしまって、記憶がないのよ。あなた達何か知らないかしら?」
「知ってますよ」
くすくすと忍び笑いながら私達は言った。
「え?」
「女神様が来て、私達を助けてくださったんです」
リュビツァが晴れやかに答える。
「え?」
「うふふふふ」
私たち四人はお互いの顔を見つめ合って笑い合った。
「ねー」
そして、四人の声が重なる。
輝くカシスの庭で、少女達（わたしたち）の青春はもう少し続きそうだった。

ソフマップ

描き下ろしテレカ

まよちんの添い寝ＣＤ

ヨドバシカメラ

描き下ろしテレカ

とらのあな

描き下ろしテレカ

メディオ

描き下ろしテレカ

げっちゅ屋

描き下ろしテレカ

オフィシャル通販

万葉と天野先輩のスク水マシュモピロ

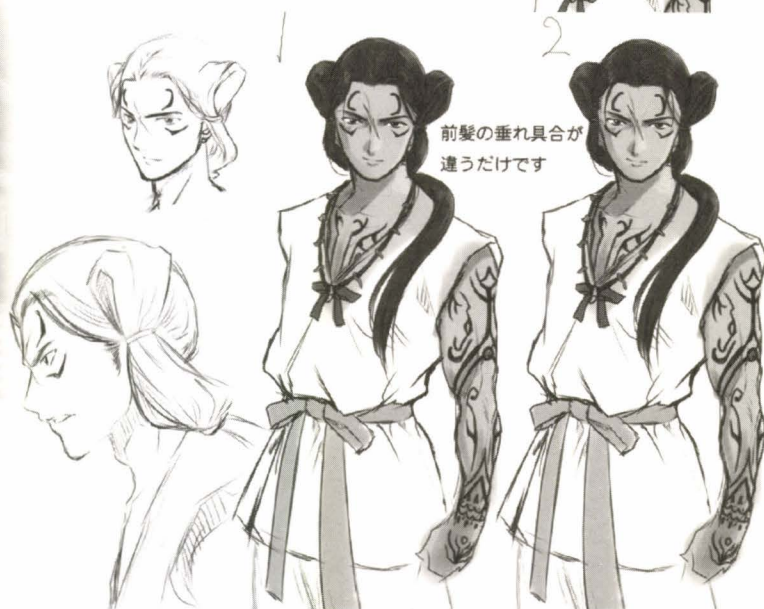
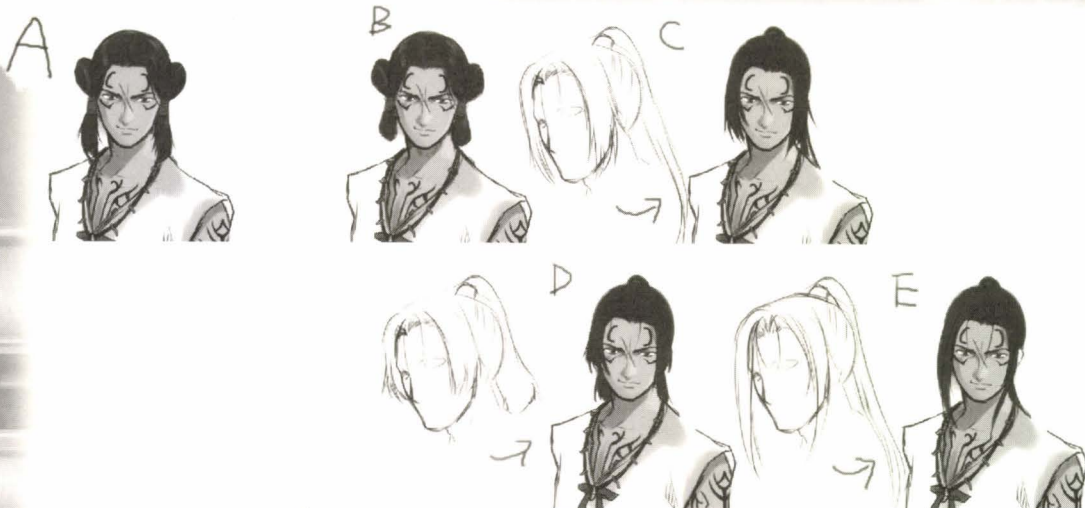
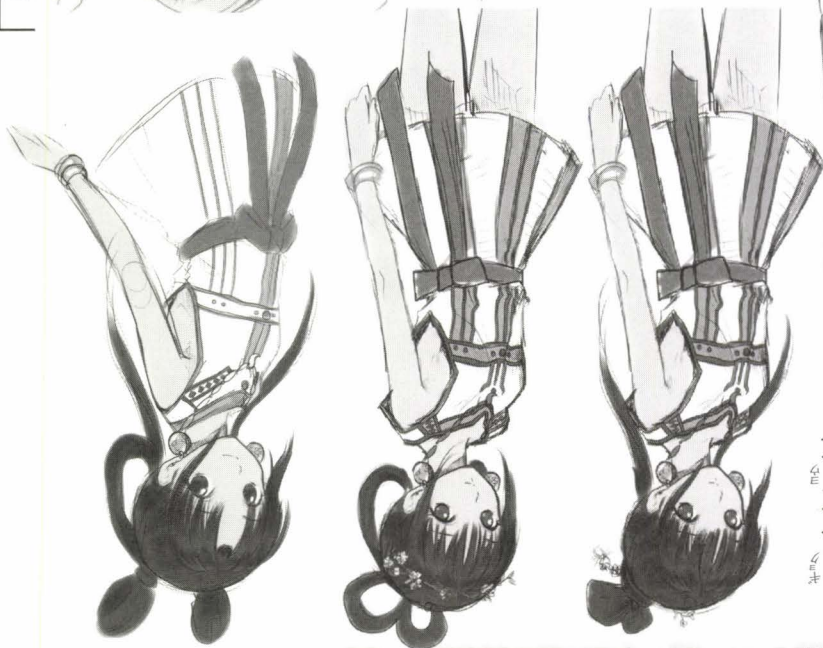
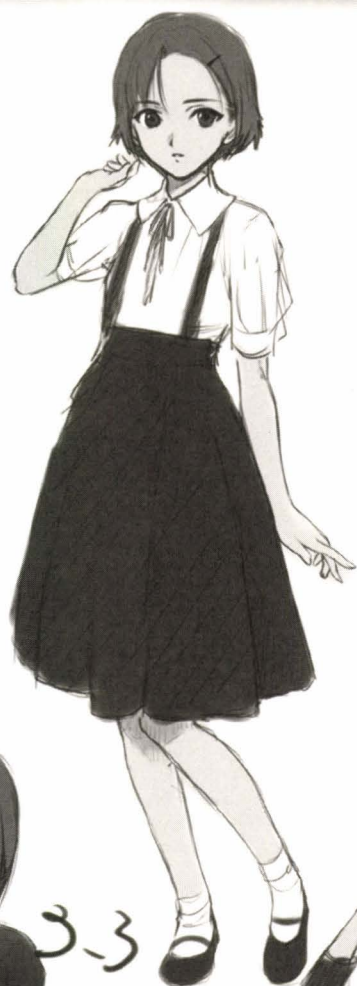
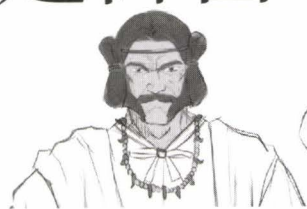
メロンブックス

しおりんの添い寝ＣＤ

グッドウィル

沙夜先生の添い寝ＣＤ

三章 創作線画集

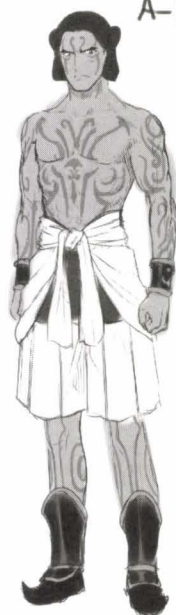
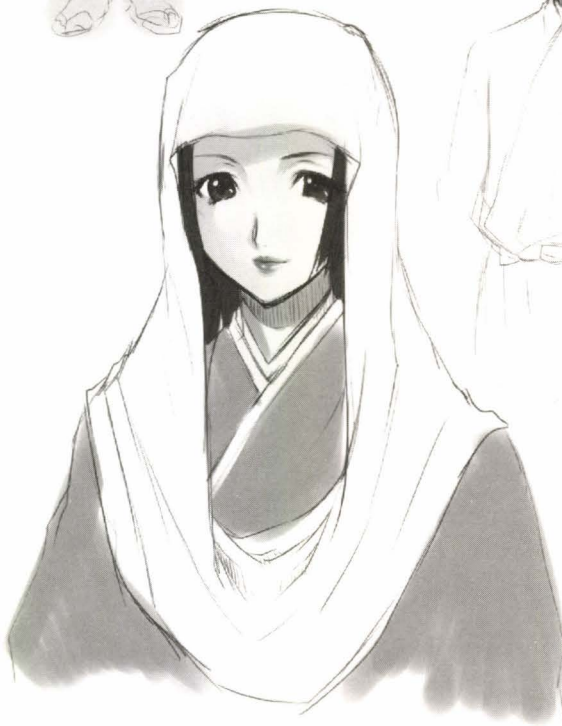
登場人物のデザイン案やラフ画などを一挙公開！

キャラクター決定までに描かれたイラストの数々

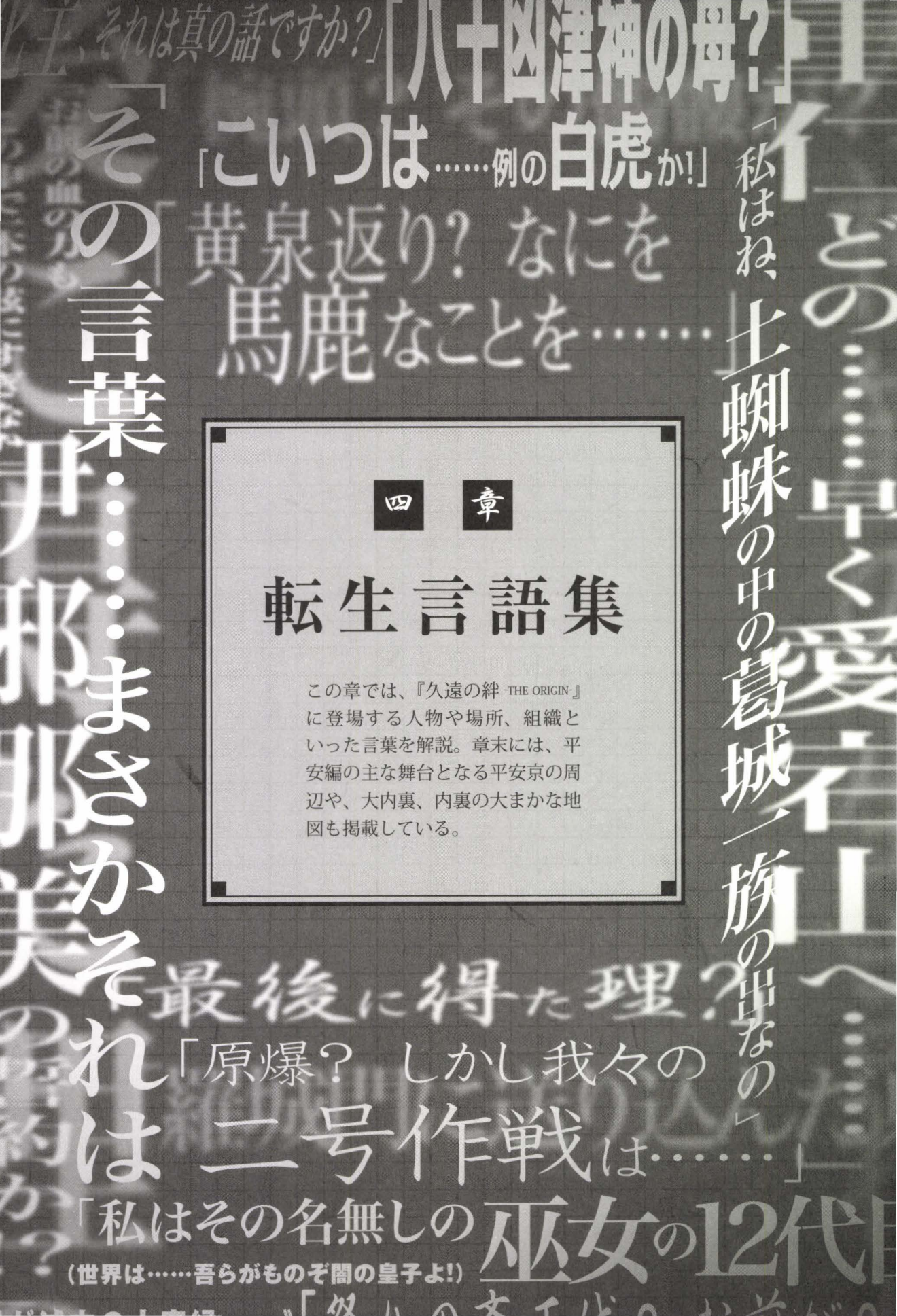
武日照（タケヒナテル）

久世鷹臣（くぜたかおみ）

玉葉（ギョクヨウ）
玉藻前（たまもまえ）

天野由香里（あまのゆかり）

建御雷命
タケミカヅチノミコト
シタテルヒメ
下光比売
シタテルヒメ
オオクニヌシ
大国主命
オオクニヌシノミコト
武御名方
タケミナカタ
A-1
A-2
A-3
B

藤原多子（ふじわらのまさるこ）
藤原多子
藤原呈子
藤原呈子（ふじわらのしめこ）
守仁（もりひと）
近衛天皇（このえてんのう）
美福門院（びふくもんいん）
史実では
失明しかけているので
目の色を茶系か、
青系(灰)にして
うすく
見せる
16歳
冠下
髻(もとどり)

天若日子
アメノワカヒコ
事代主
狸オヤジ風
善玉風
ゑびす
事代主
コトシロヌシ
土蜘蛛
つちぐも
指揮官クラスとか
小隊リーダーみたいな人は
ツキノワグマの毛皮を
着ている…とか。
フツーの兵はフツーの
クマの毛皮
出雲軍
出雲軍
いずもぐん
オノ
土グモ

加藤久脩
かとうひさなが
涼しい顔が特徴
信西
しんぜい
鳥羽院
とばいん
1:1
藤原忠道
ふじわらのただみち

四章

転生言語集

この章では、『久遠の絆 -THE ORIGIN-』に登場する人物や場所、組織といった言葉を解説。章末には、平安編の主な舞台となる平安京の周辺や、大内裏、内裏の大まかな地図も掲載している。

あ行

匕首【あいくち】〔道具〕鍔（つば）がない短刀。

暲子【あきこ】〔人名〕平安編における常磐沙夜の前世。鳥羽院の娘で、美福門院の次女ということになっている。

足抜け【あしぬけ】〔その他〕逃げ出すこと。また、脱走者。

蘆屋道満【あしやどうまん】〔人名〕安倍泰親の先祖である、安倍晴明のライバル。旧作では土蜘蛛の1人だった。

芦屋幹久【あしやみきひさ】〔人名〕秋津学園の教師。オカ研とディーバの顧問を兼任する。

阿闍梨【あじゃり】〔役職〕高位の僧侶。

網代車【あじろぐるま】〔道具〕牛車の1種類。大臣や納言などが、遠出の際に用いる。

愛宕山【あたごやま】〔地名〕平安京の北西にある山で、重仁と玉藻前が出会う場所。崇徳院がよく登っているらしい。

熱田神宮【あつたじんぐう】〔地名〕愛知県名古屋市にある神社。楠御前社がある。神剣が納められていた。熱田の宮。

安倍晴明【あべのせいめい】〔人名〕安倍泰親の先祖である強力な陰陽師。旧作では有坂汰一の前世だった。

安倍泰親【あべのやすちか】〔人名〕平安編における有坂汰一の前世。安倍晴明の子孫の陰陽師で、安倍家に預けられた重仁に、さまざまな術を教える。

天津神【あまつかみ】〔その他〕高天原に住む強大な神々。地上の産物を食べると高天原に戻れなくなるため、移住して国津神となった須佐一族を介して豊葦原中津国を治めている。

天照【あまてらす】〔人名〕天津神のトップ。須佐一族の始祖である須佐之男の姉でもある。かつて、須佐之男が高天原に害をなすのではないかと恐れ、その真意を確かめるために誓約くらべという賭けをして、負けている。

天野聡子【あまのさとこ】〔人名〕御門武の通う秋津学園の3年生で、オカ研の部長。武が前世を思い出すのを手伝う。

天野由香里【あまのゆかり】〔人名〕昭和編における天野聡子の前世。零号乙作戦の責任者の娘。

天之尾羽張【あめのおはばり】〔道具〕武日照の祖父である十拳劔の兄弟。建御雷の父でもある。伊邪那岐が、伊邪那美を焼き殺した火之迦具土を斬る際に振るわれた。

天菩比【あめのほひ】〔人名〕武日照の父にして、天照と須佐之男の子。妻は高比売。神代編では既に死んでいる。

天之御中主【あめのみなかぬし】〔人名〕世界と初めて契約し、最初の観測者となった神。天御中主とも。

天叢雲【あめのむらくも】〔道具〕地上を滅ぼしかけた大魔霊・八俣大蛇の尾から出てきた神剣。高天原一の秘宝。叢雲とも。

天若日子【あめのわかひこ】〔人名〕天照の命令で、豊葦原中津国に下りてきた天津神。玉葉の父で、下光比売の夫。

荒御霊【あらみたま】〔その他〕勇猛で荒々しい神霊。

有坂汰一【ありさかたいち】〔人名〕現代編における、御門武と斎栞の幼なじみ。爽やかな性格をした陸上部のエース。

伊邪那岐【いざなぎ】〔人名〕伊邪那美の夫。死んだ伊邪那美を冥界から連れ戻そうとして失敗している。天照や須佐之男の父であり、すべての神の祖先。神代編以前に死亡しており、冥界に造った宮殿から地上を支配しているとの噂がある。

伊邪那美【いざなみ】〔人名〕伊邪那岐の妻。火之迦具土を産んだ際に命を落とす。伊邪那岐により地上へ連れ戻されかけるも失敗。冥界の女王となる。

伊邪那美流反魂術【いざなみりゅうはんごんじゅつ】〔技〕伊邪那美より須佐一族の女にだけ伝えられた、禁断の呪法。女の陰門の中にある冥界への門を開いて新しい命を呼び込み、死に向かう命を救う。対象の魂が術者の魂よりも重ければ、術者も死ぬ。黄泉返りの秘術とも。

石舞台【いしぶたい】〔地名〕奈良県明日香村にある古墳。出雲の黄泉比良坂と同じく、冥界に繋がる門があるらしい。

出雲【いずも】〔地名〕現在の島根県の東部。霊力が霊脈を通して冥界から豊富に湧き出している。神剣や強い魔物が生まれる土地としても有名で、土蜘蛛も多い。根堅州国とも。

斎栞【いつきしおり】〔人名〕御門武の従妹。幼なじみにして同級生でもある。武に好意を抱く。

斎節子【いつきせつこ】〔人名〕御門武の母方の叔母で、斎栞の母。武を預ける未亡人。

斎女【いつきめ】〔役職〕神事に携わる、若い未婚女性。

伊都之尾羽張【いつのおはばり】〔道具〕建御雷の父である、天之尾羽張の古い名前。

遺伝性球状赤血球症【いでんせいきゅうじょうせっけっきゅうしょう】〔その他〕赤血球が球状になり、壊れやすくなる病気。千紗はこの病気の変種を患っており、症状を抑えるため、他人の血を定期的に飲む必要があるらしい。

稲苗月【いななえづき】〔その他〕5月のこと。

犬神【いぬがみ】〔その他〕元禄編以降、オサキが呼ばれるようになった名前。また、現代編で芦屋幹久が使役する獣。

犬神筋【いぬがみすじ】〔その他〕狐憑きの四国での呼び名。犬神憑きとも。

伊賦夜【いぶや】〔地名〕出雲にある土地。伊邪那岐が冥界に入る時に通った黄泉比良坂があり、その近辺はとくに霊脈が多く、冥界との壁も薄い。谷や泉もある。

妹背【いもせ】〔その他〕恋人や配偶者、異性の兄弟。

磐座【いわくら】〔その他〕神の居場所のこと。

殷【いん】〔地名〕紀元前11～16世紀ごろの古代中国王朝。紂王の代に武王によって滅ぼされた。

誓約【うけい】〔その他〕結果がAならば吉・真、Bならば凶・嘘などと事前に決めてからおこなう占い。

内膳司【うちのかしわでのつかさ】〔組織〕帝の食事を担当する、宮内省の役所。宜秋門のすぐ北にある。

印可【いんか】〔その他〕極意を得た者に与えられる免許。

采女【うねめ】〔役職〕帝や皇后に仕えた宮内省の女官。

優婆塞【うばそく】〔役職〕仏教の男性在家信徒。

瓜の入醤【うりのいりひしお】〔その他〕発酵した豆の汁に塩を入れ、干した瓜を漬けたもの。

運命の半身【うんめいのはんしん】〔その他〕元禄編で茉璃が、柾崇を自分の魂を救う、運命の伴侶だとして呼んだ異名。

江口【えぐち】〔地名〕平安京と西国の海路を結ぶ摂津の港。遊女が多くいた。現在の大阪市の北東にある東淀川区周辺。

衛士【えじ】〔役職〕左右の衛士府または衛門府に配属され、1年交代で宮廷を警護した兵士。

鴛鴦【えんおう】〔その他〕おしどりのこと。

役行者【えんのぎょうじゃ】〔人名〕修験道の開祖。葛城一族の出身。

宴の松原【えんのまつばら】〔地名〕魔物が出そうなほど鬱蒼としている広大な松林。内裏の西隣にあり、一部は馬場にもなっている。平時には各種の催し物が行われているが、災害時には帝が住むための仮内裏が立てられるらしい。

花魁【おいらん】〔役職〕最高級の遊女。顔を確認せずに呼び出すように頼まなくてはならないため、呼び出しとも言った。禿と呼ばれる10歳ごろから色々な芸を仕込まれている。一定年齢に達して花魁となるまで客を取らない。なお、花魁が初めて客を取ることを水揚げと言う。禿として学んでいない下級遊女の場合、客を取るのに年齢制限はない。

桜姫楼【おうきろう】〔地名〕茉璃が入る遊郭。

意宇の里【おうのさと】〔地名〕神と人間が暮らす、豊葦原中津国の王都。出雲にあり、須佐一族が治めている。

大神神社【おおかみじんじゃ】〔地名〕三輪の地の中心にある神社。崇神帝の時代に都で病気が流行した際、大物主を祭ると治まった。それ以来、製薬にご利益があるとされ、朝廷第一の神社として大切にされてきた。

大国主【おおくにぬし】〔人名〕神代編において、須佐王朝の君主である国津神。高天原の支配を受け入れ、豊葦原中津国を代理統治している。須佐之男の息子であり、建御名方と事代主の父。武日照と玉葉の祖父でもある。

大目付【おおめつけ】〔役職〕大名や朝廷などが、幕府に反乱を企てていないかを監視する、老中の部下。

大鬼主【おおものぬし】〔人名〕大国主と須勢理毘売との間に生まれた神。母が冥界出身のため、体を得られなかった。

大物主【おおものぬし】〔人名〕三輪山に祭られている神。蛇を眷属としている。ヒメタタライスズヒメの父。太祖とも。

オカ研【おかけん】〔組織〕オカルト神秘学研究会。斎栞や吉川絵里が所属しているクラブで、天野聡子が会長を務めている。

主上【おかみ】〔役職〕当代の帝のこと。

おきゃんぴぃ〔その他〕明るく元気で軽い様子。

奥津城【おくつき】〔地名〕神の真髄が祭ってある場所。

オサキ【おさき】〔人名〕玉葉と、玉葉が転生した人間を守護する妖狐。自分以外の影に隠れる遁影の術な

どが使える。

堕ち神【おちがみ】〔その他〕穢れた神。

お庭番【おにわばん】〔組織〕将軍直属の隠密。

陰陽寮【おんみょうりょう】〔組織〕中務省の役所。陰陽道についての業務を取り仕切った。

か行

餓鬼式【がきしき】〔技〕餓鬼を召喚する術。

隠世【かくりよ】〔地名〕黄泉、冥界のこと。

影縛り【かげしばり】〔技〕身動きを取れなくする陰陽術。

鹿島無神流【かしまむしんりゅう】〔組織〕室町時代中期に興った天真正伝香取神道流の流れを汲む剣術の一門。坂上家が受け継いできたが、元禄編の坂上柾崇は初鹿野道場で学んでいる。昭和編の久世鷹臣も修得。

方違え【かたたがえ】〔その他〕平安時代にあった陰陽道に基づく風習。目的地が不吉とされる方角にあった場合、違う方角へ出かけて一晩過ごし、翌日に目的地へ向かった。

郭公【かっこう】〔組織〕江戸幕府の隠密にして、土蜘蛛の血を引く一族。隠密および土蜘蛛の血筋であることは一族の男以外には秘密であり、これを漏らした者と、秘密を知った部外者は、家族でも殺すという掟がある。

葛城一族【かつらぎいちぞく】〔組織〕葛城山を本拠とし、特殊な霊力を持つ者を多く出す土蜘蛛の一族。役の行者や、かつて安倍家に嫁いだ樟葉などがこの一族の出身。兵衛佐局や、祇園女御、藤原璋子もそうであったとも。

葛城の鬼姫【かつらぎのおにひめ】〔人名〕一言主の血を引き、80の眷属を従えている土蜘蛛。人の魂を解放する能力を持つ。葛城の蜘蛛姫、魂振りの姫、魂振りの巫女とも。

加藤久脩【かとうひさなが】〔人名〕久世鷹臣の上官となる陸軍情報部所属の中佐。

香取神道流【かとりしんとうりゅう】〔組織〕天真正伝香取神道流のこと。久世鷹臣が習得している剣術流派。

兼定【かねさだ】〔道具〕坂上柾崇の師・初鹿野元勝の愛剣。

神【かみ】〔組織〕世界に生命や秩序をもたらそうとする欲から生まれた正の想念が顕現した存在であり、世界の観察者。顕現するには、混沌とした世界から未知の理を発見して定義〔世界と契約〕すると同時に、憑坐へ宿らねばならない。憑坐が生物か物質・土地かで、生物系と自然霊系の2種類に分けられる。自然霊系を殺すには、核となる真髄の破壊が必要。生まれてからも、定義すべき理を見つけられないと、存在理由を見失って意志が弱まり、衰弱して死んでしまう。なお、死んでも転生しない。昭和編においては理が定義され尽くしており、神々はどんどんと姿を消している。

神世七代【かみよななよ】〔その他〕伊邪那岐と伊邪那美のペアで終わる、7代12人の神。

賀茂神社【かもじんじゃ】〔地名〕賀茂川上流にある、賀茂別雷（かもわけいかづち）神社〔上賀茂神社〕と賀茂御祖（かもみおや）神社〔下鴨神社〕の総称。

賀茂の斎院【かものさいいん】〔地名〕平安京の鎮守である賀茂御祖神社と賀茂別雷神社に奉仕する、斎王の御所。

鴉天狗【からすてんぐ】〔人名〕カラスのようなクチバシと黒い羽を持つ天狗。平安京で美女をさらっているらしい。

カルマ〔その他〕前世での行為によって、現世で受ける報いのこと。業とも。

守護天使【がーでぃあんえんじぇる】〔その他〕吉川絵里が魔術で召喚したという存在。

祇園女御【ぎおんのにょうご】〔人名〕藤原璋子の養母。白河院を堕落させたとも言われる美女。葛城一族の出身だとも。

雉子名鳴女【きぎしななきめ】〔人名〕天照の使者。

鞫訊【きくじん】〔その他〕罪を取り調べること。

宜秋門【ぎしゅうもん】〔地名〕内裏外郭の西の門のこと。右衛門府の詰め所があり、すぐ北には内膳司がある。

杵築悠利【きづきゆうり】〔人名〕秋津学園の2年生で、不良のリーダー的存在。御門武を目の敵にする。

後朝の別れ【きぬぎぬのわかれ】〔その他〕枕をともにした男女の翌朝の別れ。

旧東漢氏【きゅうやまとのあやうじ】〔組織〕大和地方の一族で、坂上家の先祖。かつて征夷大将軍に任じられた、坂上田村麻呂もこの一族の出であるとも。人間を遥かに超える力を発動できるが、その反動で痛覚や理性を失い、元に戻らない場合がある。直系男子はと

くにその傾向が強い。

九尾の狐【きゅうびのきつね】〔人名〕玉藻前とオサキが合体した姿。9つに裂けた尾を持つ狐の妖怪。大陸では、妲己という美女に化けて紂王を誘惑し、殷を滅亡させたのを始め、いくつもの国に害をなしたことになっている。

玉葉【ぎょくよう】〔人名〕神代編での高原万葉の前世。武日照の母方の従妹で、天若日子と下光比売の娘。末子相続の須佐王朝の末姫であるため、玉葉の夫が須佐王朝の次代の王となる。

妓楼【ぎろう】〔その他〕遊郭のこと。

公達【きんだち】〔役職〕皇族や高位の貴族。またその子弟。

禁門【きんもん】〔地名〕帝の住居。またその入り口の門。

草薙の剣【くさなぎのつるぎ】〔道具〕天叢雲のこと。昭和編では、熱田神宮に納められていたという神剣。自身に与えられる害を数倍にして返す能力があり、軍事的に利用される。

奇し蛇【くしなだ】〔道具〕伊邪那岐が冥界に下ったときに携えていた神剣。冥界からの脱出時、鬼や黄泉醜女を斬って返り血を浴び、穢れに染まった。そのため、他者に害をなそうとする欲望が強く、後にこの剣を手にした須佐之男が乱暴者になった原因となる。須佐之男が八俣大蛇と戦った際、天叢雲を叩いて刃が欠け、捨てられたという。

楠御前社【くすのみまえしゃ】〔地名〕熱田神宮内にある神社。伊邪那岐と伊邪那美を祭っている。

樟葉【くずは】〔人名〕元禄編の茉璃の花魁としての名前。

久世鷹臣【くぜたかおみ】〔人名〕昭和編における御門武の前世。原子物理学の専門家である技術将校。

口寄せの巫女【くちよせのみこ】〔役職〕神を自分の体に宿らせて、神託を得る巫女。

国津神【くにつかみ】〔組織〕高天原から豊葦原中津国に下りた神。地上の食物を口にしているため、高天原には戻れない。高天原の意向を受け、豊葦原中津国を代理統治している。

熊野【くまの】〔地名〕現在の紀伊山地の和歌山県から三重県に渡る地域。熊野三山、高野山、吉野・大峯といった霊場がある。

庫裏【くり】〔地名〕寺院の台所。また、僧侶の住居のこと。

黒い獣【くろいけもの】〔その他〕芦屋幹久が操る犬神。

クロード・イーザリー〔人名〕米陸軍航空隊の少佐。原子爆弾を搭載したB-29、ストレートフラッシュの機長。コールサインはビクター85。

卦【け】〔その他〕占いのこと。

閨房術【けいぼうじゅつ】〔その他〕性交による魔術。

穢れ【けがれ】〔その他〕死や病気、出産、月経などに触れると身に溜まるとされ、理想の状態を阻害するとされた概念。

化主【けしゅ】〔その他〕仏教の宗派や、寺院の最高責任者などに対する尊称。

検非違使【けびいし】〔役職〕平安京の治安を維持する官職。

験者【げんざ】〔役職〕修験道の行者。

眷属【けんぞく】〔その他〕血族または、部下のこと。

元服【げんぷく】〔その他〕成人すること。また、その儀式。

公儀隠密【こうぎおんみつ】〔組織〕幕府が朝廷や大名を監察するためのスパイ。

皇統【こうとう】〔その他〕帝の血筋。また、帝位継承権。

五街道【ごかいどう】〔地名〕東京日本橋を起点とした東海道・日光街道・奥州街道・中山道・甲州街道のこと。

護持僧【ごじそう】〔役職〕帝を悪霊から守るために祈祷を行った僧のこと。

小十人番【こじゅうにんばん】〔役職〕将軍の馬の周りを護衛する歩兵。平時は小十人番所に詰めていた。小十人組とも。

蠱毒【こどく】〔その他〕昆虫や節足動物、爬虫類、両生類などを用いてかける呪術のこと。

事代主【ことしろぬし】〔人名〕大国主の息子で、玉葉の伯父。出雲一と言われる知恵を持つ国津神。

理【ことわり】〔その他〕世界に存在するさまざまな事象。神が則を発するために発見する必要がある。

近衛【このえ】〔人名〕平安編における帝だが、病にふせっており、実権は鳥羽院が握っている。鳥羽院と美福門院の子。史実では、その死後、政権を巡って保元の乱が起こる。

近衛府【このえふ】〔組織〕宮中の警護を行う組織。大内裏の東西に、それぞれ右と左の近衛府が配置されている。

呉服橋【ごふくばし】〔地名〕皇居の東2km辺りにある地域。

胡麻【ごま】〔その他〕神薬の材料となる一年草。三輪山

の中腹にある、二股の杉の大木の根元に生えている。

護摩壇【ごまだん】〔その他〕火を焚いて煩悩を焼く護摩をおこなうための炉を設置する壇。

さ行

斎王代【さいおうだい】〔役職〕賀茂祭りで演じられる役の1つ。最も美しい未婚の皇族女性（内親王）が選ばれる。全国女性の憧れ。神を称えるための霊鎮め秘法も伝えられる。

坂上柾崇【さかがみまさたか】〔人名〕元禄編における御門武の前世。郭公の一員であり、初鹿野道場で剣術を学ぶ。

佐々木留伊【ささきるい】〔人名〕江戸幕府4代将軍である徳川家綱の時代に名を馳せた女武芸者。

猿若町【さるわかまち】〔地名〕江戸城から北東に3㎞ほど離れた町。見世物小屋や芝居小屋が集められている。

三悪道【さんあくどう】〔その他〕仏教用語。地獄道・餓鬼道・畜生道のこと。悪行を重ねた人間が落ちるとされる。

三巳虫【さんみちゅう】〔その他〕人間の欲望を食べ、成長すると宿主を土蜘蛛に変える寄生虫。宿主が欲望を満たそうとすると力を与えるが、自制すると暴れて死に至らしめる。寄生されると思考が単純になり、暗示にかかりやすい。

弑逆【しいぎゃく】〔その他〕身分が上の相手を殺すこと。

式神【しきがみ】〔その他〕陰陽師が使役する鬼。式とも。

樒【しきみ】〔その他〕さわやかな香りの強いお香。抹香。

重仁【しげひと】〔人名〕平安編における御門武の前世で、崇徳院の息子。安倍泰親よりさまざまな術を教わっている。

下賀茂【しもかも】〔地名〕平安京の北東にあり鴨川の上流、現在の賀茂川と高野川が合流する辺り。賀茂神社がある。

下光比売【しもてるひめ】〔人名〕玉葉の母にして武日照の母方の叔母。大国主の娘で、天若日子の妻でもある。雷光を支配しており、天撃奔雷という術を使う。

十四年式拳銃【じゅうよねんしきけんじゅう】〔その他〕日本軍で制式採用された拳銃。

女子挺身隊【じょしていしんたい】〔組織〕太平洋戦争下に創設された、女性による勤労組織。

白河殿【しらかわどの】〔地名〕重仁と崇徳院が住む、左大臣の藤原頼長の屋敷。平安京の東にあり、かつては白河院の御所だった。

白河院【しらかわいん】〔人名〕鳥羽院の祖父。院政を始めた。賢帝との評判が高かったが、祇園女御をめとって以来、外道に落ちたという。養女で鳥羽院の妃となる藤原璋子との間に子を儲けたとも。

白拍子【しらびょうし】〔役職〕平安編の時代に流行りだした、男装の遊女が踊る巫女舞いの一種。また、その舞い手。

神祇院【じんぎいん】〔組織〕遙か昔から日本を霊的に守護してきたという機関。昭和初期に国家神道推進のために再設立され、内務省の外局となる。零号作戦、零号乙作戦で中心的役割を果たす。

神剣【しんけん】〔その他〕強力な力を持つ武器。自分の意志を持つ、神でも人でもない存在。持ち主となる者の強い意志か、霊脈がなければ存在できない。

真髄【しんずい】〔その他〕山や川などの自然霊が、神として存在を固定するために必要な核。

新造【しんぞう】〔その他〕遊女の見習い。

心繰術【しんそうじゅつ】〔その他〕他人の心を操る術。術者が対象から離れると効果が薄れる。自分の心を他人の体に移すことも可能。記憶の書き換えには手順と時間がかかる。

寝殿【しんでん】〔その他〕帝の住む宮殿。また、寝殿造りで中心となる建物のこと。主人の住居となる。

神武【じんむ】〔人名〕邇邇芸のひ孫。経津主（ふつぬし）の助けを得て東征をおこない、大和朝廷を開いた半神半人の帝。妃のヒメタタライスズヒメとの間に綏靖帝を儲ける。神日本磐余彦（かむやまといわれびこ）。

神薬【しんやく】〔その他〕三輪山の神域に生える、妙蓮の花と胡麻の葉を煎じたもの。

神力【しんりょく】〔その他〕神が持つ、世界を支配して、意のままにできる力。世界とどんな誓約を持っているかで決まる。則（のり）とも。

綏靖【すいぜい】〔人名〕神武帝の息子。父の後を継いで2代目の帝となる。

須佐一族【すさいちぞく】〔組織〕須佐之男の子孫のこと。

須佐王朝【すさおうちょう】〔組織〕神代編において豊葦原中津国を支配している王朝。須佐之男が開き、現

在の王は大国主。王権は末子相続となっている。

朱雀門【すざくもん】〔地名〕大内裏の南中央の門。平安編においては荒れ果て、怪異や盗賊が頻発している。

須佐之男【すさのお】〔人名〕須佐一族の開祖となった、天照の弟にして最初の人間。神剣・奇し蛇を振るって八俣大蛇を鳥上の谷に封じ、天叢雲を高天原へ持ち帰った。

須佐の地【すさのち】〔地名〕出雲のこと。須佐之男が八俣大蛇を戦った場所で、その後、須佐王朝を開いた。

須佐の姫【すさのひめ】〔役職〕須佐王朝の君主である大国主の孫・玉葉のこと。

図書寮【ずしょりょう】〔組織〕平安編において、中務省に属し、書物や文具などを管轄した役所。大内裏の中、宴の松原の北西にある。ふみのつかさ、としょりょうとも。

須勢理毘売【すせりひめ】〔人名〕大国主が妻にするべく、冥界より連れ帰った須佐之男の娘。

崇徳院【すとくいん】〔人名〕重仁の父で、鳥羽院の息子。鳥羽院につらく当たった、鳥羽院の祖父である白河院の血が濃いとして、鳥羽院に嫌われている。

諏訪大社【すわたいしゃ】〔地名〕建御名方を祭った神社。現在の長野県諏訪湖周辺に4つの境内がある。

生口【せいこう】〔役職〕奴隷のこと。

清涼殿【せいりょうでん】〔地名〕帝が住む内裏の殿舎。

瀬織津【せおりつ】〔組織〕特殊な霊力を持つ土蜘蛛の家系。葛城一族に属しており、武日照と土蜘蛛の血を引く。兵衛佐局の実家。

零号乙作戦【ぜろごうおつさくせん】〔その他〕神剣の呪いを利用し、アメリカに攻撃する作戦。久世鷹臣やミサキ、天野由香里などが参加する。

零号作戦【ぜろごうさくせん】〔その他〕アメリカ合衆国の大統領であるフランクリン・ルーズベルトを呪い殺した作戦。

宣耀殿【せんようでん】〔地名〕内裏の後宮の1つ。平安編においては誰も住んでいない。

蘇【そ】〔その他〕牛の乳を煮詰めた食べ物でとても栄養があり、税の代わりとして朝廷に献上されるほど貴重なもの。

雑色【ぞうしき】〔役職〕下級役人のこと。

僧正【そうじょう】〔役職〕僧侶を統率する官職。

た行

大宮司【だいぐうじ】〔役職〕神宮・神社の神職の長。

大極殿【だいごくでん】〔地名〕帝が毎日早朝に政務を執っていた大内裏の殿舎。

醍醐寺【だいごじ】〔地名〕稲荷山の南東にある寺。蓮念が崇徳院へ仕える前に勤めていた。

泰山府君祭【たいざんふくんさい】〔その他〕陰陽師の宗家である賀茂家に代々伝わる最強の妖魔調伏の祈祷祭のこと。

大身【たいしん】〔その他〕富豪のこと。

太祖【たいそ】〔人名〕すべての土蜘蛛の先祖である霊。

大内裏【だいだいり】〔地名〕帝が住む内裏を取り囲む官庁街のこと。平安編においては老朽化が進んでいる。

大魔縁【だいまえん】〔その他〕太祖の霊を宿すための憑坐。

大魔霊【だいまれい】〔その他〕強大な力を持つ魔物のこと。また太祖のこと。

大祐神祇官【だいゆうじんぎかん】〔役職〕昭和編における神祇院の要職の1つ。天野由香里の父が就いている。

平将門【たいらのまさかど】〔人名〕西暦９４０年ごろに関東地方で新皇を称し、反乱を起こした武士。東京都千代田区大手町一丁目にその首を祭った首塚がある。

内裏【だいり】〔地名〕帝とその妃たちが住む宮殿の総称。

高杉響子【たかすぎきょうこ】〔人名〕現代編において、資産家の娘で、女子の不良。杵築悠利と仲が良い。

高原万葉【たかはらまよう】〔人名〕現代編で秋津学園に転入し、御門武の級友となる少女。武に敵意を抱いている。

高比売【たかひめ】〔人名〕武日照の母で、天菩比の妻。玉葉の母である下光比売の姉。大国主の娘でもある。

高天原【たかまがはら】〔地名〕天津神の住む天のこと。高天ヶ原、天津原とも。

荼枳尼【だきに】〔役職〕椀頭(わんとう)と交信できる理趣品講の巫女。

武日照【たけひなてる】〔人名〕神代編における御門武の前世。玉葉の母方の従兄。父は天菩比、母は高比売。父方の祖父母は須佐之男と天照、母方の祖父は大国主。

建御雷【たけみかづち】〔人名〕高天原の全軍指揮官にして全権大使である天津神。建御雷の父である天之尾羽張は、武日照の祖父である十拳剱と兄弟。そのため、建御雷は武日照の遠縁の伯父に当たる。

建御名方【たけみなかた】〔人名〕須佐一族の皇子。大国主の息子で事代主の弟。玉葉の伯父でもある。

立川流【たちかわりゅう】〔組織〕蓮念が仁寛と名乗っていたころ、武蔵野国の立川（現在の東京都立川市）で編み出した真言密教。人間の頭骨に男女の和合水をかけて経文を唱え、これを1000日繰り返すと、頭骨の目が開き、望みはすべて叶うとしている。

妲己【だっき】〔人名〕殷の紂王をたぶらかし、国を傾けたとされる美女。玉葉が平安京へ行く前に大陸で名乗っていた。

達陀の炎【だったんのほのお】〔その他〕東大寺のお水取りという行事中におこなわれる達陀の行法で、たいまつに灯される火のこと。このたいまつを持った8人の僧が踊るように勤める。

魂振りの巫女【たまふりのみこ】〔その他〕人の魂の力を解放できる巫女。その強過ぎる力のために血液が崩壊しやすく、他人から血をもらわなければ生きられない。血が不足すると苦痛に襲われ、魂振りの巫女として覚醒以降、この度合いが増す。葛城一族の祖先である一言主の血を引いている。

霊鎮め秘法【たましずめひほう】〔その他〕神を清め称えることで、人々に安らぎや喜びを与える力。斎王代に密かに伝えられている。

玉藻前【たまもまえ】〔人名〕平安編における高原万葉の前世。妖孤のオサキと合体して九尾の狐になる。

丹田【たんでん】〔その他〕下腹部にある想念のたまる場所。

千紗【ちさ】〔人名〕昭和編における常磐沙夜の前世。久世鷹臣の実家から農地を借りている小作農の娘で、熱田神宮の近くのきしめん屋で下働きをしている。

治天の君【ちてんのきみ】〔役職〕政権を握る実質的な国王。

千早裾【ちはやすそ】〔その他〕巫女装束の裾のこと。

千曳岩【ちびきいわ】〔その他〕伊邪那岐が冥界から逃げる時に、追っ手を食い止めた岩。地下に走る霊脈を封じ、霊気を土地に吹き出させることができる。

紂王【ちゅうおう】〔人名〕殷の君主。悪政を敷き、武王に討たれる。

町【ちょう】〔その他〕距離の単位。一町は、約109メートル。

朝議【ちょうぎ】〔その他〕朝廷でおこなわれる評議のこと。

憑き神【つきがみ】〔その他〕人に憑依する霊魂。

土蜘蛛【つちぐも】〔組織〕天津神に従わない半人半魔の一族。「冥府に吹く風」といわれる特有の気配を備える。その大半は、神が地上に国を作る前から住んでいた古い人間。独特の死生観を持ち、年に一度冥界からやって来る祖先の霊と交信して、その年の吉凶を占う風習を持つ。この時、祖先の霊に付いて来た良くない霊とも交信するようになり、ついにはそれらと交じって子を成す者まで現れるようになった。

ディーバ〔組織〕吉川絵理が設立する自己啓発サークル。

天撃奔雷【てんげきほうらい】〔技〕雷光を支配する下光比売の技。その娘である玉葉も使う。すべての魔を滅する。

天真正伝香取神道流【てんしんしょうでんかとりしんとうりゅう】〔その他〕剣術流派の1つ。鹿島無神流の元となった。

天孫【てんそん】〔組織〕天津神の子孫。平安編においては、負の想念を浄化するという天津神の力を失っている。

天孫降臨【てんそんこうりん】〔その他〕豊葦原中津国を平定するため、邇邇芸が日向に下りたこと。

天理契【てんりけい】〔その他〕天津神の中でも天照の血族のみが持つ特殊な力。ほとんどの神は誕生と同時に姿形と世界との契約が決まるが、天理契を持つ者は、自分の意志で天地との契約の形を決められる。

登極【とうきょく】〔その他〕帝の位に就くこと。

東宮がね【とうぐうがね】〔その他〕皇太子候補。

東宮宣旨【とうぐうせんじ】〔その他〕皇太子に任命するというお触れ。

導師【どうし】〔その他〕儀式を取り仕切る首位の僧侶。

常磐沙夜【ときわさや】〔人名〕御門武の担任。秋津学園のマドンナ的存在。

髑髏本尊【どくろほんぞん】〔その他〕立川流の儀式に用いられる頭骨のこと。

独鈷杵【とっこしょ】〔道具〕密教で用いる法具である金剛杵の1つ。先端が尖っている。

舎人【とねり】〔役職〕家来のこと。

鳥羽殿【とばどの】〔地名〕暲子や寿子、美福門院の住む屋敷。平安京の南にある。

豊葦原中津国【とよあしはらなかつくに】〔地名〕神

代編における日本。また、地上のこと。神代編より前に須佐之男が出雲に須佐王朝を開いている。

鳥上【とりがみ】〔地名〕須佐之男が八俣大蛇を封じた地。現在の鳥取県と島根県の県境付近。

鳥辺野【とりべの】〔地名〕清水寺の近くにある墓場。死体が打ち捨てられており、妖魔が頻出する。

遁影の術【とんえいのじゅつ】〔技〕妖狐の一族が操る術。影に潜むことができる。

遁甲術【とんこうじゅつ】〔技〕姿を隠す術。

な行

内藤景久【ないとうかげひさ】〔人名〕元禄編における杵築悠利の前世。郭公の一員で、坂上柾崇と同じ道場で鹿島無神流を学ぶ。初鹿野由宇に好意を抱いている。

内務省【ないむしょう】〔組織〕昭和編において警察・地方行政・土木などを管轄している官庁。神祇院を擁し、零号作戦と零号乙作戦を実行する。

中根正盛【なかねまさもり】〔人名〕元禄編において、公儀隠密を統括する大目付。

薙【なぎ】〔人名〕武日照が玉葉との間の子に付けた名前。時に静かな入り江のように佇んで癒し、時に山を切り崩すような強い力となって障害を振り払い、例え倒れても、何度も打ち寄せる波のように諦めずに立ち上がるような、永遠の存在であってほしいとの願いが込められている。

名無しの巫女【ななしのみこ】〔役職〕高原一族の繁栄のための人柱。畏敬の念を込めて、御崎さまと呼ばれる。

那辺【なへん】〔その他〕どのあたり。どこ。

なれ鮨【なれずし】〔その他〕川魚に飯を合わせて数か月以上保存し、発酵させた食品。酸味と独特の匂いがある。

和毛【にこげ】〔その他〕柔らかい毛のこと。

二号作戦【にごうさくせん】〔その他〕昭和編において、原子爆弾を研究・製造する作戦。そのために設立された研究所の責任者である仁科の二を取って付けられた。空襲により施設が破壊されたため、中止される。

邇邇芸【ににぎ】〔人名〕豊葦原中津国の統治者として天照が送った神。日向に下りたとされる（天孫降臨）。天照の孫で、神武帝の曽祖父。

俄の市【にわかのいち】〔その他〕元禄編において、吉原の外れ、羅生門河岸にある九郎助稲荷社の仮装祭り。

仁寛【にんかん】〔人名〕立川流の開祖。平安編において、蓮念が以前名乗っていた名前。白河院によって追放された。

仁和寺【にんなじ】〔地名〕重仁の母・兵衛佐局が暮らす寺。建立した宇多帝が出家以後住んだため、御室御所とも呼ばれる。

縫司【ぬいのつかさ】〔役職〕裁縫を担当する女官のこと。

鵺【ぬえ】〔その他〕頭は猿、体は虎、尻尾は蛇という魔物。虎以上にすばやく、空も飛ぶ。

ネオバロック様式【ねおばろっくようしき】〔その他〕建築様式の1つ。付け柱を始めとする華美な装飾といった特徴がある。

根堅州国【ねのかたすくに】〔地名〕出雲のこと。根の国。

涅槃【ねはん】〔その他〕悟りを得た安らぎの境地。

則【のり】〔その他〕法則のこと。神が理を発見して、世界と契約を交わすことで成立する。相反する則が発せられた場合、力の強い神の発した則が優先される。すべての則を失った神は存在できなくなる。神力とも。

は行

拝殿【はいでん】〔その他〕神社で、本殿の前に設けられた礼拝をおこなうための建物。

初鹿野元勝【はじかのもとかつ】〔人名〕坂上柾崇の上役である郭公。鹿島無神流を教える道場を開いている。

初鹿野由宇【はじかのゆう】〔人名〕元禄編における斎栞の前世。初鹿野元勝のひとり娘。父の道場で師範代を務めるほどの剣の腕を持つ。

荷葉飯【はちすいい】〔その他〕蓮の葉で包んだ蓮の実入りの飯。少し高級だが、旅の道中でも食べられる。

八省院【はっしょういん】〔地名〕官吏が毎日早朝に勤務していた庁舎。大内裏の中、大極殿の南にある。朝堂院とも。

玻璃【はり】〔その他〕ガラスのこと。

番所【ばんしょ】〔地名〕元禄編において、非公認の役人である岡っ引きが常駐したり、巡回している詰所。

東の市【ひがしのいち】〔地名〕平安京にあった公設市場。

ヒメタタライスズヒメ〔人名〕大物主の娘。神武帝の妃となり、綏靖帝を産んだ。

寿子【ひさこ】〔人名〕平安編における斎栞の前世。鳥

羽院の娘で、美福門院の三女。

美福門院【びふくもんいん】〔人名〕重仁の養母。暲子や寿子、近衛帝の母にして鳥羽院の妃でもある。

弦【ひも】〔その他〕主人公が見られる世界の真の姿。あらゆる事象が、さまざまな色や形、長さ、震えかたをした弦の作る模様に見える。

白虎【びゃっこ】〔その他〕元禄編で、摩多羅が変身した白い虎。水戸家の菊姫をさらう。

日向【ひゅうが】〔地名〕現在の宮崎県。天照の孫である邇邇芸が、豊葦原中津国を治めるために下りた（天孫降臨）地。

兵衛佐局【ひょうえのすけのつぼね】〔人名〕仁和寺に暮らす重仁の母であり、崇徳院の妃。正気を失っている。

武王【ぶおう】〔人名〕殷を滅ぼし、周王となった人物。

巫蠱【ふこ】〔その他〕巫女や呪術を使う者。また、それらが使う術のたぐい。

藤壷【ふじつぼ】〔地名〕内裏にある後宮の1つである飛香舎の異名。庭の藤が植えてあったことから付けられた。

藤原璋子【ふじわらのたまこ】〔人名〕祇園女御の養女。崇徳院と雅仁の母で、重仁の祖母。仁寛の手引きで白河院の妃となる。土蜘蛛の血が濃い。

藤原呈子【ふじわらのしめこ】〔人名〕藤原忠通の養女。近衛帝の妃となる。土蜘蛛の1人。

藤原忠通【ふじわらのただみち】〔人名〕平安編における太政大臣。藤原頼長の兄で、藤原呈子の義父。土蜘蛛の1人。

藤原多子【ふじわらのまさるこ】〔人名〕藤原頼長の養女。近衛帝の妃となる。土蜘蛛の1人。

藤原頼長【ふじわらのよりなが】〔人名〕平安編における左大臣。藤原忠通の弟で、藤原多子の義父。

経津主【ふつぬし】〔人名〕武日照の異名。神武帝の東征を手伝う。瀬織津の祖先となる。経津の御霊とも。

フランクリン・ルーズベルト〔人名〕アメリカ合衆国の大統領。零号作戦によって呪われ、脳卒中で死亡している。

保元の乱【ほうげんのらん】〔その他〕史実において、近衛帝の崩御後に、後白河帝となった雅仁と、崇徳院の間で起こった戦い。雅仁には信西・守仁・藤原忠通・平清盛が味方し、崇徳院には藤原頼長が付いた。雅仁が勝利し、崇徳院は讃岐（香川県）へ流される。また、一族が分かれて争った藤原家の勢いは衰え、帝が支配力を増す。その後、平治の乱を経て、武士が台頭する。

法の死【ほうのし】〔その他〕世界からすべての理が発見され、新たな神が生まれなくなった状態。神々は少しずつ死んでいき、紙が火に当たっても燃えなくなったり、水が流れなくなるなど、世界が変化しなくなる。

亡八衆【ほうはちしゅう】〔組織〕遊女屋で働く男のこと。仁義礼智忠信孝悌の八徳を忘れた者という意味がある。

北面の武士【ほくめんのぶし】〔組織〕白河法皇が、神輿や神木を盾に強訴する僧侶の制止のために組織した武士たち。院の御所の北側に詰めていたのが名前の由来。

ま行

禍津神【まがつかみ】〔その他〕邪悪な神。

禍津武闇照【まがつたけやみてる】〔人名〕伊邪那美が武日照に付けようとした名前。

真桑瓜【まくわうり】〔その他〕あまうりのこと。長野県真桑村で多く生産されていたのが名前の由来。

雅仁【まさひと】〔人名〕平安編における杵築悠利の前世。重仁の叔父で、鳥羽院と藤原璋子の息子。守仁の父でもある。歌舞音曲を好む。史実では後に後白河帝となる。

魔素【まそ】〔その他〕悪い想いのこと。

摩多羅【またら】〔人名〕理趣品講の教祖。白虎に変身できる。蓮念の転生した姿で、前世の記憶を部分的に持つ。

茉璃・魔璃【まり】〔人名〕元禄編における高原万葉の前世。家族には魔璃と呼ばれていた。

魔霊【まれい】〔その他〕得体の知れない冥界の霊。魔霊が憑依した人間を土蜘蛛、動物や自然を魔物と呼ぶ。

御稜威【みいつ】〔その他〕威光や威勢のこと。

御祖神【みおやのかみ】〔その他〕祖先である神のこと。

御門武【みかどたける】〔人名〕現代編の主人公で、秋津学園の2年A組に所属。前世の記憶を失っている。

三日夜の儀式【みかよのぎしき】〔その他〕平安編における結婚の儀式。男が女の家を3日連続で通い、3日目の夜に餅（三日夜餅）を食べると、夫婦になったとされる。

ミサキ〔人名〕昭和編における高原万葉の前世。四国の犬神憑きの家系の生まれ。正気を失っている。

御崎【みさき】〔役職〕四国地方で昔から生け贄や人柱になった人々の呼び名。

見立て【みたて】〔その他〕予想。また、人形などと呪う相手に見立ててかける呪い。

幣【みてぐら】〔その他〕神への供え物。

南神池【みなみしんいけ】〔その他〕楠御前社にある池。

巳の杉【みのすぎ】〔その他〕三輪山の中腹にある拝殿近くに生えている杉の大木。三輪山の神の化身である蛇が住み着いているといわれており、根元に胡麻が生えている。

妙蓮の花【みょうれんのはな】〔その他〕三輪山の巳の杉から西に進むとある竜神池に浮かぶ蓮の花。神薬の材料となる。

三輪明神【みわみょうじん】〔人名〕蓮念が崇拝する三輪山を神体とする大物主のこと。

三輪山【みわやま】〔地名〕現在の奈良県桜井市にある山。三輪明神が祭られている。

民部省【みんぶしょう】〔組織〕平安編において、諸国の戸籍や税務などの事務作業をおこなう役所。

務古【むこ】〔地名〕現在の神戸港の西側の一部。大輪田泊のさらに古い名前。

無上瑜伽の教え【むじょうゆがのおしえ】〔その他〕密教の1つ。人間の繁栄に必要な性交を清浄なものと捉え、悟りを得るのに必要という解釈を持つ。

裳着【もぎ】〔その他〕公家の女子が成人として認められるための儀式。男子の元服に当たる。十二単を構成する着物の1つである裳を下半身に付ける。着裳(ちゃくも)とも。

守仁【もりひと】〔人名〕雅仁の息子。重仁を慕う。

や・ら・わ行

八十凶津神【やそまがつかみ】〔その他〕多くの凶津神のこと。

八俣大蛇【やまたのおろち】〔人名〕神代編の以前、豊葦原中津国を荒らした8本首の大蛇。須佐之男に封印される。その尾から、天叢雲が発見された。

大和盆地【やまとぼんち】〔地名〕現在の奈良盆地のこと。

闇の皇子【やみのみこ】〔役職〕太祖の憑坐となる土蜘蛛。太祖を宿していなくても強大な力を持つ。

由井正雪【ゆいしょうせつ】〔人名〕まだ幼かった徳川家綱の江戸幕府4代将軍就任を機に、幕府転覆を図った軍学者。

瑜伽神社【ゆがじんじゃ】〔地名〕元禄編において奉納試合の会場となる。祭神は稲荷神。

靫負庁【ゆげいのちょう】〔組織〕検非違使庁のこと。

妖狐【ようこ】〔その他〕狐と魔霊の混血。

吉川絵理【よしかわえり】〔人名〕御門武の同級生で斎栞の級友。オカ研に所属しており、有坂汰一に好意を抱く。

吉原【よしわら】〔地名〕元禄編においては、江戸の娼館街。

黄泉返りの秘法【よみがえりのひほう】〔技〕伊邪那美流反魂術のこと。

黄泉比良坂【よもつひらさか】〔地名〕伊邪那岐が冥界に入る時に使った坂。霊脈が多く、冥界との壁も薄い。伊賦夜坂。

憑坐【よりまし】〔その他〕神を憑かせるための核。ご神体。

羅城門【らじょうもん】〔地名〕平安編では、盗賊が根城にしていたり、死体が捨てられていたりと、荒れ放題な2階建ての大きな門。

六道宮【りくどうきゅう】〔地名〕土蜘蛛が愛宕山に集まる怨霊の力を利用するために築いた、一族の総本山。何十もの結界が張られ、人目から隠されている。

理趣品講【りしゅぼんこう】〔組織〕元禄編において、遊女や町人の間で流行している宗教。性交によって幸せを得られるとしている。教祖は摩多羅。荼枳尼(だきに)という巫女を介して、椀頭と呼んで崇めている頭骨と交信している。

柳絮【りゅうじょ】〔その他〕白い綿毛のついた、柳の種。

類感呪法【るいかんじゅほう】〔技〕呪いをかけたい対象に似たものを呪うと、対象にも呪いがかかるという呪術。

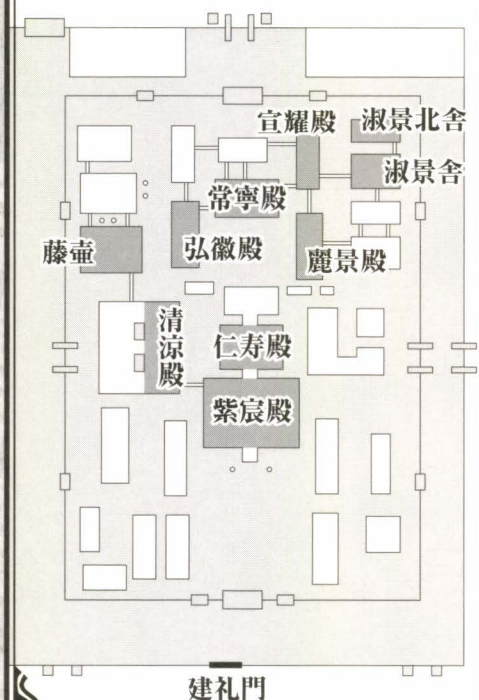
蓮念【れんねん】〔人名〕平安編における、崇徳院の護持僧。土蜘蛛の狗奴一族の出身で、大物主を崇める大田田根子の子孫。鵺(ぬえ)に変身することができる。寿子の牛車にかけた呪いを重仁に返され、腕に傷を負う。

和合水【わごうすい】〔その他〕精液と愛液の混合物。立川流や理趣品講の儀式に用いられる。

椀頭【わんとう】〔その他〕理趣品講の本尊とされる頭骨。

闇贄【やみにえ】〔その他〕土蜘蛛が邪神の生贄を捧げる方法の1つ。生贄を、邪神が直に絡め取る。

平安京周辺図

愛岩山
賀茂の斎院
賀茂神社
一条大路
化野
大内裏
仁和寺
（御室御所）
朱雀門
白河殿
嵯峨野
右京
左京
嵐山
清水寺
朱雀大路
東の市
鴨川
九条大路
西京極大路
羅城門
東京極大路
稲荷山
鳥羽殿
醍醐寺

五章 制作者の声（インタビュー）

『久遠の絆 -THE ORIGIN-』誕生に寄与した面々へのインタビューを公開！作品の裏設定や制作秘話が明らかに!!

この章では、シナリオライター、作曲家への質問のほか、プロデューサーや原画家との座談会の様子を、9ページに渡って掲載。作品の見どころを始め、制作に当たってこだわったポイント、開発中の裏話などについて聞いた。

シナリオ編

シナリオ担当

加藤直樹（かとうなおき）

旧作を含め、『久遠の絆』の脚本を執筆。PS2ゲーム『風雨来記2』、PSゲーム『みちのく秘湯恋物語』『風雨来記』のシナリオの執筆や監修など、フォグ作品を多数手がける。

脚本執筆には当初の予定の2倍の時間がかかった

――今作のストーリーのアイデアは旧作のときからあったとのことですが、執筆に費やしたり、準備・取材にかけた時間はどれくらいですか？

加藤直樹（以下、加藤）：当初の予定ではプロット2か月の執筆4か月でしたが、全然甘すぎる見通しでした。結局、プロット7か月、執筆5か月もかかってしまいました（泣）。

――各登場人物の表現したかったテーマや魅力、旧作から引き継ぎたかった部分などを教えてください。

加藤：武の基礎は揺るぎなく「人としての自立」なので、今回はその「人」とはなんぞや、に焦点を当てて描いてみました。結局、神とは「生まれてしまった宇宙」に後付けで意味や理由をくっ付けただけもので、できあがった時から完成しています。それに比べて人は未完成で、それゆえに過ちを犯しますが、間違えるからこそ、その先がある。成長することができる。それは「神」には望めないものだ。というテーマが今回の一番描きたかったものです。

――ヒロインはどうでしょう。

加藤：万葉は、天女から本当の神さまに変わりました。それはより「世界」というものをマクロな位置から捉えたかったからであり、同時に旧作の「螢」が持っていた強い愛情をよりダイレクトに「神の誓約」という言葉で引き継ぎたかったからです。

栞は一番変わってしまったキャラかもしれません。平安編では物語の流れの都合上、彼女の一番の泣かせのシーンがオミットされてしまいましたが、その分、現代編では彼女の強さが強調されています。

沙夜先生はブレません（笑）。あいかわらず危ない先生をしてくれていますが、今回はタガが外れてよりパワーアップしていると思います。

天野先輩は、過去時代がついに登場です（笑）。旧作では神剣としてただ一度きりの「人としての人生」を歩んだ彼女ですが、今作ではすでに幾度かの転生をしていることになっています。ただ、すべて人として生まれたのかどうかはわかりませんが。

――主なサブキャラクターについては？

加藤：幹久は、道綱改め崇徳上皇ですね。道綱は悪のための悪というキャラでしたが、今作の崇徳上皇は本当にかわいそうな人です。自分は何にも悪くないのに、祖父のしたことで逆恨みされ、ついには日本を呪う悪魔にまでなってしまう歴史上の人物です。このキャラの設定だけは旧作でも製品に影響を残しています。敵の本拠地が愛宕山だったり、京を騒がす土蜘蛛のエピソードが天狗だったりするのは、企画段階での敵が崇徳さまだった時の名残です。

悠利は永遠不滅の妹ラブキャラです（笑）。作中では語られませんが、寿子は悠利の前世である雅仁の息子・守仁の妻になっています。多分、雅仁の性癖に気づいた美福門院が強引に守仁と結婚させたんでしょうが、息子に惚れた女を取られる気持ちってどんなんでしょうか。ちなみにこの雅仁さん、史実でも鳥羽院に「あいつはダメだ」と言われるくらいの放蕩者だったみたいですが、ゲームの舞台となった保元の乱の後は天皇に即位し、有名な後白河法皇として政治で辣腕を振るいます。やはり挫折が人を成長させたんでしょうか（笑）？

汰一は今回、一番身の置き所に困ったキャラでした。旧作を踏襲する上で、皇族である主人公の「兄」でなければならず、なおかつ陰陽師でなければならない……。こいつのせいで気が狂うかと思いました。が、終わってみればやはり「汰一」だなと（笑）。自分でも良い感じに、親友であり兄である彼を今回も書けたのではないかと思います。

妖狐・オサキは新キャラですね。このキャラを設定したのは、世間が九尾の狐ブームだったから……ではなくて、螢がかぐや姫ではなくて九尾の狐の化身である玉藻前となったからなんですけどね。しかし、玉藻前＝玉藻は実際は妖怪ではなくて神なのだから、その間を埋める存在として生まれてきました。旧作を玉藻前設定で考えていた時は神とか土蜘蛛なんて設定もまだできていなかったんですよねぇ。彼女（オサキはおにゃのこです（笑））は人使いの荒い主人の下、大陸で色々暴れていたのですが、そのほとんどは、玉藻の思いつきからだったと思います。おてんばな女神を主人に持って、本当に苦労したことでしょう。

その他のキャラは……守仁の転生はえ……（もにょもにょ）だったりします（笑）。

リライトの意図の第一は ボツになった設定の復活

――シナリオ執筆全般にあたって苦労や工夫した部分があれば教えてください。

加藤：リライトの意図の第一に、旧作の企画段階でボツになった平安編の玉藻前の設定復活がありました。私は自分がおもしろい、読みたいと感じるものでなければ書けない性分のため、それははずせないと言ったところ、プロデューサー側に快諾していただけました。しかし、その困難さを軽く見積もり過ぎていたのです。そして、いざ蓋を開けてみると、あまりにも多くて重い問題に頭を悩ませました。

――中でも大変だったことは何ですか？

加藤：設定復活によって平安編の舞台が「都の周辺」から「宮中」に変更になったのが大問題でした。今作は保元の乱を題材にしているので、そこに繋がる天皇と貴族たちの出来事を抜きにしては語れません。しかし、日本の書籍管理は優秀で、少し探せば皇室の各人物の詳しいプロフィールが見つかってしまうのです。それを踏まえた上で、フィクションである「九尾の狐」の物語と史実の「保元の乱」をミックスさせ、さらに旧作で登場した人物たちのポジションを破綻しないように割り振っていくのは、本当に大変でした。

――新たな時代背景として、神代・平安・昭和の各時代が選ばれた理由を教えてください。

加藤：今作のシナリオを書くに当たって自分の中で模索していたテーマは、「人は何のために生きるか」です。言い換えれば、「人は死んだらどうなるの？」ということで、その答えが冥界と現世の関係、および、世界と神と人との関係です。

これは少し分かりづらいかも知れませんが、人は現世で形を残し、死後の世界へは「思い」しか持っていけない。そして、冥界においても失わなかった思いを、可能性という力に変えて現世で再び形に成すということです。ですので、それを構成する必要上、必然的に神代編が決まりました。

平安編はそもそもリメイクの根幹となる部分なのではずせません。そして昭和編ですが、昭和は人の生死と正義が大きく揺れ動いていた時代ですよね。昭和編の主人公たちは、日本軍の一員としてアメリカ大統領を暗殺し、その過程でアメリカ国民が原爆で死ぬことを受容しています。立場が変われば正義も変わる。けれど、ただひとつ、「みんな生きたい」という気持ちだけは同じ。それを神剣である雛の存在理由とリンクさせるため、時代背景として選びました。また、パンプキン爆弾などの史実は知らない人もいるので、面白いのではないかと（笑）。

――旧作の登場人物（安倍晴明など）は、今作のメインストーリーとは全く無関係なのですか？

加藤：はい。

――ヒロインとのEDはいくつあるのでしょう。

加藤：栞と沙夜は各1。万葉は1回目1つ、2回目2つです。ただし、万葉の1回目は、万葉ルートを最初にプレイした時だけしか見られません。

――今作では、各ルートのメインヒロインを寝取られることが少ないようですが、とくに意図されてのことですか？

加藤：久遠の男たちって基本的に純愛バカなんですよ（笑）。えぐいことやってるのは蓮念の系譜ぐらいですが、その蓮念も肉欲より大義の目的が優先する思考の持ち主なので、必要のない女犯はしません。

――ここからは、物語について踏み込んだ質問をしたいと思います。さっそくですが、元禄編の茉璃いわく「神が死ぬという事はひとつの法則が消えて無くなったと言うことなのよ」とのことですが、平安編までには、ほとんどの神が死んでいるようです。神代と比べて、何か世界に変化はあるのでしょうか。

今回はその「人」とはなんぞや、に焦点を当てて描いてみました。

久遠の男たちって基本的に純愛バカなんですよ（笑）。

加藤：すべての神が死んだわけではなく、死んだ＝殺されたのは一部です。天軍によって出雲を追われた国津神たちは地方に逃れ、「国（人）を治める」という意義を失ったことによって、人型を保つ意味もなくなり、より概念的な見えない存在へと変化していったのです。また、神が殺されるとその法則は殺した者が支配します。つまり法則のヒエラルキーが一段変わることになり、それによって従来の力を振るえなくなった神はそれまでの姿でもいられない＝死んだという表現がされます。

武日照は実は神ではなく「神の力を持った人間」

――武日照が世界と交わした契約は「世界の真の姿を観測する」とのことですが、この契約によって、世界にどんな法則が生まれたのですか？

加藤：武日照は実は神ではなく「神の力を持った人間」です。そして、最後に主人公が獲得する力こそが、これから人間が手にするべき力で、全ての世界を見通し、無の世界から強引に全ての解決策を引っ張り出してくる力です。武日照のこの力は未完成でした。この力を完成させるために、武日照と土蜘蛛の血の融合も必要なことだったのです。

――武日照が最初の人間だったのですか？

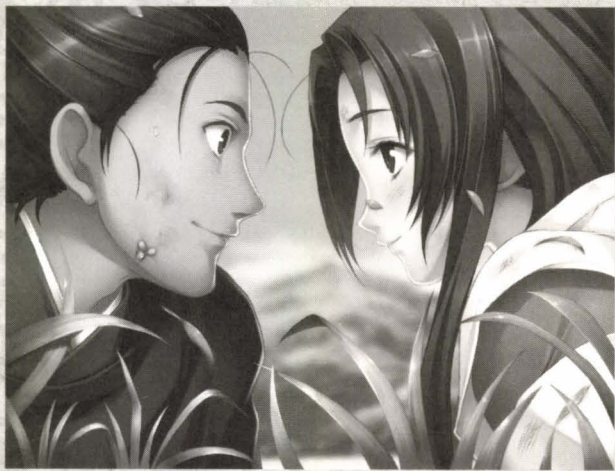
加藤：原初の人間は高天原の君主である天照の弟・須佐之男です。彼は人間であるがゆえに愚かで周囲を困らせますが、後に成長して八俣大蛇を倒し、須佐王朝を開いて地上を安定させます。

その須佐之男と天照の間に生まれたのがオシホミミと天菩比。彼らは天照の子であるというよりも須佐之男の子であり、神無き後の世界を切り開いていく人間の始祖となるべく、天より地上に遣わされました。しかし、天菩比が国津神に殺されるに及んで、天照は貴重な人間の始祖を保護するため、3人目の使者には人間ではなく純粋な天津神である天若日子（玉葉の父）を選びます。そして天若日子は、自分がオシホミミないしは邇邇芸が降臨するまでの繋ぎだったと知り、天に反逆することになるのです。

――そういえば、平安編で玉葉から「異国の神が支配する王」との言葉が聞かれますが、異国の神が世界に与える影響とはどんなものでしょうか。

加藤：法則はどんな場所でもひとつであるように、異国であろうと法則、つまり神の本質は変わりません。シヴァや大日如来や大国主が色々な別名を持っているように、それらの本質は共通で、その時に表面に現れる個性の違いが名前の違いとなります。太陽が極地方と赤道で全く影響が違っても、太陽に変わりないのと同じです。

――同じく平安編で、オサキの「分かっておられますか、先ほど起きた事の意味が…」「私は姫さまの護衛役として側に侍ることを許された時より、神の誓約によって姫さまご自身の神格に関わることについては一切の発言を禁じられました」との独白がありますが、これらは何を示唆しているのでしょうか。

加藤：神格についての発言ですが、オサキは武日照によって玉葉と合体できるようになったのですが、オサキ側の情報が一方的に玉葉に流れてしまうと、神としての玉葉の純粋性を歪めてしまうことになると危惧した武日照によって、オサキからの一方的な情報提供はできないようになっているのです。つまり、オサキは玉葉から尋ねられたことならば答えることは出来るが、玉葉が全然知らないことを尋ねられもしないのに「実は～って○○なんです」と話すことはできないと

いうことです。

――転生しない神である玉葉が後に転生することから、人間になる原因が発生したことにオサキが言及したのかとも思ったのですが、玉葉は〈御祖神さまの秘術〉で自ら甦ることもできるようですし……。

加藤：玉葉の転生は〈御祖神さまの秘術〉によるものではありません。天叢雲で殺されたせいです。

――ところで、現代編の万葉が、昭和編のミサキと違って正気を保てたのは、幸運だったからですか？

加藤：全てに決着をつける「時期」が来たからです。

――ついでと言ってはなんですが、オサキは玉葉の転生先が高原家だとどうやって知ったのでしょう。

加藤：玉葉が生まれれば勝手に惹かれて分かってしまうのです（笑）。

ヒロインとの関係は激しく振り切れない思いがテーマ

――旧作では、転生を繰り返しても1人の相手を思い続けるという永遠の愛といったテーマもあったように思われました。今作の平安編の玉葉は、重仁と武日照が別人と認識しながらも重仁を愛するようですが、テーマに変更があったのでしょうか。

加藤：旧作は下敷きが「かぐや姫」なので思い続けて振られる純愛の姿でした。今回は「九尾の狐」が下敷きなので、ヒロインとの関係ももっと激しく、殺したいけど殺せないあいつ、的な振り切れない思いをテーマにして描いてみました。

――旧作では万葉たちが転生し続けることになった原因は神意だったようですが、今作では、人間ならば生きたいと冥界で願えば、神に消滅させられない限り、好きな時代に転生できるのですか？

加藤：いいえ、違います。旧作でも神意だと思っていたのものが実は個々人の思いゆえだったと栞が言っています。今回も各人が転生するのは各自の使命感なり愛情なり憎しみなりの「意志」です。

――神は転生しないとのことですが、神であるはずの神剣（薙）が転生するのはなぜでしょう。

加藤：まず、神剣は旧作から概念が変わっています。旧作では神剣は初めから神剣として生まれた存在であり、その意識が薙という女性でした。これに対して「存在したいという意志だけがある存在」というのが今作における神剣の概念です。そして、神でも人間でもない、神剣という存在カテゴリーです。少し難しいかもしれませんが、命のないものに意志があればどうなるのかを突き詰めたものが神剣です。

――神剣と意志の関係を詳しく教えてもらえますか。

加藤：意志とはすなわち存在を意味します。でも意志は命とは同義語じゃないですよね。命のない死の世界、つまり冥界は「究極の可能性」の世界なのですが、可能性がありすぎて、すべてのものは形を定められません。形はそれだけで可能性を奪うことに繋がるから、冥界では何も形が保てないのです。

一方で、意志の中で最も根元的で強い思いは「在り続けたい」という意志です。なのに冥界では自分の形すら取ることができない。それに抵抗する在り続けようとする意志が、界の隔てを突き破って現世に現れた姿が神剣と呼ばれるものです。剣とは「その存在する位置を他者に譲らないもの」という世界との契約により生まれたものなのです。

――その神剣がなぜ玉葉に宿ったのですか？

加藤：薙が転生するのはなぜかという質問の回答にもなるのですが、天叢雲が人間として転生できるのは、主人公と玉葉（主に主人公）が、自分たちの子として生まれる（強い神霊が宿る）ことを望んだからです。神剣は、己が存在するために、その存在に意味を与え、自分の存在を固定してくれる強い意志を持つ主人を求めます。そして、その主人に最大限の力を貸すのです。

この主人となったのが、主人公であり、神であり、八俣大蛇です。天叢雲は一度、須佐之男に拾われ、天界に奉納されます。しかし、主人が現れなかったので、それを求めて高天原を脱出、生まれ故郷の出雲で主人公と出会います。そして神剣は、世界のすべての法則を超越して「己が存在するため」にあらゆる力を主人のために使います。生と死、二つの世界の則を切り裂き貫く意志と力を表しているのが剣の姿なのです。

――ご回答ありがとうございました。最後に、ユーザーのみなさんに向けてメッセージをお願いします。

加藤：遅れてしまって申し訳ありません。ですがその分、今までにない伝奇物ストーリーが書けたと自負しております。十数年ぶりに帰ってきた『久遠の絆』をどうかお楽しみください。

今までにない伝奇物ストーリーが書けたと自負しております。

楽曲編

楽曲担当
蔦石奈耶（つたいしなや）

新曲の制作のほか、既存曲のリマスターを担当。昔から『久遠の絆』が好きで、それが縁でフォグのプロデューサー・宗清氏と知り合い、リメイクに参加することに。

好きな作品を制作できて嬉しさと不安がないまぜに

―作曲を依頼された時はどう思われましたか。

蔦石奈耶氏（以下、蔦石氏）：音楽に定評がある作品ですので、打診を受けた時は、好きな作品へ参加できる光栄な思いが半分、当時の音楽担当だった、故・風水さんの代役を果たせるのか不安も半分、といった気持ちでした。

―作曲に当たり、心がけたことはありますか？

蔦石氏：先にも述べたように、今回の自分の役回りはあくまで「代役」ですので、何よりも「原作楽曲と違和感なく混在できること」を心掛けました。

―具体的には？

蔦石氏：音の傾向を合わせることです。たとえば、既存曲には生録音した音が使われていません。ですから、新曲に生録音した音を入れると、強烈な違和感が発生するのは必至です。それを避けるため、風水さんが使っていた機材とほぼ同じ時代の音源（SC-88）を物置から引っ張り出してきました。

―制作期間はどれくらいですか？

蔦石氏：およそ3か月弱です。この曲数では通常こんなに時間をかけないのですが、今回は違和感を極力排除するように難しいさじ加減が必要でしたので、時間を長めに取っていただきました。

和楽器ではないからと排除するのは極力回避

―蔦石さんが制作された8曲について教えてください。「国譲り」から順番にお願いします。

蔦石氏：国譲りとは天津神と国津神の「戦争」ですから、重い曲にしようということは早くから決まっていました。イベント絵でおどろおどろしい原画があがってきましたので、そのイメージを元に、各種打楽器やシタールを使って組み上げました。インドの楽器を使うことを最初は逡巡（しゅんじゅん）しましたが、時代背景等で使用楽器を縛ってしまうと、にっちもさっちも行かなくなるので、「和楽器じゃないから」と選択肢から排除することは極力避けました。これは他の楽曲にも共通して言えることです。

「虜」は、敵側のHシーン用とのことで、ジャズギターや少しだけローファイなピアノ等を用いて、淫乱っぽさを目指しました。スマートな雰囲気とは裏腹に、意外と難儀した曲です。こういった汎用の曲は、現代でも昔でも使えるようにしなければいけない、というのが『久遠の絆』の難しいところです。ほんの軽い気持ちで三味線を試してみたら、ドンピシャなハマリ方をして驚きました。

「豊葦原中國」は、大国主命たちの住まう宮城など、神聖な雰囲気を出すために作った曲です。神聖っぽさを目指したら、夜にも使える感じになりました。これを聴いてアレ？と思った方もいらっしゃると思います

収録曲一覧

01 久遠の絆
02 闇の扉、再び
03 光さす庭
04 闇への誘い
05 絆
06 君の笑顔が
07 涼しげな瞳
08 愁眉
09 久遠
10 蠢動
11 遠い日の想い出
12 昨日のように明日のように
13 散華…散り逝く花火
14 夏祭り
15 飛鳥
16 苦界
17 維風
18 十七の宝物
19 禁域
20 接触
21 戦いと傷痕と
22 土蜘蛛

が、この曲には巫女鈴のイントロや、柔らかいシンセリードのメロディラインなど、とくに風水さんのテイストを要所要所へ散りばめています。曲名にもそれが端的に現れています。

「君と過ごした日々」は、神代編の日常をシンプルに表現しました。神代編の中核ともいえる曲なのですが、いわゆる「民族楽器」はあえて使いませんでした。民族楽器を入れるのは常套手段ですが、ふと、時代は移り変わっても生活の根底は変わらないのではないかと思ったのです。腹が減れば食べ、誰かを愛せば子を成し、寿命が来れば死ぬ。日常とはそういった普遍的なもののリレーではないかと考え、現代と変わらないオーソドックスな構成にしたわけです。

「不穏」は、ミサキの憑依儀式や愛宕山など、怖い場所での「お化けがでるぞー」的な雰囲気を目指した曲です。音階を把握しにくいシンセパッドでおどろおどろしさを前面に強く出しました。最初の低い音はエレクトリックピアノなのですが、ただのエレピがここまで怪しい雰囲気を出せるとは予想外でした。この曲も風水さんのテイストを意識して盛り込んであります。

「みやび」は貴族の宴などのシーンのために、雅楽的なアプローチで作った曲です。これをSC-88で組むのは正直かなりキツかったです。箏や尺八ならともかく、龍笛や笙、羯鼓等の雅楽で使われる楽器はSC-88のようなMIDI音源にはほとんど入っていないので、途中、生録音の和楽器専用音源を何度使いたくなったことか……誘惑を振り切るのが大変でした。

「抱擁」は、「虜」と対になる愛に満ちたHシーン用です。これも「虜」と同じく、あらゆる時代で使えるようにする必要があったので、オーソドックスな構成にしました。とはいえ、Hシーンのお約束な構成というのがあるところを、この曲はあまり意識していません。普通は「さぁここからHシーンです、どうぞ!」な感じにするのですが、『久遠の絆』はエロだけを求めるものではないと思っているので、それまでの流れから自然に接続させたかったのです。

「夜の旅路」は、昭和編の、夜汽車で移動するシーンを念頭に作ったもので、個人的にお気に入りです。夜の暗闇を走る汽車のダウナーな感じと、その中で微笑ましい会話をしているみんなの楽しさ。そんな相反する要素をいい塩梅で両立できたのではないかと思います。あまり汎用性を求める曲ではなかったので、イメージがすぐに湧き、素直に制作へ取り掛かれました。

「一撃離脱」は、女妖怪版の「若神」として作りました。これは今作の肝となる曲で、ぴょんぴょんと飛び跳ねて一撃離脱するコケティッシュな戦闘の感じと、その中に若干の悲哀を混ぜました。箏に三味線、琵琶、尺八、和楽器のオンパレードです。他の曲はまさに「BGM」でしたが、この曲は意識してAメロ・Bメロ・サビというようにハッキリした構成にしました。

——最後にユーザーへ向けて、一言お願いします。

蔦石氏: 自分は今作から入った新しい風で、シナリオの加藤さんのように原作を作った側ではありません。ですが、以前から原作をプレイしてきた人間として、『久遠』の空気を大切にしたつもりです。あれ、この曲は風水さんのかと思ったら蔦石のだったのか、と感じられたら計画通りです。そして、その上で新規曲を気に入って頂ければ、制作者としてこれより嬉しいことはありません。

——ありがとうございました。

この曲は風水さんのかと思ったら 蔦石のだったのか、と感じられたら計画通りです。

23 みんなが、ここに、いる
24 転生
25 あなたを求めて
26 神威(カムイ)
27 若神(わかがみ)
28 黄泉比良坂(よもつひらさか)
29 御綾威(みいつ)
30 去りゆく君
31 時の降る朝(あした)
32 真秀ろば(まほろば)
33 過ぎゆく思い
34 一人ぼっちの少女
35 魔道
36 舞う雪の・・・(一人ぼっちの少女II)

新曲

37 国譲り
38 虜
39 豊葦原中國(とよあしはらのなかつくに)
40 君と過ごした日々
41 不穏
42 みやび
43 抱擁
44 夜の旅路
45 一撃離脱

制作者座談会

株式会社フォグ代表
宗清紀之（むねきよのりゆき）
脚本監修も担当するフォグ側のプロデューサー。代表作は『久遠の絆』シリーズ。好きなキャラクターは九尾。

株式会社ザウス代表
吉田ユースケ（よしだ）
ザウス側のプロデューサー。旧作にも携わる。代表作は『永遠のアセリア』。お気に入りのキャラクターは沙夜。

株式会社ザウス取締役 Team Kuon 代表
まさはる
原画担当。代表作に『聖なるかな』や『フローラリア』シリーズなどがある。宗清氏と同じく九尾がお気に入り。

平安編の起源を描くためにはどうしても神代編が必要だった

―最初に、リメイクすることになった経緯を教えてください。

宗清紀之氏（以下、宗清）：企画が立ち上がったのは2009年の5月ごろです。飲み会の席で、吉田さんから話を持ちかけられたのがきっかけでした。

―今回、章の構成まで変更したのはなぜですか？

宗清：旧作の平安編は『竹取物語』をモチーフにしているんですが、元々は、玉藻前がヒロインという設定だったんですね。これを復活させたかったんです。

―その設定が、旧作で実現しなかった理由は？

宗清：宮中が舞台なので、当時はやりにくかったんです。制作はかなり進んでいましたが、ガラリと変えて『竹取物語』を下敷きにすることになりました。

―神代編のアイデアは、そのときにはなかった？

吉田ユースケ氏（以下、吉田）：なかったですね。神様が出てくるといったことくらいで。

宗清：平安編を再構成するに当たって、その因縁の起源・オリジンを描くのに、過去が必要になったんです。

―新たな章の舞台として、昭和が選ばれた理由は？

宗清：モチーフにできそうな都市伝説を探していたら、パンプキン爆弾（模擬原爆）に行き着いたんです。服装的にも、先輩（天野聡子）の人型の前世を登場させるのに良さそうな時代だということで決まりました。

―先輩がヒロインとなるルートはありますか？

宗清：先輩とのEDはありません。クローズアップはされていますが、ヒロインではないという位置付けです。昭和編は文章量が最も少なく、エッチシーンもないですしね。書いても良いとは言ったんですが（笑）。

―神代編や昭和編では描き起こされた人物が登場するわけですが、絵柄がかなり旧作に近いですね。

まさはる氏（以下、まさはる）：今回のリメイクで、旧作ファンが気にされるのは絵柄だと思ったんです。実際に似ているかどうかは見る人によって違うとは思いますが、近づけるように努力しました。

―絵柄を似せるようにとの指示はありましたか？

まさはる：いえ、とくには。空気を読みました（笑）。ぼくの絵柄はどうでも良かったので。

―原画は最初からまさはるさんが担当することに？

まさはる：呼ばれて来て、やるからやれと。言われて即日開始でしたね。練習する時間もほとんどなくて、目や鼻の描き方とかの特徴を掴んだくらいで。

―資料の中に、そのイラストもありました。

まさはる：練習したのはそれだけです（笑）。

吉田：外部の原画家さんも4～5人リストアップはしたんですが、実際にお願いすることはなかったですね。

宗清：リメイク作品の原画って、ハイリスク・ローリターンな仕事なんですよ。やっぱりイラストは作品のイメージを決める大きな要素ですから。完全に違う絵柄になってしまうと、旧作ファンの中には、違和感を覚える方もいらっしゃるでしょうし。

―PCゲームとしてリメイクすると発表したとき、周囲の反応はどうでしたか？

宗清：最初は心配される声も多かったですね。

吉田：そうですね。発表からしばらくして、情報をお出しできるようになると変わってきましたが（笑）。

宗清：ぼくらは企画の立ち上げ当初にまさはるさんの描かれたラフなどを見せてもらって、手応えを感じていました。ただ、ユーザーのみなさんにお見せできたのは発表から半年後になったわけですから、その間、不安を抱かれたのは当然だと思います。「リメイクなのになんでオリジンなんだ」という質問も、答えたらネタバレになってしまうのでつらかったですね（笑）。

―発売日が当初の予定より延びてしまいましたが、

旧作の制作から12年が経って、ぼくらも経験も積んでいます（宗清）

久々に仕事しましたね……。仕事させていただきました（吉田）

――震災の影響などはありましたか？

吉田：いやー、とくになかったですね。会社は23区内にありますので、停電もなかったですし。

まさはる：ぼくも停電で、自宅で動かしていた音声プログラムが落ちたくらいでしたね。

――ということは、発売が延びた原因は……。

宗清：100%シナリオライターのせいです。いたく反省しております。申し訳ございませんでした！　いや、リメイクするのにこれほど苦労するとは思いませんでした。オリジナルを作るほうがよっぽどラクだったと思います。今更何を言ってるんだって感じですが。

――ちなみに、DC版やPS2版にあった『再臨詔』のシナリオは収録されるのですか？

宗清：『再臨詔』は入ってないですね。

吉田：ただ、今回のトゥルーエンドへのシナリオに、テイストは入っているかな。

デザインを通すために資料をたくさん添付する

――CGの作業はもう終えられましたか？

まさはる：ええ、終わっていますね。

――背景もザウスさんが制作されたんですか？

吉田：グラフィックは全部ザウスの担当ですね。

――CG制作にはどのくらいかかったんですか？

まさはる：7か月くらいですかねー。2010年の7月くらいから絵の仕様が出始めたので。

――描きやすいキャラクターなどはいましたか？

まさはる：男のキャラクターがすっごく描きやすかったですね。ぼく、かっこいいおっさんを描くのが好きなんですよ（笑）。したり顔というか、偉そうな顔をした。大国主とか。昭和編の久世鷹臣も、うまく描けたんじゃないかと思います。

――久世や天野由香里はまさはるさんがデザインを起こされたんですよね。由香里は4パターンも描かれていますが、いつもこんなに用意するんですか？

まさはる：ぼくの一存で決めたくないんですよ（笑）。

吉田：珍しいタイプなんですよ（笑）。

まさはる：いや、本当に気に入ったデザインにはこれが一番気に入ってますって書きますけど。例えば武日照は、両サイドに結った髪の下側を、丸めずに垂らしています。この髪型は、歴史考証的にはおかしいということだったんですが、ほかのキャラクターとの差別化や、シルエット的にこっちのほうが絶対に良いと思って。安彦良和さんのコミックとか、歌舞伎の衣装などを資料として付けて送ったりしましたね。

――気に入っているイベントCGはありますか？

まさはる：神代編の、玉葉が妖狐に乗って逃げたり、服を破かれるCGが気に入っていますね。エッチ以外のシーンで、色気のある要素を盛り込めたので。

――エッチな要素を重要視されているんですね。

まさはる：やっぱり今回は成年向けなわけですから。

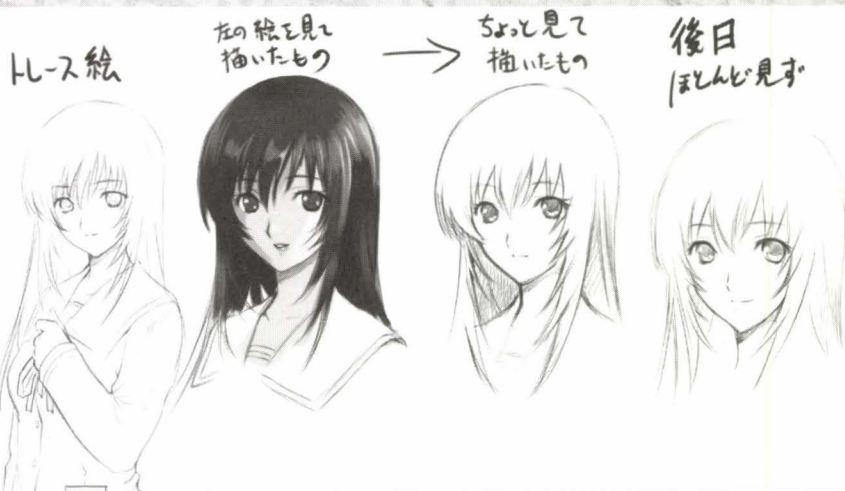
――エッチCGを描かれる際に気をつけたり、苦労されたことはありますか？

まさはる：今回は史実に基づいているのか、エッチの体位に、後背位の指定が多かったんですよね。プレイ的な要素はほとんどなかったんじゃないかな。ですから、同じポーズの見せ方をいかに変えるかという点に気を使いました。そのために、あえてお尻をドンと描いたり、関節に嘘を吐いたりした部分もあります。

――絵にメリハリを付けるという意味では、やっぱりグラマラスな体のほうが描きやすいのでしょうか。

まさはる：そういう面はありますね。

宗清：ただ、肉付きの良さについても個人の好みがありますから、難しいところではあるんですよ。

まさはる：スレンダーなほうが好きという方もいらっしゃるでしょうからね。今回は、エロさを出そうとしていますので、ちょっとお尻がデカすぎるんじゃね、

→まさはる氏によるラフイラスト。スケジュールに余裕がなく、原画を担当することが決まってから、練習に万葉を描いたのはこれだけだったらしい。一番左が、旧作の立ち絵をトレースしたもの。目や鼻の描きかたに注意したらしい。

という方にはごめんなさい、ということで……。

——ちなみに、みなさんが気に入っているのはどのキャラクターですか？

宗清：ぼくは武日照ですね。ワイルドで格好いい。表情とか、腕に入ったタトゥーとか。

吉田：昔は万葉が好きだったんですけどねー。今は沙夜先生かなー。何でもしてくれて、癒してくれそうで。

まさはる：ぼくは……土蜘蛛かな。手塚治虫さんのマンガとか思い出しながら、楽しんで描いてました。

——神代のキャラクターが人気ですね。そういえば、唯一転生しないで全編に出ている妖狐も神代から登場していますが、こちらについても教えてください。

宗清：あ、これが読まれるのは発売後か。じゃあ触れても大丈夫かな。妖狐は最近までオスだったんですが、メスに変わりました。それと、ぼくは九尾（万葉と妖狐が合体した姿）が一番好きです（笑）。

↑まさはる氏が気に入っているというイベントCG。胸の潰れ方や、破れた服、大腿などの描画に注力したとのことだ。

まさはる：じゃあ、ぼくも九尾が好きです（笑）！

——話は変わりますが、音楽を担当された蔦石那耶さんに、お仕事を依頼された経緯を教えてください。

宗清：外部の方なんですが、元々『久遠の絆』を好きでいてくれた人で、それが縁で以前にもお仕事をお願いしていたんですね。今回は、新曲を8曲制作してもらったほか、旧作の音楽を担当した風水の曲のリマスターなどもお願いしています。

——声優陣はどのように選んだのですか？

宗清：ザウスさんから候補を出していただいて、ぼくが決めました。みなさんお上手で、キャラクターのイメージ通りの演技をしてもらえましたね。選定は、栞と沙夜はすぐに決まったんですが、万葉と先輩は悩みましたね……。ユーザーさんにも意見を聞きました。

深夜の会社で作業中に キーボードを叩く音が！

——ところで、神様をゲームの題材にして、なにか祟りがあったりはしませんでしたか？

宗清：いやー、もう10年以上も神様の話を扱ってますからね……肩が重いのもそのせいですかね（笑）。

まさはる：祟りじゃないですけど、ぼく、心霊現象になら遭ったことがありますよ。会社で夜中に1人で作業していたら、後ろでキーボードを叩く音がしたんです。怖くてビルから逃げました（笑）。

吉田：社内で飼ってる犬が、何もないほうに向かって吠えたりとか（笑）。あとは……神様ものは、なぜか発売日が延びますね……。今度から、神様ものは避けて、歴史ものにするようにしようかな（笑）。

——制作が終わったら、したいことはありますか？

宗清：1人になりたいですね。いや、家に居るのが嫌というのではなく（笑）。1人でゆっくり寝たい……。整体にも行って、肩の凝りをほぐしたいですね。

まさはる：ぼくは旅に出ます。これはもう決めてまして、南の暖かいほうへ行って、頭をからっぽにします。

吉田：ぼくはすぐまた別のプロジェクトに入ることになりそうですが……。でも、行けるなら、出雲に行きたいですね。行ったことがないので。

人気さえ出たならば ファンディスクの発売も？

——ちょっと気が早いかもしれませんが、ファンディスクなどを制作する予定はありますか。

吉田：ファンディスクとか作ったことあるんですか？

宗清：昔、ぼくが作ってコミケで売ったんですよ。自分で実写の背景を撮って、シナリオも書いて。SDキャラを描いてもらって、スクリーンセーバーとかも詰めて。当時は結構売れましたよ。

吉田：へー、知らなかった。

宗清：ま、利益が出るならなんでもやります（笑）。

——それでは最後に、ユーザーのみなさんにアピールなど、ひと言メッセージをお願いします。

宗清：そうですね……お買い上げありがとうございます。このひと言に尽きますね。

吉田：いや、本当に……（笑）。

宗清：みなさんに楽しんでもらえるようなものを作ったつもりです。あと、中古で売らないでね（笑）。

まさはる：ぼくは、キャラクターの服装などに時代考証を反映させていますので、その点に注意してもらえると、楽しんでもらえるんじゃないかなと。ただ、軍服などはやっぱりミリタリーマニアの方には勝てないので、そこはお手柔らかにお願いします（笑）。

——本日はありがとうございました。

ヒロインの肉付きを良くして、構図にメリハリを付けました（まさはる）

『天野先輩の添い寝CD』に収録されている、天野聡子（声優:青山ゆかり）のセリフを一挙に公開! ユーザーからの投稿を含めた106のフレーズをすべて掲載している。あなたがベッドで甘～くささやいてほしい言葉はどれ?

「パパとママ、仲良く寝てるなぁ。私、娘だし川の字で寝るのはおかしくないわよね♪　ということでママには離れてもらって、うんっしょっとそれではパパとママの間にっと。お休みなさ～い♥」

「パパぁ……寝ちゃだめだよ～ずっとパパと一緒にいられるんだもん。もう、離れないんだから♪」

「パパぁ?　さびしいの?　雛が一緒にいるからもう大丈夫だよ!」

「もう……やっと気がついた。遅いぞ。どうして?　って。実は今までも、ただ貴方が気がついていなかっただけじゃないかしら。……だってこれまでも、いつだってずっとアナタの事を見ていたんだから。どう?　高原さんと比べて。結構自信あるのよ。ん～ほらほら♪　ウフッ。ねぇ固まってないで、こっち向いて。む?　先輩のおねーさんがサービスしてるんだからもっと嬉しそうな顔しなさい?ん……スリスリ。胸アッタカイ～。(パパ……大好き♪　chu)」

「私のスリーサイズ?　前に言ったと思うけど、今度は触って確かめてみる?」

「ずーっとパパにぎゅーってしてほしかったの」

「あなたの背中って大きいのね、こうしてるとすごく安心する」

「ママと仲良くするのもいいけど、私にも構ってくれないとイヤだよ?　パパのこと好きな気持ちだったら、ママにだって負けないんだから!」

「一緒にヌクヌクしよ♪　これからは毎日この寝顔を見れるのね……」

「パパぁ……あったか～い……。ふふ、もっと近くにきてもいいのよ?」

「パパの腕枕、気持ちイイね」

「おやすみのキスをください。もっとぎゅっと抱いて欲しい。悪い子だね私……」

「パパだぁいすき♥　なんてね、ちょろいわ。うそうそ、ごめんなさい。パパの事好きなくらいママの事も好きだから、だから今だけ……腕枕で眠りたいな」

「パパ、私が眠るまで頭を撫でていて欲しいの。だめかな?」

「子守唄よりももっと良いもの知ってるわ……特別な呪文よ……試してみようか……♪」

「パパの体でか～い♪　いつまでもこのままでいい?　こんな時にしか甘えられないからいいじゃない♪　ママには内緒だよ♪」

「えへへ、お邪魔しまーす。あぁ、パパの匂いがする♪　…………はぁはぁ。っと、いけないいけない。ママも寝てるんだった。でも、いいよね……もうちょっとだけ」

「元気ですかー!　……や～ね、冗談よ、ジョ・ウ・ダ・ン☆　あれだけ大暴れした後ですものね～。……ふふ……どうしたの顔隠して……。えい!　……ふふ、な～に、その情けない目は～。さっきのギラついた目は何処いっちゃのかしらねー。……ほら、こっち向いて。ちゃあんと私の目を見て……。お休みなさい……おにいちゃん☆　……ぷっ……はははは……本当貴方って可愛いわね」

「あんっ♪　どこ触ってんのよ～♪　パパのエッチ～♪」

「ず～～～～～～～っと、ぎゅっとしてて♪　もっと、も～～～～～～っとぎゅっとして♪　もう、離さないでね♪　パパ、だ～～～～～～い好き♪」

「パパ、わたしと一緒に寝よう!　……わたしが寝てる間、どこにも行かないでね　お・ね・が・い」

「……ねぇ……まだ、起きてる?　寝ちゃった、かしら……」

「っ、なんでもないの……呼んでみたくなっただけ。少し寝付けなくて……ごめんなさい」

「気にしないで。先に寝ていいよ。私は……眠れるまで、あなたの寝顔を見てる」

「え……私、不安そうな顔、してる?　そんなことないと思うけど」

「……敵わないわね。全部お見通しなんだもの……どうして眠れないのか、自分でも分からない」

「こうして隣にいられるだけで、幸せなはずなのに。時々切なくなるの。おかしいわよね」

「私は、ちゃんと幸せよ。これだけは本当。だって、こんな近くに大切な人のぬくもりを感じられるんだもの」

「そうね。もし私が不安がってるように見えるのなら……ぎゅって抱きしめて」

「何度も大丈夫だって言って……おやすみのキスして欲しい」

「ん……目、瞑ったよ。……キス……して」

「すぅ、はぁ……ちゅ、ぷ」

「夢みたい……今のキス、宝物にする。ずっと」

「ええと、頭の中が真っ白になっちゃった。うー……」

「そうだ。ママやみんなには内緒……二人の秘密にしておかなきゃ。抜け駆けしたって怒られちゃう」

「……怒られるのもいいかな……って、うそうそ。誓って秘密にします」

「そんなに心配なら、ゆびきりしてもいいよ。……はい、ゆーびきーりげーんまん」

「……ね。絶対に誰にも言わないから……もう一回、して。忘れたくないの……んぅ……」

「……はぁ。今度はおでこかぁ。残念。……ふふっ」

「本当に、もう一回おやすみのキス、だめ?」

「おでこにちゅーじゃなくて……ここ。唇。さっきのは突然で……ちゃんと分からなかった。ゆっくり、重ねて……。ん……」

「ちゅ、く……ちゅぷ……、ちゅぱ……」

「はぁっ、ふ……ごめんね。私、やっぱり悪い子です」

「ずっとキスしてたくなっちゃう……ちゅ……止まらない……」

「きゃっ……んむ……ぎゅって、してくれた……腕、あたたかい……キスも好きだけど、ぎゅってしてもらうのも、大好き」

「私を守ってくれる腕。……この腕が、私を掴まえていてくれるのね」

「……うん。安心した。この場所が、一番安心する」

「もう少しだけこのまま、抱きしめていて欲しい」

「今は、私だけのあなただって、思ってもいい?」

「あなたにも、私のことだけを想って、眠って欲しい。私の声も、顔も、体の形も、心も……記憶に焼き付けて」

「あなただけを愛している女の子が、今腕の中にいるってこと。感じながら眠って……」

「……ふふっ。優しさに付け込んじゃったかしら。でもいいわ。私は悪い子だし」

「……もう少しスリスリさせてね。……ふぅ……落ち着くなぁ」

「なんだかネコになった気分。暖かい腕に甘えながら、何も考えずにまどろむの」

「毎晩こうして一緒に眠れたらいいのにな。それってすごく贅沢かしら」

「腕枕の方が、お城みたいなお部屋のベッドで眠るより、ずっと贅沢かも。それくらい、この場所は特別」

「あ……笑った。いいじゃない、正直な感想なんだから。この腕枕は、世界一気持ちよくて安心できるのっ」

「……私もしてあげたいけど、ちょっと腕が細いかしら。それに……ん。しがみつくので精一杯」

「ぺたぺた……ふむ、興味深い。胸は分厚くて、体温が高い」

「やぁ、逃げないで。まだ調査中……じゃなかった。離れたらまた寂しくなるからぁ。大人しくしてるから、ねっ。戻ってきて」

「えぇと、そうだ。肩を揉んであげるわ。んっ、んっ……肩も広いわね……ん、ぅっ……気持ちいい?」

「今日も一日、お疲れ様です……と。もみ、もみ」

「ふふっ、帰ってきてくれた……なんだかんだ言って、私には甘いんだから」

「あんまり優しくされたら、私、勘違いするわよ。『もしかしたら、本当に私を女の子として見てくれるかも』……って」

「私でも、ちゃんと異性として、意識してもらえるかもしれない……って。ね」

「どうして目をそらすの。だめ、ちゃんと目を見て。ん……顔熱い……もしかして、真っ赤になってる?」

「うぅ、暗くて見えない……顔が見たいのにー。近づいたら、どんな顔してるか見えるかしら。……じー……」

「ん……偉い偉い。今度は逃げないわね……じー……」

「そう、そのまま。これから何が起きても驚かないで。すぅ……ちゅ、ぷ……」

「ちゅっ、ぢゅ……ぴちゃ……ぇる、れろ……」

「ぷ、は……舌、入れちゃった。ごめんなさい……さっきからしてみたかったの」

「子どもじゃないってところ、見せたくて……ちゅ、ぷ……ぴちゃ、ちゅぢゅっ……」

「忘れたの?　私は先輩でもあるのよ……私の方が年上のお姉さんなんだから……ちゅ。ちゅる……」

「ふ、ぁ……はぁっ、はぁ……キスって危ないわね。どこまでも、悪い子になっちゃいそう……」

「年下のいたいけな後輩にイタズラしちゃうえっちな先輩……うん、それもいいわね」

「ふふっ、ドキドキしてる。私にもお見通しよ。だってこんなに近くで、抱き合っているんだもの」

「そっか……こうして押し倒しちゃうのもアリなのね。勉強になったわ。ありがと」

「何の勉強って……決まってるじゃない。好きな人を誘惑して独占するための、よ」

「なにぶん、強力なライバルがたくさんいますからね。なりふり構っていられないわ」

「もう、また笑う。こっちは真剣なのに。……ふふっ」

「頭をなでてあやしたりなんかして……完全に子ども扱いね」

「……ま、いいわ。あなたになら、子ども扱いされるのも悪くはないし」

「父性愛に免じて、誘惑攻撃は我慢してあげますか」

「可愛がってくれてありがとう。いつもわがまま言っちゃうけど、ごめんなさい」

「くすっ……顔が見えないと、ちょっとだけ素直になれるわね」

「真っ暗な部屋に二人きり……なのに、全然怖くない」

「……こんなに気持ちが温かくなるなんて、知らなかった。こうして出逢えるまで」

「辛かったこともたくさんあったけど、でも、この気持ちなくさなくて本当に良かった」

「一緒に眠って幸せを感じられるのも、この体に心があるからだもんね」

「……遅くまで起こしちゃってごめんなさい。眠くなったら、寝ちゃっていいわよ」

「ふふっ……先に眠ってくれた方が、観察とかイタズラとかしやすいし」

「や、ぁ……また頭なでなでする……パパ、無理矢理私を寝かせる気だっ……」

「あやして寝かしつけるなんて……そんな手に乗らないわ……多分」

「ふ、ぅ……悔しいけど、気持ちいい。……なでなでされたら、本当に眠くなっちゃう……」

「んく……ぁ、ふ……寝ないもん……ずっと起きてるもん……ふぁぁ……」

「このままじゃ……私の方が、寝顔見られちゃう……恥ずかしいよぉ……」

「ん……ふわ……、……すぅ……むにゃ……」

「暖かくて、気持ちいい……ぽかぽかする……」

「今日は絶対……良い夢見ちゃうな……。変な寝言聞かれなきゃいいけど……ふふっ」

「うぅ……ずっと見つめられてる……照れるなぁ……も、もう、恥ずかしいから目を瞑っちゃうわね。……ぎゅぅ」

「……ねえ、パパ。明日も私を可愛がってね。うん、ゆびきりげんまん」

「……ありがとう。いろいろお話し聞いてくれて。嬉しかった……ふわ……」

「もう、本当に寝ちゃうかも……心臓の音を聞きながら……、……夢に……」

「すぅ……くぅ……、……ふぁ……ん、ぅ……パパ……だいすき……」

「パパも、ゆっくり……休んでね……」

「朝になったら、起こしてあげる……だから、それまで……おやすみなさい……」

貴方には全てを思い出して
もらわなくちゃいけないの。
そうしなくちゃ、
あの人の魂も救い出せない